
D2-Dream Devil-

宮村 鴻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D 2 - D r e a m D e v i l -

【Nコード】

N 8 7 0 4 J

【作者名】

宮村 鴻

【あらすじ】

現代のようだけれども、現代ではない。そんな町、青竜胆町くありんどうちよう。町で起こった猟奇殺人を皮切りに、青年たちは常識では理解できない闘いに卷込まれていく。その中で青年たちは何を選び、何を捨てるのか。

旧題名「御魂すくい e p . 0」

作中で、薬物の売買や、売春のような表現（極力ばやかしています）がありますが、これらの行為を推奨するものではありませんので、ご了承ください。また、作中の薬物は作者の完全な創作です。効能も形も想像の産物ですので、似たようなものが万が一ありましても、違うものだとご理解ください。

0、狂宴 - New Game - (前書き)

ほぼ始めから猟奇的な表現がありますので、ご注意ください。
人が殺される表現ですので、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

注意／警告が表示されていますので、閲覧後の苦情（気持ち悪くな
った等）はおやめくださるようよろしくお願いします。
表現方法については、未だ試行錯誤中ですので、ご意見がありまし
たら評価やメッセージなどをお願いします。

ご了承くださいただたでしょうか？

……では、物語の幕を開けるとしましょう。
皆さん、準備はよろしいですか？

H a v e a n i c e t r i p ! !

0、狂宴 - New Game -

プルタブを上げると一気にアルコールの匂いが辺りに充満した。

ルイは盛り上がる仲間たちの姿を遠目に見つつ缶に口を付ける。甘ったるいチューハイがルイの喉を焼いた。甘さに顔を顰めながらルイは、仲間たちが広げる白い錠剤を見やった。

「ルイ、お前本当にやらねえの？ せつかく分けてやるつつてんのにさあ」

「ごめん。俺、そういうのダメなんだ。アレルギーってやつ」

適当な相槌をうつて、ルイは静かに酒を飲む。白い錠剤が世間一般にいうドラッグというもののだと気付いたのはいつだったか。彼には叶えたい夢があるから、そういった類のものは使用しないことにはしているが、周囲にいる同年代たちには絶大な人気を誇っているようだった。

次第にクスリの効果が出始めた仲間たちは興奮して腕を振り回したり、気持ち良さそうに目を瞑ったりして酒の缶を傾けている。

暗い廃ビルの一室で繰り広げられる宴は異様な熱気を帯びて、青年たちのテンションもそれに合わせて上昇する。

そんな中、ルイが新しい缶に手を付けようとした時、事が起こった。

各々で見つけ出した椅子が倒される音が響き、一瞬、その場の空気が凍りつく。

音の発生源を探して見回すと、青年が青くなった顔で後退りをしながら、何かを叫んでいるようだった。

「な、なんでここにいるんだよ！ やめろ、くるな……、くるな！」

めちやくちやに腕を振り回し、壁に背を付けて何かを振り払うように暴れ出す。

ルイは突然の騒動に困惑はしたものの、他より意識がはっきりし

ている所為で冷静に判断出来てしまふ。青年に近寄るも、腕を振り回されてはなす術も無かった。

折角の良い雰囲気壊されて、その場にいた青年たちの空気が剣呑なものにすぐ変わってしまった。突き刺さるような視線が彼に向かうのに、彼はそんなものが目に入らないくらいに何かに怯えた目をして壁に寄りかかって座ってしまった。

「や、めろ、……くるな、嫌だ、殺さないで」

狂ってしまったかのように震えて定まらない腕で頭を抱え、足は必死に動かしても、腰を支えるほどにもならない。がちがちと歯がこすれて起こす不快な音が部屋の中に響いた。その異常な怯え方は青年たちにも感染したように、彼らは動く事が出来なかった。

「どうしたんだ」

一人が呆然と呟くその瞬間、うずくまった彼の腕が、裂けた。

「うぎやああああああ……っああ！！俺の、腕がつ！」

何者かに引きちぎられたように、肉が裂け、白い骨が顔を覗かせた。

腕は力を失ってだらりと垂れ下がり、悲鳴は途切れることなく続いて、続けざまに青年の脇腹が引きちぎられた。

「あ、ああ……、俺の、………」

辺り一面血の海で、彼の体から噴き出した血が呆然と立っていた青年たちの顔や服を真っ赤に染める。吹き出した血液が蝋燭の火を消し、辺りは暗闇に包まれた。しかし、それでもまだ終わりではなく、音だけになって青年への蹂躪は続いていた。

青年は何か飛びかかられたように勢いをつけて床に倒れ、彼の胸は何かのしかかられているようにつぶれている。喉が裂け、腹が裂け、腕が砕け、足が砕け、悲鳴が途切れ途切れになり、びくびくと身体が痙攣する。

その圧倒的な恐怖と混乱で周りにいた青年たちは誰一人、指一本でさえ動かす事が出来ない。

暗闇の中、肉の裂ける音と骨の砕ける音を聞き、嗅覚は強烈な鉄

の臭いに支配され、姿の见えないナニかの息遣いだけが、青年たちの足元を這う。

やがて、完全に気配が消え、物音一つしなくなった部屋の中で、誰かが小さく息を吸った。微かなそれだけの音で、彼らは金縛りが解けたようにその場に座り込んだ。

「何が、……」

言葉は続かなかった。

ルイは震える手で蠟燭に火をつける。

浮かび上がったのは、壁一面に広がる赤と、人間としての姿を失ったかつての仲間の悲惨な残骸。

「……っひ！」

何人かは口を抑えたが、胃に残るものを我慢出来ずに吐き出してしまふ。鉄の臭いに加え、餓えた臭いが辺りを埋め尽くす。

ここまで酷い状態になつてしまえば、死体自体を隠すには労力がかかるし、元より隠しきれないだろう。でも、この場をただの猟奇的な殺人現場に変える事は出来る。それには、床に散らばっているだろう白い錠剤の存在が邪魔だ。これが有るか無いかで、動機の手想も変わってくる。

「サトシのことはシンジさんには報告するけど、クスリのことはあの人に何を聞かれても絶対に言わない」

まだ、D2の影響でふらふらしている彼らを不安そうに見ながら、ルイは彼らに言い聞かせた。クスリの事は自分の居場所を守る為には、嘘をついてでも言つてはならない事だった。

ルイはそこにいた全員を先に帰らせ、不自然にならない程度に片付けを始めた。青年たちはなんの準備もなくおっぴらにクスリを広げていたのだ。証言がなくとも、証拠を見つけられてしまえば元も子もない。

血の匂いが充満する部屋の中でルイは一人、蠟燭の明かりを頼りに錠剤を探し続けた。

息の詰まるような匂いにルイは、満足に息も出来ずに黙々と地面を見続ける。涙が溢れてきた。どうしてこんな事になったのか、自問するも答えは出てこない。姿の见えないモノの犯行とはいえ、誰がそんな世迷い言を信じると言うのだ。当然疑われるべき人間は此処にいた人間たち。頼りにしている人間に疑われるのがどんなに辛い事か、想像しただけでも身体が震えた。

痕跡は全て隠さなくてはならない。どんな事をしても。

「これは、これは。大変そうだね」

「っ！！？」

存在を示すはずの物音を何一つ響かせずに、声だけがルイの背後から響いた。弾かれたように振り向いた彼の視線の先にいたのは奇妙な恰好をした男だった。

初めて見るルイにも分かるような、質のいい黒の燕尾服。乱れないその様はまるで執事のようだ。あまりにもこの場に不釣り合いな男の出現にルイは戸惑ったが、男の視線がルイの背後にある死体に向かってしていると気付いて、思わず男の視線を遮るように身体を動かした。

「あの……、これは」

「隠さなくてもいい。私には喋る気なんてないんだから」

「……本当に？」

「ああ、興味がないからね。いつ、誰が、どこで死のうが私には関係ない。自分のやりたい事を貫くだけだよ」

本当に興味が無さそうにルイから視線を外す男に、ルイは安堵のため息を吐いた。しかし、男は何故こんな所にいるのか。出来れば早々に立ち去って欲しいとルイは切に思った。この男がいる限り、片付けは進みそうにない。しかし男に背を向けたら最後、何か良くない事が起きるであろうと、ルイの頭の中で警報が響いていたのだ。

「そんなに怖がらなくても、君には手を出さないよ」

「そうじゃなくて、……お前、なんなんだよ。ただの人間じゃないだろ」

「……頭のいい子は好きだよ。でもね、今は必要ない」

男はそう言うと、一歩足を進めた。ルイはそれに呼応するように一歩後ずさる。そんなことを繰り返しているうちに、ルイは壁に追いつめられた。すぐそばに死体があるこの状況で、ルイに正常な判断は不可能だ。

「君は見捨てられるのが怖いのかい？」

男の声は鼓膜から直接吹き込まれたかのように脳の芯を刺激し、ルイは軽い目眩を覚えた。それは心の奥にずっと巣食っていた不安だ。誰にも言わなかったそれを言い当てられた事にルイは恐怖を抱いた。

「怖がらないで。……そうだ。私が話し相手になってあげよう。私は君の仲間には面識がないし、会うつもりもないよ。君は君が思っている事を素直に話してくればいい。解決策はあげられないかもしれないけど、話は聞いてあげられる」

警報が響く。誘われてはいけない、誘われてはいけないと自身に言い聞かせるほどに、男の目は怪しく輝きが増した。

「ほら、……おいで」

男がルイの目の前に手を差し出した。誘われている。もうルイは男の手のひらしか見えていなかった。

「私は君を裏切らない」

ルイの手が上がる。男の手に乗せようとしたが、動きが止まった。飛び散った血が、手にべったりと付いていたのだ。とっさに手を引いたルイを、男は許さずに手を掴んで抱き寄せた。身体にも返り血を浴びている。慌てて身体を離そうと、ルイは腕を突っ張ったが、男は気にせずにルイを抱きしめる腕の力を強めた。

「よ、汚れる……！」

「大丈夫。良く頑張ったね」

魔法の言葉だった。どうしてこの男は自分の欲しい言葉が分かるのだろう、とルイは思っていた。優しく頭を撫でる大きな手のひらが父親のようだ。おずおずとルイが男の背に腕を回しても、男の腕

は緩まなかった。

「今度、いつ会おうか？」

「俺はいつでもいい、です」

「あはは、かわいい。じゃあ、会いたくなったら電話して」

男は胸元から出したメモ帳に電話番号を書いて、ルイに手渡した。

「よし、片付けようか」

「え？」

「隠さなきゃいけないものがあるんでしょう？ それに二人で片付けた方が早い」

「まあ、そうですね…」

「ね？ だから、やっちゃおう」

ルイは男のテンションに乗せられる形で、片付けを再開した。もう、さっきまでの惨めさや虚しさはどこにもなかった。男は静かにルイと沈黙を共有し、ルイを助けた。

不自然さがない程度に片付けを終えた二人は一度死体に手を合わせてビルから出た。

うすぼんやりと山の端が明るくなっている。もうすぐ夜明けなのだろう。

「また会えるのを期待してるね」

陽の光を浴びる彼は元々黒い生地だったせいか血痕はあまり気にならなかったが、ルイは服も手のひらも血塗れで真っ赤に染まっていた。

「あの、ありがとうございました。……ええと」

呼びかけようと口を開いたものの、名前を知らない事に気付いてルイは躊躇った。

「一応バクって名乗ってる」

笑って言う男につられて、ルイも自然と笑顔になった。

「……バク、さん」

「そう。じゃあ、電話楽しみにしてるね」

男はひらひらと手を振ってルイに背を向けた。彼の背中が見えな

くなるまで、ルイは何となくその場に留まっていたが、ふと、自分の名前は教えていない事に気付いて、呼ばれない寂しさが胸を突いた。

そこまで考えて自分がすごく女々しい気持ちを抱いている事に赤面しながら、着替える為に家路へと踵を返した。

いつまでも浮かれていてはいけない。リーダーに、ビルにある死体の報告をしなければならない。

けれど、にやけてしまう顔を抑えられない。さっき初めて会ったばかりだというのに、次会った時は何を話そうかと、わくわくしている自分が不思議だった。新しい出会いに胸を躍らせながら、ルイは朝焼けの中を走った。

0、狂宴 - New Game - (後書き)

いかがでしたでしょうか。

これから物語は動き始めます。

少し長くなるかと思いますが、定期的に更新していきたいと思っていますので、よろしく願います。

酷評でもかまいません。

質問、感想、何かありましたら、ご遠慮なく評価やメッセージを
お願い致します。

1、騒動 - The First Day - (前書き)

携帯で見た時に4〜6ページほどになるように、
切っていきます。

1、騒動 - The First Day -

町中の廃ビルの一室。びょうびょうと吹き込む隙間風でさえ、臭いを完全に吹き飛ばす事は不可能だったのか、饅えた臭いと強烈な鉄の臭いが真司の嗅覚を容赦なく攻撃した。

「なんだ、これ」

「俺にも、分かりません」

眼前に広がる狂宴の痕跡に、真司は息を呑んだ。

朝一番に焦った様子で報告に来たチーム幹部のルイに連れてこられた先で、真司を待っていたのは理解不能の殺人現場。

真司は恐る恐る部屋の中に入って辺りを見回す。血は天井にまで吹き飛び、もう既に死体には蠅が群がっていた。元々綺麗に掃除されていた訳ではない為に乱雑としているのは仕方がないが、真司は死体には触れないように注意深く観察をして状況証拠を集めた。被害者は真司がリーダーを務めるチームのメンバーだ。彼の周りに溢れる血溜まりはもうすでに湿り気を無くし乾いていたが真司の行く先の床には、飛び散った血液を擦ったような跡と、血溜まりに残された足跡があった。

「足跡……？」

それはここに人がいた紛れもない証拠だ。

「……これを人がやったとは思えないが」

人がいたことは否定出来ない。

「シンジさん！　こんなの早く片付けましょう」

警察が出張ってこない内に死体を片付けるのは当然の事ではある、しかし、これが人の噂に上らないとも限らない。それが治安課の耳に入れば、調査に出張ってくるのは目に見えている。そうなる前に手を打っておく必要はある。

「片付ける前に、凌悟さんには言っておいた方がいいか」

「なに言ってるんですか。連絡すれば、治安課にも話が回ります。」

「こっちが不利なんですよ!？」

「でもなあ、これを人間がやれると思うか？ それともお前、何か知っているのか？」

尋ねた声は真剣だった。ルイの返答次第では真司としてもこの先の行動は変わってくる。

「いいえ、……何も知りません」

俯いて視線を逸らす。それで何も知らないというルイの言葉を信じられるほど真司は鈍感ではなかった。

それよりも気になるのは、被害者である彼が一人でいた訳ではないという事。この犯行が人間業ではないとして、彼の他にいた人間はどうなったのか。血溜まりの上に足跡があつたため、死体本人の足跡とは考えられない。暗い内に彼が死んですぐホームレスでも立ち寄ったのか、はたまた犯人のものなのか、今の時点で判別は付かないが放つて置いて良い事項ではない。

「何も知らないならいいな？ 電話はする」

「真司さん!」

敢えてルイのいい訳には何も触れずに話を進める。電話を咎める彼を後目に、真司は知り合いの刑事へ電話をかけた。

呼び出しのコールの間、真司は無残なチームメンバーの死に顔を見ていた。何故自分に何一つ告げずにこうなったのか。何故何もしてやれなかったのか。そんなことが真司の頭の中を巡る。

『もしもし、……真司か?』

「……あ、お疲れさまです。凌悟さん」

考え事のせいで真司は一瞬遅れた返事を返す。

電話口に出たのは低く、凄みのある声。一般市民にとっては信頼感よりも恐怖を覚える声だ。凌悟は真司の昔からの知り合いで、この町では一時期、知らない人は誰もいないほどの人物だったのだ。今はこうして堅気の仕事をしているが、弟分だった真司には未だに世話を焼いてくれる。

『こんな朝早くにどうした?』

「ちょっと、来てもらいたい所があつて。俺たちだけじゃどうしようもないんですよ」

オブラートに包んで状況を話す真司の心情を察したのか、凌悟はひっそりと溜め息を吐いた。

『抗争なら、治安課に行けよ。うちだって暇じゃあないんだ』

「そうなら良かった、つてやつですよ。抗争じゃ有り得ない。あんまり大事にはしたくないんで、一人で来てもらってもいいですか？」

「抗争じゃないんだな？」

「来てもらえば分かります」

尚も言い募る真司に根負けする形で、凌悟は了承した。

『場所は？』

「青竜胆町、クチナシビル」

『分かった。すぐ行くから、動くんじゃねえぞ』

「お願いします」

真司の返答が、向こうに届くか届かないか、という所で電話が切れ、通話終了を知らせる電子音が虚しく響いた。

「ルイ、お前は帰れよ」

「当たり前です。……何考えてるんですか。第一発見者って疑われるものでしょう」

「推理小説の読み過ぎだ。こんな人間に出来るはずねえだろ。それに、俺は昨日ここにいなかった。下手な事は喋らないさ。それより」

そこで真司は一端言葉を切り、ルイの身体を壁際に押し付けた。

「分からないって言ったの、嘘だろ。こんだけ酷い現状なのに、何で全然驚かないんだ？ 驚きすぎて何にも反応できないっていうのとは違う。まるでもう、一回見たから早く片付けたいって感じた。それとも、何か、隠したいものがあるのか？」

言い訳をすれば良かったのだ。しかし、彼の口からは都合のいい言い訳など出てこない。沈黙は即ち金。真司の問いかけを肯定したも同じだった。

「……っ」

「犯人だなんて思ってたねえんだから隠す必要なんて無いだろ？」

ルイはその言葉に顔を俯ける事しか出来ず、適当な言い訳さえ思いつかばない。

「話は事務所で詳しく聞く。俺が行くまで帰るなよ」

渋々頷くと、ルイは真司と顔を合わせる事無く、部屋を出て行った。

「馬鹿が、……」

小さく呟いた一言は誰に向けたものだったか。関与を黙り、部外者であろうとしたルイになのか、こんな事件が起こっているとも知らずに過ごしていた自分自身にか。リーダーという冠を付けられ、その地位に甘えていた時期が終わろうとしている。

「今までのツケが回ってきたのか……？」

そこまで考えた所でクラクションがなり、真司は意識を現実に戻した。凌悟が到着したのだ。

階段を降りてビルを出れば、事情を察してくれていたのか、地味な乗用車が横付けされていた。

車内から出てきたのは紺色のスーツを着崩した20代半ばの男だ。黒い髪を短く刈り込み、目は切れ長で眼光も強い。左目の上に大きな切り傷があり、それを隠そうともしない彼の態度が一層印象を悪くしていた。

「相変わらず、そこらの奴に引けを取らないすっね」

「言ってくれんじゃねえか。お前こそ、相変わらず派手な頭だな。よく目立つだろう？」

「好きでこの色にしている訳じゃないですよ」

真司は綺麗な赤色で生えてくる自毛をいじりながらぼやく。元から赤茶けた色だったのだが、光に当たると見事な赤色に見えるのだ。その髪色から、彼がリーダーを務めるチームの名前は「赤狼」と呼ばれ、リーダーのあの赤い髪は倒した奴らの血を浴びた所為だと専らの噂だった。もちろん前述の通り、嘘の噂だったが、いまだに信

じる者は後を絶たなかった。

「ごまかしてくるの大変だったんだからな。今度なんかで返せよ」

「お久しぶりです。元気そうでなにより」

安易な口約束はせずに真司がそう返すと、凌悟は逃げたな、と嫌味を言ったもののそれ以上は何も言わなかった。

彼を伴い、二階の現場へ案内すると、あまりの凄惨さに凌悟は呆然と口を開けた。

「……なんだ、これ」

それから恐る恐る部屋に足を踏み入れ、慎重に辺りを見回す。真司も後から部屋に入り、もう一度周りを見るが、やはり酷い。

「俺には分かりません。俺も報告を受けて来たらこうなってた。でも、何人かいたみたいなんですよね。足跡と、吐いた跡がある」

血溜まりで見つけた足跡と、吐瀉物が乾いた跡を示し、真司は凌悟に報告した。

「そうだな。……だとしたら、これは人間がやったことになるか？」

「可能だと思いますか？」

「……いや、無理だろうな」

腕や太腿、頬、腹。傷跡が残る部分には言葉通り噛み千切られたような跡。ナイフなど、人工的な物質では作れないと思われる傷ばかりが目立つ。

「他にいた人間はどうした？」

「さあ、分かりません。こいつの仲間だったのか、ただの浮浪者なのか、……死体は一つしかないし」

「誰がいたかは知らないのか？」

「……教えたいたいの山々なんですけどね。知りませんよ。こっちが聞きたいくらいだ」

器用に片頬だけを上げて真司は笑う。凌悟はその顔に残念ながら嘘を見つける事が出来なかった。元々嘘などないのだから、凌悟が必死に探した所で真実は闇の中、だ。

「そつえば、お前ガイシャの顔は知ってるのか？」

「俺のチームのサトシです。入った日とかは分かりませんが、古参じゃないのは明らかですね」

「相変わらず、チームの事でも興味ないんだな」

「……こうなれば、そもいかないですけどね」

チームの事でも最小限にしか興味を示さない真司は、そう思っている自分の事を認めていたし、幹部も認めてくれている。しかし、こうして被害が出てしまえば見ない振りは出来ない。チームのメンバーが安心して暮らせるようにするのが、チームとしての、またリーダーとしての義務だと思っていた。

「じゃあ、戸籍も充分に分からないな。それで？ 俺に何をしてほしいんだ？」

「治安課に圧力かけてくれませんか？ 抗争だと思われて邪魔をされるのは困るんです」

「お前、軽々しく言うなよ。管轄外だ」

「これが突発的なものだったらいいんですけど、もし、隠している他の事件があれば一大事なんです。こっちで片付けますから、このことは黙っててもらいたいんです」

「馬鹿が、事件を解決するのが俺たちの仕事だ。俺たちから仕事を奪う気か？」

「そんな訳じゃないんですけど、内輪のことは身内だけで解決したいんです」

「それなら、どうして俺を呼んだ？」

「管轄外だからです。治安課を呼べば、人間の仕業じゃないとしても、管轄内の事件には手を出してくる。そうすると俺たちが動き辛くなって面倒なんですよ。……すみません。お礼はちゃんとしますから、よろしくお願いします」

明らかに睨んでいる凌悟の視線を真っ向から受け、真司も譲らない姿勢を崩さなかった。しばらくの睨み合いの末、先に視線を逸らしたのは凌悟だった。

「馬鹿野郎が。……本当にヤバくなったら早めに俺に言えよ。何か

あつた後じゃ遅いんだ」

「すみません。お礼は今度、必ず……」

「当たり前だ。今度なんか奢れよ」

そう言つて凌悟はビルを出て行つた。

車のエンジン音が遠くなつていくのを聞きながら、真司は幹部のアキタに連絡を取つた。

「今動けそんな奴で、サトシと知り合いじゃない奴を何人かとブル―シートと軍手を足付きでクチナシビルまで」

『随分急だな。何かあつたのか?』

「チヒロにでも聞けよ。知ってるかもしれないぞ。とにかくお前も来いよ。……スプラッタは覚悟しておけ」

そうして電話を切る。アキタが来るまでには一通りの準備をしておかなければならない。普段から愛用している作業用のつなぎのポケットから軍手を取り出した。

改めて死体の青年に向かつて手を合わせると、足を掴んで入り口付近まで引きずつた。いくら何でも成人男性の身体を持ち上げることは出来ない。ましてやぐしゃぐしゃに崩れてしまっているのだ。引きずっている途中、青年のポケットからピルケースがこぼれ落ちた。一度足を下ろして、真司はピルケースを拾い上げた。ケースを振ると、カチャカチャと音が立ち、中身が残っている事を真司に知らせる。軍手を外して中身を取り出すと、白い錠剤が何個か手のひらに転がつた。

「何だ? ……これ」

匂いを嗅いでみても無臭で、じっくり見てみても見た目は市販品と同じだった。後違ふのだとすれば味、だろうが、きっとこれはやめた方がいい。真司はつなぎのポケットに仕舞い直した。引き続き、引きずり続けると、階下からガヤガヤと話し声が聞こえてきた。

「シンジ! どこだ?」

「二階だ!」

階下からのアキタの声に真司は大きな声を出して、二階に上がつ

てくるように指示をした。入り口を出て階段の前に陣取り、アキタを待つ。アキタは上背がある所為でどうしても威圧感がある。大柄な体型に短く切った焦茶色の髪で良く日に焼けているものだから、クマ、と称される事が多い。アキタが連れて来た人員も似たり寄ったりでみな様に体格が良かった。血でべったりと汚れた真司の軍手に眉をしかめて、彼は階段を上りきる。入り口に無造作に倒れている遺体を前にアキタは小さく息を呑んだ。

「……まじか」

開口一番、アキタが言った言葉がこれだ。入り口まで引つ張ってきた遺体はすでにぼろぼろと形を崩し、今にも崩れ落ちてしまいそうだ。噎せ返るような血の臭いに四苦八苦しなから、ブルーシートでサトシの身体を包み、部屋から運び出した。

アキタと一緒に来たメンバーはみな目を逸らしたり、口を押さえたりしていたが誰一人リタイアするような者はいなかった。さすが、アキタが連れてきただけはある、と真司が一人納得する間に人型のシートは車の中に押し込まれた。

「ひとまず、これを埋葬してやってくれ。俺は色んな奴らに話を聞かなきゃならん」

「もう知ってるかもしれないが、一応モモとチヒロにはお前が連絡しろよな」

「分かった。……嫌なことやらせるな。すまない」

「気にすんな」

裏口からワゴンを出し、一同を解散にさせた後、真司はチームの情報司るモモとチヒロの二人に連絡を取り、今回の件を出来る限り隠蔽するように言った。

ビルの表にはすでに人だかりが出来始めている。どこから漏れたのかは分からないが、風の噂やたまたま通りかかった人々が集まり、あつと言う間に野次馬の集団を作ってしまったのだらう。血の匂いは消えそうにない。

ここまで来ると情報自体を隠蔽することは不可能になってしまっ

たが、混乱させるくらいならやってのける。真司はそう仲間に期待をして、ビルから背を向けた。

「……ん？」

野次馬の中に異質な雰囲気を感じて、真司はそつと振り向いて神経を研ぎすませた。姿は見えなかった。ただ、ソレがいるその場だけが、別の場所とは異なる雰囲気になっていただけだ。

「嫌な感じだ」

雰囲気だけに舌打ちをして真司は事務所へ急いだ。

1 | 2 (前書き)

前回の続きです。

「ルイ、待たせたな」

「待ってません」

「だろうな。……まあいい。それで？」

今は部屋にルイと真司の二人だけだ。ソファに座る真司の前に立たされて、ルイは居心地悪そうに身じろぎした。今までルイは幹部として真司と何度も対峙して来たが、これほどまでにどうしていいか分からないことなど無かった。口の中がカラカラに乾き、舌が上手く回らない。朝の浮かれた気持ちなんか一瞬で吹き飛んでしまった。

彼はこんなに恐ろしい存在だっただろうか。

「昨日はどこにいた」

口元は辛うじて笑っているものの、目を見ればそうではないことくらいルイには分かっていた。

「あそこにいたんだろう？ 俺は警察じゃない。事件を解決しようなんて思っちゃいないんだ。どうしてあんなったのか話が聞きたいだけだ」

「あそこは、……俺たちの遊び場で。昨日もみんなで酒持ち込んで、騒いでいただけだったんです。でも、騒いでたら、いきなりあいつが、……」

「あいつってサトシか？」

「はい、……突然、叫んだんです。来るなって、何回も。意味が分からなくてみんな茫然としてたら、急にあいつの腕が裂けたんです。後はもう何がなんだか。あつと言う間に血が、すごくて、俺らまで血塗れで」

ルイは言葉を切った。血が下がっているのが分かる。握りしめた

指先の感覚さえ無かった。

「……すまない。つらいこと、思い出させたな。前日までに何か変わった事はなかったのか？」

「はい、……」

深く追求してこない真司を有り難く思いながら、ルイはそつと息を吐き出した。これ以上聞かれると、言いたくない事が出てきてしまう。例えば自分が手を出していなくとも、あの白い錠剤のことあの男のことは真司には知られたくなかった。

「分かった。あ、後一つ。サトシはいつもそのビル以外にどこにいた？」

「どうしてそんな事、聞くんですか」

「俺が知りたいだけなんだ。なんで、あいつはあんな死に方をしなきゃいけないかったんだろうなって」

「やめてください。それで、シンジさんまで死んだら、俺は……」

……

真司の胸元を掴み、心配、という感情を込めて見上げる。真司は元々身内には甘い。こうしておけばしばらく真司は自分に目を向けないだろう。そう踏んでの行動だった。

案の定、真司は厳しい表情を和らげ、そつとルイの手を外させた。「いくら俺が周りに執着してないとしてもな。被害者が出てしまった以上見ない振りは出来ない。抗争ならまだしも、理不尽に殺されたんだ。何があいつを殺したのか。知っておきたいんだ」

優しい優しいリーダーの為にルイは口を開いた。どうか、いらん所にまで手を回しませんように。

「サトシは、西区のオアシスってクラブによく行ってました。友達があそこによくいるとかで」

ルイのしおらしい様子の外形だけを受け止めて、真司は彼の頭を撫でて微笑んだ。

「ありがとな。お前もあんまり外出んなよ。危ない事に極力手は出さな」

じゃあな、と手を振って真司は事務所を後にした。
まずいことになった。もう一度、自分に疑いをかけられる前に、
錠剤のことを隠さなくてはならない。ルイは表面上では極めて落ち
着いて携帯を取り出した。

オアシスは、青竜胆町の中では比較的キャパの大きいクラブだっ
た。昼間の今では普段の賑わいは見られないが、防音の効いた室内
とカウンター、少人数用のソファにテーブルが揃っているそこは仕
事のない青年たちがたむろするには打ってつけの場所だ。

小さな音でかけられているクラブミュージックの中で会話をする
青年の中に知った顔を見つけ、真司は声をかけた。

「急にすまん。ちよつと、サトシのことで聞きたい事があるんだ
が、いいか？」

「えつと、……シンジさんも昨日のこと聞きに来たんすか？」

「なんだ。お前らもいたのか？」

「いえ、……そういうわけじゃないんすけど、チヒロさんから、チ
ームの仲間は知ってた方が良くからって連絡がきたんです。それか
らシンジさんより前に変な野郎が来て、サトシとか、チームについ
て何か知ってるかって聞きにきたんですよ」

「……そいつはどんな恰好をしていた？」

「えつと、グラサンかけて、帽子かぶって、……犬、連れてました。
茶色いでかい犬」

「ほお」

話を聞けば随分小綺麗な恰好をしている。定職に就いている人間
さえ少ないような町で、目立つような恰好をしていれば、さまざま
カツアゲの対象にされてしまう。そんな所に来て何をしているのか。
目的は何にせよ一度、話を聞かなくてはなるまい。

「……シンジさん？」

彼らの声にはたと我に返って、真司は話を戻した。

「すまん。サトシだけど、何か変わった事は無かったか？ 急に羽振りが良くなったとか。普段行かないような所に出入りしていたとか。何でも良いんだ。何か、知らないか？」

「特にありませんよ。俺たちずっと一緒にいたし、俺たちが知らない事なんて」

「そうか。……じゃあ、普段は何してるんだ？」

「は？」

変わった所が特にないのだとすれば、何かあるのは日常の方だ。

「ええと、普段は、こことか、別のクラブに行ってダベったり、ゲーセン行ったり。たまにバイトして、夜はまたここで飲んだり、別の所行ったりですよ」

「クチナシビルに行った事はあるか？」

「ああ、あそこは倒壊の恐れがあるとかで全然人が来ないんで、絶好のたまり場になってますね」

「……じゃあ、これは？ 見た事あるか？」

そう言って真司が取り出したのは、ピルケース。

それを見た途端、そこにいた青年たちの顔色が変わった。明らかに目線を逸らし、誰も真司の方を見ようとはしない。その表情の変化を真司は見逃さなかった。

「いや、……それは、見たことないです」

「どれなら見た事あるんだ？」

「そうじゃなくて」

「さて、……お前らは何を知っている？」

真司の顔は辛うじて笑っているものの、目を見ればそれが本当の笑顔ではない事はすぐに分かる。夜を支配するチームのリーダーに相応しい恐怖をまとった彼に逆らう事など出来るはずもなかった。

それでも、青年たちはなかなか口を割らない。痺れを切らした真司は譲歩に出ようと口を開く。

「クスリやってたらひどい目に遭うっていうの、信じてるのか？」

「えっ……！？」

真司は所謂ドラッグと呼ばれるものが嫌いだ。彼もチームに属するものだから、人に迷惑をかけるのは多少仕方ない事だと思っている。しかし、ドラッグは健康にも悪いし、なにより自分の人生を棒に振る行為だ。

そんな愚かな行為を真司は自分もしたくなかったし、周りにもさせたくなかった。その心情がチームの決まりにも反映され、「クスリをやったらリーダーからの制裁がある」といつしか噂されるようになったのだ。

「や、だって、実際にボコられたの見た事あるし。ルイさんにも何回も言われて……」

「ルイが？」

「いや、……何でもないです」

ルイが何を言ったのかも気になる所ではあったが、今はそれどころではない。気持ちを切り替えて真司は口を開いた。

「素直にしゃべれば考えてやるよ。俺は隠されてるのが一番嫌いだんだ」

ニヤリと意地悪く笑顔を作れば、青年はぶるりと身を震わせた。

「……D2って知ってますか」

「D2？ 知らない」

「これは、ほら、錠剤で飲みやすいって評判で。この辺りで流行ってるんです」

「へえ、なるほど？」

青年は自分が墓穴を掘った事に気付いただろうか。

真司は改めて、ピルケースから錠剤を取り出してまじまじと観察した。見た目も大きさも市販されている薬と大差なく、飲み込むのも容易いだろう。これでどれくらいの人的人生が狂ってしまったのかと思うと、真司の胸は痛んだ。

「ええと、もういいですか？」

おそろおそろ口を開く青年に、真司は再びにやりと口角をあげた。

「出せ」

命令は至極簡単に。しかし、言われた方の青年たちは一斉に目をそらし、誰も動こうとはしなかった。

「持ってたんだろう？ 早く出せよ」

青年の目線は真司とは合わない。合わせる事ができないイコール隠し事があると言っているようなものだ。

「出せつつってんだろ。つまんねえ嘘つくなよ」

語気を押さえた声に青年たちは噂と恐怖を思い出したのか、我先に、ポケットの中からピルケースを出し、テーブルの上に置いた。

「これで全部？」

「全部です！」

びくびくと震える青年たちは、これから襲いくるであろう暴力への恐怖で身動きが取れなかった。

「今度やったら……わかつてるよな？」

青年たちが赤ベコのように首を上下に振る様は見えていて滑稽だったが、溜飲が下がる程度ではない。

ピルケースをポケットに入れ、真司は席を立った。彼自身、こんなことで彼らがやめるとは思わなかったが、忠告はした。これで止めなければ制裁もいとわない心持ちだった。

「チヒロに渡しといった方がいいだろうな」

情報収集が得意な幹部の顔を思い浮かべながら真司は呟いた。行動は早い方がよい。それに、ルイがそんな彼らと交流を持っていた事も真司は気がかりだった。もしかしたら、無意識の内に巻込まれている可能性があるのだ。

「……アキタも、だな」

ジーンズのポケットから携帯を取り出して早速チヒロへ電話をかけた。落ち合う場所は事務所だ。すぐに向かう、という返答を確認してから真司は電話を切った。

部屋の静寂を切り裂くように携帯の着信が鳴る。ルイは渋々、手に取るとディスプレイには、昨日の現場にいた一人の名前が乗っていた。

嫌な予感がしたが、いつまでも鳴り続ける携帯もうるさい。通話ボタンを押し、耳に当てると焦って呂律の回らない声で、真司に話してしまったことと、ピルケースを取り上げられたことを告げられた。

「……黙っててっていったよね。ああ、もういいよ。期待した俺が馬鹿だった」

言い訳は聞かずに通話を切って、ルイは溜め息を吐いた。

意味もない事をしてしまった。折角片付けたのに、結局は真司に見つかってしまった。使ってはいないけれど、きつと疑われた。一番疑われたくない人に、疑われてしまう。

真司はそんな人じゃないと思っではいても、不安は急速な勢いでルイの心を支配した。

持ち帰っていたバクの連絡先が書かれたメモを開く。11桁の数字で電話をかければ、バクへとつながる。

『私は君を裏切らない』

バクの声が聞こえた気がして、ルイは携帯に数字を打ち込んだ。

1 | 2 (後書き)

まだ続きます

1 | 3 (前書き)

前回の続きです

事務所の扉を開けば、そこにいたのはブルーブラックの髪を持つ中性的な顔立ちの女とアキタで、ブルーブラックの彼女は優雅に力ツプを持ち上げた所だった。

「チヒロ」

呼びかけに彼女は真司に顔を向けた。光の加減でほんの少しだけ青く見える髪は、項をくすぐる程度に整えられ、その髪が映える肌は驚くほどに白い。更に、釣り気味な目が彼女の甘さを消し、余計に彼女を少年のように瑞々しく見せた。そして、彼女は普段、身体ラインをぼやかす服を好んで着る。今もジーンズにパーカーを羽織り、中のＴシャツは緩めの仕様だ。

「おかえり、真司」

「仕事だ。頼めるか？」

「もちろん。今日の朝だつて仕事みたいなもんだつたし、やらなきゃいけないことは一緒だよ」

それに加え、この言葉遣いだ。その為、彼女を知らない者は、一度は必ず彼女の性別を間違える。

真司はチヒロの向かいに腰を下ろし、ピルケースをがさりと机に置いた。

「これはまた、大量だね」

チヒロは足下に置いていた荷物の中から薬包紙を取り出し、ピルケースから錠剤を取り出した。矯めつ眇めつ観察し、一嘗めする。

「……夢魔だね。なんでこんなもの持つてるの？」

「うちの雑魚どもが持ってたんだが、D2って言うんじゃないのか？ あいつらはそう呼んでいたが」

「夢魔だから『Dream Devil』。で、頭文字を取ってD

2。元々は夢魔って名前だったんだよ。それにしても、殺っちゃわなかった？」

顔を歪めて真司を見る彼女に肩をすくめてみせる。

「情報との交換条件だからな。手は出してないが、忠告だけはしておいた。それでやめなければ、制裁するまでだ」

「一応名前、聞いておきたいんだけど、分かる？」

「あー、……顔は分かるかもしれん」

「だよ。その程度だと思った。オアシスにいる奴らだっけ？」

「そうだ」

「分かった。後でモモに聞けばいいや」

「……すまない」

「いいよ。今は把握してなきゃいけない理由もないし。で？ 今になつてなんでこれが出て来たの？」

「それが、……サトシもやってみたいなんだよ」

「なるほどねえ」

サトシも言えば、チヒロの目は細められ、ソファの背に寄り掛かって腕を組んだ彼女は唸った。

「やっぱり、流行ってんのか？」

「うーん、……一番は飲みやすいからだね。後遺症も出にくいって噂だし。まあ、でも、これが出始めたのは一ヶ月前くらいで、後遺症もなにもこれからって感じだけど、一回一回の後遺症は無いに等しい。値段も手頃で、30粒で1万だから」

「それ、安いのか？」

「安くはないけど、5gで1万とか言ってるのよりは、ね」

薬包紙で錠剤を包むと、チヒロはそれを鞆にしまい込んだ。

「成分表で良い？」

「いや、それは見ても分からないだろうから、それよりも常用した場合の症状について探って欲しい。サトシもきつと何かあったはずなんだ」

「おっけ。流通経路も調べた方が良かな？」

「こちらでも聞いておくが、念のためお願いするよ」

「了解。ネコに頼むの？」

「ああ、それと、モモだな」

「所で、俺は何の為に呼ばれたんだ？」

真司がチヒロと話し始めてからずっと放置されていたアキタがとうとう口を挟んだ。

「働かせっぱなしですまない。アキタにはルイを見ててもらいたんだ」

「……坊主を？」

今までの話の流れなら、ルイは何の関係もない。アキタは真司が何を言いたいのかわからずに、眉間に皺を寄せた。

「昨日の現場にあいつもいたらしい。でも詳しい事は何も言ってくれない。まだ、何かありそうなんだけどな」

「おい、……坊主のこと疑ってんのか？」

切り捨てとも思える真司の言葉にアキタの心中はとても穏やかでは居られず、気を抜けば彼の胸ぐらを掴んでしまいそうなくらい頭に血が上っていた。殺意剥き出しなアキタと真っ向から向き合って、真司は強く言い張る。

「違う。……何かあつてからじゃ遅いんだよ。あいつも同じ現場に居たということは狙われる可能性がゼロじゃないってことだ。もし万が一何かあつた時でも、お前がついててやれば少しは安心できる。後は、あいつの交友関係も何気なく見ていてくれると嬉しい」

「……やっぱり疑ってんじゃねえか」

「人聞きの悪いこと言うなよ。ヤバい奴とつるんでないか心配してんだ」

剣呑な空気を払拭させるように、何個かあったピルケースの内の一つをその場に残し、チヒロは席を立った。真司のために残したのだ。

「後は、あの刑事さんにもあげてよ。僕は真司の考えに賛成だから、そういうのが検挙されるように頑張ってくださいって言うてお

いて」

「分かった」

「それから、ああいう死に方したのはサトシだけじゃないよ。正確には今日で三人目。前の二人は弱小のチームだから、チームはそのまま解散しちゃったけど、似たような死に方だったみたい」

「そうか……」

そうして何かが動き出そうとしている。それは足音を立てずに、ひっそりと青竜胆町を埋め尽くそうとしていた。

残りはまた明日に回した方が良さだろう。夜が更けてきた。

「急に呼び出してすみません」

ルイは行きつけの図書館の前の公園にバクを呼び出した。本当はこんなにもすぐに電話をかけるつもりはなかったのだが、蓄積された鬱憤を誰かに話を聞いてもらいたくて、でも、チームの誰かに話す訳にはいかなかったのだ。

「時間大丈夫ですか？」

「いいよ。用事も特にないし」

「そうしていると、普通に見えますね」

「服かい？」

バクはルイが初めてあつた時とは違い、今はジャケットにジーンズというラフな恰好をしている。初めてが印象的過ぎた分、普通の恰好をしていると、イメージががらりと変わったように見えた。

「私だっていつもあの恰好をしている訳ではないよ。あれは一種の仕事着だからね。君と会った時だって仕事帰りだったんだ」

燕尾服を着て、廃ビルに出現したのが仕事帰りとは、一体なんの仕事をしているのやら。

余計に胡散臭く思えてきたバクを見遣ると、彼はルイの視線に気

付いて苦笑した。

「君は私のことを『ただの人間じゃない』と言ったけれど、本当に人間じゃないって言ったら君は信じるかな？」

急に言い出したバクにルイはすぐには反応できない。見た目は明らかに人間なのだ。実在もしているし、触れる事だって出来た。

「獺っていつの。知らない？」

「動物でなら、聞いた事はあるかも……」

「私が言ったのは、夢を食べるとされる妖怪の獺だよ。主食は悪夢。悪夢を見た後に「この夢は獺にあげます」って言うと、悪夢を見なくなるらしい。私はその亜種みたいなものだよ。私の主食は夢全体。良い夢であればあるほど、美味しくいただける。美味しい夢を食べる為に日夜奔走していると言う訳だ」

「……妖怪」

「ああ、ごめん。妖怪というのは厳密にいうと嘘なんだ。妖怪も所詮は人間の作り出した虚構、ファンタジーだからね。私は性質が獺に近いだけで、獺ではなく、そういうイキモノだと思ってくれればいい」

回りくどい言い方を好む彼が、本当は人間ではないという。にわかには信じられずにルイは口をつぐんだ。

「うーん、やっぱり、すぐには信じてもらえないよね。今はそれでいいや。……とと、私ばかり話していたらダメだね。折角、君の話を聞きに来たっていうのに」

大げさな仕草でルイへ謝罪をし、バクは身体の向きを変えた。とはいえ、饒舌に喋られた後を継ぐのは正直やり辛い。

「話すの、苦手なので、うまく話せませんよ」

「大丈夫。気にしないよ。ゆっくり話してくれていい」

バクは身体力を抜き、ルイにもリラックスするように言った。深呼吸の後、少しだけ落ち着いた様相を見せる彼を見て、バクは満足そうに頷いた。

「君の話が聞きたい」

バクの言葉に促されるように、ルイは息を吸い込んで口を開いた。
「昨日、あの場にいた奴らに、絶対にクスリのことはシンジさんに言うな、って言うておいたんですよ。でも、口、滑らしたみたいで
す。折角口止めておいたのに、それじゃあ、意味がない」

「どうして？」

「ウチのリーダーが徹底してそういうのが嫌いなんです。それに、
あの場所には俺もいた。色々と疑われない方がおかしいです」

「色々とって？」

「クスリ使ってたんじゃないか、とか、あの事件と関わっているん
じゃないかとか」

「事件に関わりがあるのは本当だから仕方ないとして、実際、君は
使ってないんだろう？」

バクの問いかけに頷くものの、ルイの表情は晴れない。

「疑われるのが怖い」

「……君は、被害妄想の気があるんじゃないのかい？」

「だって俺は、ここしか居場所がないんです。喧嘩も強くないし、
情報網を持っている訳でもない。赤狼から出たら、俺はこの町では
暮らしていけないんです」

チームとは個人々々の隠れ蓑、とはリーダーがよく使う言葉だ。

他のチームは分らないが、ルイの所属する赤狼は、喧嘩をする為
のチームでは無く、夜の町で危険に脅かされているものにこそ門戸
が開かれていた。

「赤狼は人数が多いし、リーダーがシンジさんだから、それなりに
ネームバリューがあるんです。カツアゲとかにあっても、赤いバン
ダナを身につけていれば、それなりに効果があります」

「赤い、バンダナ？」

「赤いバンダナは赤狼の証です。これをしてれば、狙われる事が少
なくなります。シンジさんはチームに関わることだったら興味を持
つから、チームのメンバーが襲われたとなれば、復讐にかかるこ
とだってあります。復讐を恐れて、他も手を出してこなくなるんで

すよ」

「なるほどねえ。君がチームから抜けるような事があれば、その恩恵が受けられなくなる訳だ？」

にやりと、口を歪めて囁くバクの声にルイは肩を震わせた。自身に罪悪感と劣等感があるからだろうか。だから、自分が幹部に
いる事が信じられていない。自分は本当にここにいていいの
だろうかと、常に考えてしまう。

「誰も悪いとは言っていないよ。それが君には必要な事なん
でしょう？ 喧嘩が強いだけじゃ、本当に強いことになんて
ならないからね」

思考が鈍る。このままでいいのだと、錯覚する。

ルイが欲しいと思う言葉をくれるバクの声が心地よかった。

「ありがとうございます。なんか元気になりました」

ほつと息を吐いて、ルイはバクに頭を下げた。もやもやといらい
らが一気にどこかへ行ったようだった。

「それは良かった」

言いながら、バクは立ち上がってジーンズの尻を叩いた。それ
を見たルイも立ち上がる。話はこれで終わりだ。

「また、連絡してもいいですか？」

「遠慮しなくていいよ。ダメな時はちゃんと言うから」

じゃあ、またね、と言ってルイに背を向けたバクに、ルイはもう
一度声をかけた。

「バクさん！ 俺の名前は、ルイです」

「……分かった。またね、ルイくん」

急に名乗ったルイに驚いたものの、すぐにルイの言いたかった事
に気付いたのか。バクはルイの名前を呼び、今度こそ歩きだした。

「また、連絡します」

囁いた声はきつとバクには届かなかったが、ルイは満足そうに笑
い、帰路についた。

1 | 3 (後書き)

まだ続きます

1 | 4 (前書き)

前回の続きです

事務所を出た後、潜入捜査が得意なネコと呼ばれている幹部へ電話をかけた。彼にD2の流通経路についてオアシスを中心に調べるように頼んだ真司は、ぶらぶらと自宅へと夜の町を歩いていた。

「……静かになったもんだな」

事件は表立った動きは見られず、水面下で全てが進んでいく。今日でさえ、静かな闇の中で事件が起こっているのだろうか。

「嫌な空気だ」

ぴりぴりと空気が張りつめていた。

ふと同じように張りつめていた真司の神経が、何かを感じ取った。思わず立ち止まり、辺りを見回すが気配はない。しかし、襲いかかってくるかもしれない。チヒロが残っていたD2を持ったままだ。先程の彼らを取り返しに来たとしても不思議ではない。

深呼吸をしながら真司が周りの気配を探ると、闇の向こうから足音が聞こえてきた。

音からしてスニーカーの類だろうが、その他にもう一つ音があった。こちらは地面を引っ掻くような随分軽い足音だったが、油断は出来ない。真司はさり気なく街灯の下に移動し、明るい所での勝負に出ようと気持ちを整えた。

人を待っているような面持ちで足音が近付いてくるのを待つ。

そんな真司の前に姿を現したのは、犬を連れた青年だった。もう暗くなってしまったのに、サングラスをかけて帽子を目深に被っている。昼間クラブで聞いた話の人物の特徴には当てはまっている。真司は本人だろうと踏んで、話しかけてみる事にした。真司が知り得ない情報を持っているかもしれない。

「おい、あんた」

声をかけたと同時にびくりと震えた肩に違和感を抱きながら真司は青年に近付いた。

「……何ですか？」

「お前、昨日の事件について情報集めてんだろ。何か良い情報はあったか？」

「何か、知っているんですか！？」

何回も掠りながら手探りで真司の袖を掴み、必死な声音で尋ねてくる青年に真司は少し興味を持った。……目が見えないのだろうか。「そうだな。あんたが持つてる情報をくれたら、こつちも教えてやらんでもないさ」

真司は素知らぬ顔をして、青年の帽子を取った。夜の間には分からないが、色素の薄い茶色の髪が風に舞う。そして、サングラスに手をかける。

「……何してるんですか？ やめてください！」

抵抗する青年の声を無視して、真司はサングラスを取る。黒いレンズの下から現れたのは、瞼の上を一直線に走る、醜い傷跡だった。「……お前、これ。なんだよ」

「貴方には関係ないです。返してください！」

青年の手を避けながら傷跡に触れると、そこはケロイドのように引きつって完全に瞳を隠してしまっていた。

「今日の被害者は赤狼ってチームの奴だ。今そこのリーダーが犯人探し、というか原因探しをしている」

顔はどうせ知らないのだ。真司が自分のことを言ったとしても、青年には通じない。それを知った上で、真司は回りくどい言い方をした。自分でも何故そんなめんどくさい事をしたのかは分からなかったが、なんとなく面白そうだと思ったのだ。

「被害者が赤狼っていうチームに所属していたことは聞きました。でも、そのリーダーさん、周りのことには関心が無いって聞きましたけど」

「身内に被害者が出た以上、……上も無関心ではいられないだろう

？」

下っ端たちにも真司が周囲に興味がないことは伝わっていた。しかし、それは真司にとって些末な問題でしかない。

「あんた、この辺り慣れてないだろ」

「え、……はい」

「俺が案内してやるよ。あんた弱そうだからな。そんなんじゃカツアゲにあっておしまいだ。どうせ俺も情報を集めてんだ。ついでにあんたと一緒にいてやる」

そう言つて、真司は青年にサングラスを渡した。これで了承されれば、青年が集めている情報も真司に入ってくる事になり、二度手間をしなくてすむ。返答によっては願ってもいない幸運だ。

「どうだ？」

「……じゃあ、お願いします」

さつきまではあんなに警戒していたと言つのに、ペこりと青年は真司に頭を下げた。変わり身が早いその行動に、自分で誘つたものの真司は驚いていた。手っ取り早く情報を得るための行動なのか、素直すぎるだけなのか、今の時点では真司の判断はつかなかった。

「安倍斎です。よろしくお願いします」

「ああ、佐賀真司だ。よろしく」

差し出された手をとつて、真司は言つた。そういえば、幹部以外の人間と対等な立場でこうやって会話するのも懐かしいなと、彼は感慨に耽つていた。

「じゃあ、明日集まるか」

「今日の内じゃだめですか？」

「……ダメってことはないが、夜も危ないからな」

余り人を出歩かせたくないし、出歩きたくない。半分自分のために言つと、斎は納得のいつていない顔で、考えこんだ。

「なら、貴方のうちに行つたらだめですか？」

「はあ？」

「外にいないればいいんですよね。もし、良ければの話ですけど」

何を考えているんだ、と言わないわけにはいかなかった。たとえば、目が見えていないのだとしても、喋り方や、動作で真司の性質は見抜けそうなものだ。

それを承知の上で言っているのだとしたら、よほどの大物か、よほどの馬鹿か。

大人しく彼の返答を待つ斎が、急に訳の分からない人間になった気がして真司は恐怖を抱いた。しかし、ここで引いたら男が廃る。そんなちっぽけなプライドで、真司は斎の提案をのんだ。

「分かった。あんまり広い所じゃないから期待すんなよ」

例え万が一、彼が連れている犬が犯人だとして襲いかかれたとしても、主人が命令しているのであれば、彼を抑えてしまえば大丈夫だろう。負けるような事など万に一つもない、と真司は考えていた。

1 | 4 (後書き)

次で第一章は終了です

1 | 5 (前書き)

第一章の最後です。

真司の住むアパートはそこから二分程度で、事務所からは十分ほどの距離にあった。

木造二階建てのアパートの、二階の角部屋。多少騒いだとしても、大家に色々と言われる事の少ない良い部屋だった。

「真っ直ぐ行った部屋が居間兼、寝室だ。手前にトイレと風呂があるから、使いたい時は言えよ。案内してやる」

「……ありがとうございます。意外と面倒見がいいんですね」

「俺だって、そこまで不親切じゃねえよ。それくらい、普通だろ。それに、目が見えないんだったら、尚更、初めての所は分からないだろ？」

「そうしてくれるのが、優しいって言ってるんです」

くすくすと嬉しそうに笑う斎があまりにも自然で、真司の顔もつられて笑みの形をえがいた。

「ヌイはどうしたらいいですか？」

「犬か？ 足、タオルで拭いておけばいいだろう。うるさくしなきゃ大家も何も言わねえよ」

斎の足下にじゃれついていたラブラドルレトリバーの足をがしがしとタオルで拭いて、真司は犬を部屋の中に離れた。

「つか、ヌイって、犬、反対から読んだだけじゃねえよな？」

「……ダメですか？」

「ダメって、飼い主のあんたがそう決めたんだろ。じゃあ、もういいじゃねえか」

「やっぱり、優しい」

「なんか調子狂うな。つか、あんた一体何歳だよ。何でこんなこと調べてんだよ。まさか、警察か？ あの人に言われてきたのか？」

気になり始めたら、色々と疑問が出てしまつて、まくしたてるように疑問を一気に吐き出してしまった。斎はその剣幕にたじろぎな

がらも順を追って真司の疑問に答えた。

「ええと、俺は25で、調べてるのはもちろん仕事で、ですけど、警察じゃありません。近いのは探偵ですけど、なんでも屋つていうと正解です。因みにあの人っていうのも分からないですが、依頼は警察の方からじゃないですよ」

「……まじか。俺より年上って」

「あ、そうなんですか。……って、タメ口でもいい？」

「……いいですよ」

勢いが一気に削がれてしまった。真司からすれば斎は、未成年のルイと同じような年代に見えてしまい、危険な仕事に卷込まれているという感覚が抜けなかったのだ。

「ええと、佐賀くんも普通でいい、よ。急に敬語使われるのも、なんか変な感じだし」

「じゃあ、お言葉に甘えて。後、俺のことは真司でいい。名字で呼ばれるのも新鮮だけど目立つからな」

変な気分だった。ずっと一人暮らしをしてきた所為で、自分の部屋に他人がいること。チーム以外の人間と普通に喋っていること。全てが真司にとっては久しぶりのことだった。

「ちよつと、電話してもいい？ 今日のこと、連絡しないとイケないから」

そう言ってポケットから携帯電話を取り出す斎に了承の意を伝えようと、真司はそつと居間から出た。情報の共有は大事だが、真司は人の電話を盗み聞くような真似はしたくなかった。改めて、自分の情報を開示したときに直接聞けばいいと思っていたのだ。

台所で湯を湧かす。途切れ途切れに聞こえてくる斎の、他人の声に真司は目を閉じた。

チームで幹部以下の奴らと一緒にいるときは、仲間だといつてもいつ裏切られるか分からない状況だった。今だって、同じようなものなのに不思議と斎を信用している事に、真司自身も驚いていた。

「真司くん？ お湯湧いてる」

「……っ!!」

いつの間に会話が終わったのか分からないまま、真司は斎の指摘に従って火を止めた。

「しばらくこっちで聞き込みすることになったんだけど、いい？」

「ああ、いいよ。ずっとは案内してやれないけど」

「それは大丈夫。明日は一緒に回ってくれるんだよね」

「何処に行くんだ？」

「えーと、とりあえず治安課に行ってみて、この辺りにいるチームのこと、詳しく聞こうと思ってる」

急須にはティースプーン2杯分の茶葉を入れておき、沸騰したお湯をコーヒークップに入れて、冷ました所で急須に入れ替える。最後の一滴まで入れると、真司は居間に戻るように斎を促した。

「……あんまりサツに事件のことは喋らないでくれよ。てか、俺に聞くだけじゃ足りないか？俺もここに住んでるから結構色々知ってるけど」

「うん、それも聞くけど、色んな視点から聞いた方がいいんだ。意見が偏っちゃわないようにね」

組み立て式のローテーブルにカップを置いて座る。向かいに斎が手探りで腰を下ろすと、畳を軽く引つ掻きながらヌイが斎に近づき、彼の太ももに頭を乗せて目を閉じた。

「斎、情報の記録はどうするんだ？メモ、取れないだろ？」

「大体はボイスレコーダかな」

「……カツアゲされないように気をつけろよ」

この町に来るには危機感が足りていない斎に不安を覚えながらも、真司は情報交換のために表情を引き締める。

「とりあえず、分かっている事を互いに話そう。斎はどうだ？」

自分から先に話す事はない。真司としては黙っていなければいけない事だつてあるし、言っではいけないこともある。例え、斎が警察とは関係ないとしても、関わりがないとは言い切れない。

「事件が実際に始まったのはあやふやなんだけど、昨日の事件で三

体目の死体だったみたいだ。被害者はみんな青竜胆町の青年だけど、年齢やチームはばらばら。被害者同士のつながりは今の所分かっていないんだ」

「……そうか」

今まで治安課や、凌悟たち警察本部が動いていなかった所をみると、真司が凌悟に連絡するまでは隠蔽されていたのだろう。

「真司の知ってる事はなに？」

改めて斎に尋ねられて、ほんの少し真司は居住まいを正した。

「事件の経緯については似たような感じだな。あとは、……もしかしたら、ドラッグが関わっているかもしれないってこと」

「ドラッグ？」

「ああ、D2っていうものらしいんだが、今この界限では流行ってて、サトシも使ってたみたいなんだよな」

「サトシって？」

「ああ、昨日死んだやつの名前だよ。俺も一応同じチームなんだ」

「そう、なんだ」

「D2については、警察がどこまで知っているかは知らないけどな」
「なるほど。でも、それって俺に話していい事なの？」

「ドラッグ関係は撲滅すれば良いって思ってるからな。あんなの折角の人生を棒に振るだけだし、なにより百害あって一理無し、だろ」

「チームでやってる訳じゃないんだ？」

「ああ、うちのリーダーも嫌いだ。見つかるとボッコボコにされるらしいぜ！」

自分で自分のことをリーダーと言うのが面白くて、何となく口元が緩むのが分かった。

それにしても、斎の話を聞いていても、すでに入手してしまった情報しか出てこない。自由に動いている分、真司が聞けないような話もあるかと思っていたが、やはり町の人間ではない斎に住民たちは口が堅くなるということだろうか。

一息吐いてお茶を飲んで、改めて真司は斎の顔を見つめた。

太ももの上に乗っているヌイの頭を飽きもせず毛並みを整えてやっている。目の傷を隠していたサングラスは外され、テーブルの上に置かれていた。それは斎が真司を信用していると考えていいのか、真司には見当がつかない。

「チームの事に関しても聞き回っているようだけど、それはどうしてだ？」

「一応は内部抗争と、他のチームとのいざこざの線もふまえてるから、かな」

「いざこざ、ねえ。お前、死体の様子とか見てねえからそんなことが言えんだよ。あれは絶対に人間には無理だ」

「詳しく、教えてくれない？」

「……死体には何力所かに傷跡が残されている。切り口が刃物のような人工物で出来るような代物じゃないんだ。見た目は噛み千切られたみたいにな。場所は一応、サトシの体にあつたのは、頬と脇腹、二の腕、太ももだ。それから聞く所によれば、急に腕が裂けたって話だ。誰も犯人は見えていない」

言い終えてから情景を思い出してしまい、真司は口に手を当てた。対する斎は顎に手を添え、考える素振りを見せた。

「人間には不可能、か」

「なんだ？ 不満か」

「ううん、なんか、嫌な予感がするだけ」

眉間に皺を寄せて、唸る斎に隠し事があると感じたが、真司は何も聞かない事にした。きつと答えてはくれないのだろう。

「そういえば、昨日の被害者と同じってことは、君も赤狼なんだね？」

「ああ、赤狼については昼間に聞いてたんだっけか？」

「うん、この辺りじゃ一番大きなチームだって」

「へえ。確かに、チームに入るのも、出るのも自由だからな。総員数も把握出来ないくらいだし」

「それから、君のチームは基本的に、何があっても我関せず、なん

だつてね？ 随分、内向的なチームだね。それに、リーダーが周りの事に興味が無いって……」

それはさっきも言っていたが、この口調だとまだ、何か知っていそうだな。真司はそのまま、斎を促す事にした。

「他には何か言ってた？」

「そうだなあ。余りにも喧嘩をしないから、リーダーが本当に強いのかどうか分らない、とか。意外とわがまま、とか。夜にほとんど活動しないチームは意味があるのか、とか。もっと暴れたいのに、リーダーがビビってるだけなんじゃないか、とか」

「まだ、ありそうだけど、そんぐらいでいい。ありがとな」

正直、ブチギレそうだった。証言した全員を呼び出して打ちのめしたいくらいだったが、今やるべきではないと、真司は深呼吸をして心を鎮めた。

「でも実際、抗争が勃発しても極力傍観してるみたいだね？」

「当たり前だ。無闇に喧嘩を買った所でチームの危険が増えるだけだろ？ 自分のチームに関わる事以外には、無関心でいたっていいはずだ。まあ、身に降る火の粉は振り払わない訳にはいかないけどな」

「それは、そうなんだろうけど……」

「他のチームは縄張り争いだのなんだので、しょっちゅう喧嘩してるけど、うちは売られない限り喧嘩を買う事はしねえよ」

「真司はリーダーみたいだね。他のメンバーもそんな感じなの？」

一瞬、ひやりとした。斎に自分のうわさ話を聞かれた所為か、彼にだけは知られたくないような、そんな気がしていた。

「それは、…… どうか。みんなとこんな話、しないしな」

少しだけ、動揺が混じった声だ、と感じたが、斎はそれに気付いていないようで、そうだね、と返しただけだった。内心ほっと息を吐いて、真司は話の方向を他に向ける事にした。

「とりあえず、今この町で勢力があるのは、ウチと黒騎士と白兎くらいになるのか？ 後は少人数のチームが無数にある状態だな。そ

れも、常時他のチームに吸収されたり、合併したりで忙しいから、正確には分かんけどな」

「俺が聞いたのもそれくらいだね。今までの被害者はその三つのチーム以外の所属だったから、余計に事件の発覚が遅れたのかも。どこも、自分のチームがこける原因なんて作りたくないだろうから」

弱小のチームであればそれだけで、チーム解散の危機になっってしまう可能性だってある。身の危険が保証されてしまうようなチームでは本末転倒だからだ。

「チームつてのは、個人の隠れ蓑だからな。責任を分散させるには打ってつけ。弱小はそれが出来ないからな。血反吐を吐いてでも隠蔽する気になったんだろうな」

「真司は不安じゃない？ 今回の事件で」

「これで解散するようじゃ、これまでだったってことだろ？ チームとしてもリーダーとしても、な」

今回の事件でチームを離れる人間がどれだけいるか今は分かりようがないし、去った所で真司は気にしない。自分を本当に信用してくれる人間がついて来ればいいのだ。それが例えいなかったとしたら、解散するのもいいだろう。真司のチームに対する思い入れなど、その程度しかなかった。

「……真司？」

斎の心配そうな声に真司が我に返ると、彼がその見えない目を真司に向けて、氣遣わし気に眉根を寄せている。

「何でもない」

平気そうな声で言っ、真司は斎の頭に、ぽんぽんと子供にするように手を置いた。

「ねえ、他のチームつてどんな感じ？」

「そうだな、黒の奴らは喧嘩っ早くて仕方ねえし、白は若干トんだ奴らが多いな。でも、うちも色々あるからな。統率が取れてない分、他の所よりヤバいかもな」

そうなんだ、と斎は呟くとヌイの毛並みを撫でながら視線を下に

向けた。

「明日は治安課だけか？ サトシが行ってたクラブは行ってみたんだよな」

「そうだね。後は、出来れば他のチームの人に話聞きたいかな」

「分かった。じゃあ、今日はもう遅いんだし。寝よう」

コーヒーカップを斎に持たせて、真司は押し入れから布団を引っ張り出した。もちろん一人暮らしだ。布団は一組しかない。

「布団一組しかないから、斎は布団な」

「え？ いいよ。斎の部屋だし」

「いい。お前、なんか体強くなさそうだし、床で寝たら絶対風邪引くだろう？」

「それは……」

「俺は大丈夫だ。外出たまんま寝ることもあるしな」

一晩ぐらいどうってことはない、と真司は自分の体に毛布も巻き付けて寝転がった。

「明日の朝なんだけど、僕寝起き悪いから、声掛けてもらっていい？ 名前、呼んでくれれば大丈夫だと思うから」

「呼ぶだけでいいのか？」

「うん、又イもいるし、自分の部屋じゃないからそれで起きれると思う」

声をかけるぐらいで寝起きの悪い人間が起きるとは思えなかったが、本人がそう言うのだから、真司は逆らう気など微塵もなかった。又イと共に斎が寝る体勢に入っただのを確認してから、目覚ましを七時にセットして真司も目を閉じた。

1 | 5 (後書き)

次回から第二章に入ります。

2、始動 - The Second Day - (前書き)

第二章突入です。

2、始動 - The Second Day -

翌朝、真司は目覚ましが鳴る二分前に目を覚ました。

「今日も上々」

寝起きの良さでその日の運勢を見ている真司は、鼻歌を歌いながら毛布を剥いだ。真司が動いた気配で又イも目を覚まし、真司の足下にじゃれつくようにまとわりつく。

「お前は何食うんだ？ 残りもんじゃヤバいんだろう？」

毛並みを撫でると意外と手触りは良く、いいものを食べさせてもらっているのだろうと感じた。

いつものようにお湯を湧かして、真司は食事の準備を始める。幼い頃から家事を手伝い、自分で食べるものは自分で作ってきた真司だから、料理自体は苦ではない。例えば一人増えていたとしても作る量が変わるだけで手間はさほど変わらない。

「おかずは何にしようか」

冷蔵庫を探りながら、真司は一人言を呟く。しかし、これだけ真司が物音を立てても、斎は起きる気配どころか、寝返りさえも打たない。

「……お前のご主人はすごい、な」

少し呆然としながら、真司が又伊に尋ねると、又伊は彼の袖口を引っぱって斎の方に連れて行こうとした。

「何だ？」

真司が斎の傍に腰を下ろすと、又伊もその隣にちよこんと座る。そして、又伊は斎の顔をぺろぺろと舌で舐め、伺いを立てるように真司に顔を向けた。

「ああ、名前呼べって言ってたな」

先日の斎との会話を思い出し、真司は斎の頬を軽く叩きながら声をかけた。何回も呼んだが、斎はぐずる様子もなく、また、寝返りや真司から離れようとしなかった。

「なんだ？ 普通、呼べば、嫌がったりするもんだろ。……聞こえないのか？」

そう思っただけで手を叩いてみたり、少し大きな声で呼んだりしたが、やはり反応は薄かった。寝息でさえも細く、身じろぎ一つしない斎の姿を見て真司は、もしかしたらこのまま目が覚めない事もあり得るんじゃないか、という恐ろしい考えが真司の脳裏をよぎった。

「そんなのマジで勘弁してくれよ。これからって言ったじゃねえかよ。意味分かんねえよ、名前呼べって、起きねえじゃねえか！」

いつの間にかほのかに香る甘い匂いに眉をしかめながら、真司は必死に斎の肩を掴んでがくがくと揺さぶった。

「起きろ！ 斎！」

「……………っ！！」

びくり、と大きく肩を震わせて斎が顔を上げた。開く事の出来ない瞳に睨みつけられたような気がして、真司は斎を掴んでいた手を離してしまい、斎は畳に布団を敷いただけの床に頭をぶつける事になった。

「い、ったい……」

寝転んだまま、頭を抱える仕草は完全に覚醒したように見え、真司は悪く思いながらも安堵のため息を吐いた。途端に気になるのは部屋中を埋める甘ったるい匂い。それはどうやら斎から匂っているようであったが、寝る前と今と斎に変わりはない。しかし、起こし方はともかく、寝起きにしてははつきりとしている斎に真司は違和感を抱いた。

「あんた、どんだけ寝てんだよ。ていうか寝起きにしちゃあはつきりしてるよな？ それにこの甘い匂いなんだよ。……胸焼けしそうだ」

「甘い？ ……ああ、今日は、ね。ちよっと、僕もキツかった」

「ああ？ 要領得ねえな。ちゃんと説明しろ」

飴のような甘い匂いに真司が鼻を摘むのを見て斎は顔を緩めたが、

結局詳しく話そうとはしない。ごめんね、と手を合わされても納得はいかなかったが、これ以上は何も話しそうにない。

「今はそれよりやる必要があるでしょう」

斎にそう言われて、ふと我に返る。振り返れば目に入るのはキッチン。そこには火にかけていた鍋があった。

「空焚き、しちゃってんな。今日はみそ汁無しだな」

「……真司、それ分かっててやってる？」

「まあな、飯食ったら行くぞ」

とにかく話はそれで切り上げて、水分が蒸発してからからになった鍋を避難させると、真司は手早く二人分の食事を用意した。

「自分で作ってるんだ？ 朝食とか食べなさそうな感じなのに」

「朝食わねえと昼間動く気にならないからな。まあ、昼間は滅多にないが、襲われた時に力出ないようじゃ危なくてしょうがない」

「あ、なるほどね。腹が減っては……って奴か」

朝食を食べた二人は簡単に身支度をして、街に出た。元々青竜胆町は、一時期流行った振興都市の先駆けとして、工場や雑居ビルの建設が多く行われていた。しかし、経済破綻による撤退で、町には開発途中のビルや、テナントが去った幽霊ビルが立ち並ぶ閑散とした町に変わってしまった。そのため、治安もすぐに悪化し、カラーギャングや裏の道を極める者たちが多く滞在する事となったのだ。そこで発足されたのが、斎の目的地である治安課だ。ここは青竜胆町で起こるチーム間の抗争などの事件を取り締まるために本庁から出向という形で、この街の警察の役目も担っていた。

建物自体は街のほぼ中心にあり、何処の現場にでも出来るだけ早く辿り着くように設置されている。

「着いたぜ。後はあんた一人で行ってくれ。俺は外で待ってる。俺じゃ、ツラが割れてるからな、行きにくいんだ」

本当は行きにくくなど無いのだが、リーダーだとバラされても困る。折角隠しているのに、ここではらされたら苦勞が全て水の泡になってしまう。真司はなんとかごまかして、斎を一人で行かせた。

真司と別れた斎が中に入ってすぐに向かったのは受付で、そこには若い警官が暇を持て余したようにナンプレを解いていた。斎は自らが所属する事務所の所長から、警察側に連絡がいつている事を祈りながら事務所の名前を名乗り、担当者を呼んでもらうように頼んだ。

受け付けの警官は斎の出で立ちに不信感を抱いていたが、斎の持っていた名刺により彼が思っていたよりも事は順調に進んで、数分後には彼は担当の刑事との面会が叶った。

「どんな野郎が来るかと思えば、ただのガキじゃねえか」

「ご期待に添えなくてすみません。体力戦には弱いかもしれませんが調査は得意なので、よろしく願います」

唐木田と名乗ったその刑事はゴツイ体つきに丸刈りでゴマ髭、刑事ドラマに出てきそうな典型的な頑固刑事だったが、斎にとっては見えていないからなんの恐怖対象にもならない。見る者によっては生意気とも、度胸があるとも見られる斎の態度は、唐木田には好意的に受け取られたようで、彼は大きな声で笑って斎の髪を手でぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

「で？ 何が聞きたいんだ？」

「この辺りのチームと抗争について、お願いします。後、D2って知ってますか？」

D2と口にした瞬間、唐木田の顔が強張った。斎はそれを見る事は敵わなかったが、彼がまとう空気ががらりと変わったのは感じる事が出来た。

「なんでお前がそれを知っている？」

「……こちらに伺う前に聞きました。結構流行っているみたいですね」

「痛いところ突いてくんない」

唐木田は、ちょっと待つてろ、と言うと部屋を出ていった。彼が帰るまでの間、斎は肩掛けのデイベックの中からボイスレコーダーを取り出す。それからしばらくして戻ってきた唐木田は一冊のファイルを持っていた。

「おう、待たせたな」

「いいえ。申し訳ないんですけど僕は目が見えないので、説明してもらっていいですか？」

「ああ、聞いてるよ。難儀なもんだな」

「慣れました」

「……そうか」

それで一度会話が途切れ、気まずい空気を払拭させるように唐木田は茶を飲み、喉を潤わせた。

「まずこの界隈のチームについてだな。聞いたこともあるかもしれないが、チームとしてのかさは赤狼を筆頭に、黒騎士、白兔。その下はピンキリだ。赤狼は基本的に我関せずだが、黒騎士がその分血の気が多い連中ばかりだな。白兔は裏で色々動いているようだからあんまり表には出てこないが、この三つのチームは俺たちも詳しい事は分らずじまいだ。……何か、でかい抗争でもやってくれりゃあ、一斉にしょっぱけるんだがな。でかいの同士で停戦協定組んでんだか、小さいチームばかりが潰し合いだの喧嘩だのをやってる」

そこで溜め息を吐いて、唐木田は天井を見上げた。

「今回のヤマは火種だ。どう転ぶかはまだ分かんが、なにかが動くだろうよ」

「事件の事、知っているんですか？ それだったら、どうして動かないんです？ 唐木田さんは、何がしたいんですか？」

警察が一切動いていない今の状況にてつきり唐木田も知らないのだらうと斎は思っていたが、警察側も能天気な事に当たっている訳ではない、と言外に言われた気分だった。

「……良くも悪くも上下社会だからな。上が動くなつて言ったら動けねえんだよ。それより各チームのリーダーの名前を教えてやるよ。」

赤狼はシンジ、黒騎士はジュン、白兔はイナバだ。まあ、あんたの容姿なら、ちよっかいかけられることもないだろうが、会いに行くんなら気をつけて行けよ」

「はい、ありがとうございます。後、D2のことなんですけど」

「ああ、そうだったな。D2はこの頃流行りだしたドラッグでな。うちの方でも調べてはいるんだが、流通元の判定は難しい状態だな。検拳はそれなりにしているんだが、追いつかないのが現状だ」

「だらり、と背もたれに体重を掛けて、唐木田は溜め息をついた。

「なんで、こんなに流行っていると思いますか？」

「錠剤だから、飲みやすいのがきつと一番の理由だろう。後は流行りってことだ。実際は流行っていないものでも、流行っているって話が出ればきつと食いつくだろうからな」

「なるほど。では、もしかしたら、誰かが「流行っている」と情報を流した事も考えられるってことですか」

「そうだな。そういう線も有り得ない事ではないと思っている」

「流行りが先、という意見はなかなか面白そうだと斎は思ったが、もうこれ以上の情報は望めそうにない。後は本人たちに聞くしかないか、と考え、斎は礼を言って席を立った。

外で手持ち無沙汰に待っていた真司は、又伊を伴って治安課から出て来た斎の姿を見つけて、駆け寄った。

「斎、お疲れ。どうだった？」

「うん、良い人だったよ。でも、そんなに欲しい情報はもらえなかったかな。人として色んな人のこと知ってそうだけど」

「警察が俺らのこと、詳しくかったら俺は今ここにいねえよ」

「それもそうだね」

「これからどこに行くんだ？」

「……それぞれのチームのリーダーに会いに行きたいな。組織のトップだし、今回のこと、何か知ってるかも」

「何処から、回りたい？」

「やっぱり、赤狼かな。真司がいるし、リーダーにも話が行きやすそうだしね」

そうだよな、と呟いたが、真司は気が重かった。折角、チームリーダーとしての身分を隠して接していたのに、こつも簡単にばらさなくてはいけないのか。

自分がリーダーだ、と言おうと真司が口を開いた時だった。ジーンズのポケットに入れていた携帯が震えた。それは長い間止まらず、通話であることを真司に知らせた。

「すまん、電話だ」

ディスプレイを見れば、幹部の一人からだ。何か、あったのだろうか。嫌な予感を抱きながら、真司は通話ボタンを押した。

『バカシンジ！ 早く出るよ！』

途端に聞こえる怒声に、真司は咄嗟に携帯を耳から離れた。

「モモ、てめえ、声でけえんだよ。……何があった」

『またあの死体だ。今度は黒の奴らしいぜ。ジュンさんもいる』
「何処だ？」

『アサギビル。そっちは今何処にいるんだよ』

「ああ、ちよつと治安課に、な」

『はあ？　なんでそんなところにいんだよ』

「なんでもない、すぐに行く」

真司はそう言い切ると、モモの返答を待たずに電話を切った。

「斎、また例の死体が出たって」

「近い？」

「ああ、十分ぐらいだな。今度の被害者は黒の奴らしい。あつちのリーダーも行ってるみたいだから、話、聞けるかもしれないな」

「真司、連れてって」

目の見えない斎のために、彼の手を取って真司は足早にアサギビルへ向かった。

現場には野次馬の人ばかりが出来ていたが、真司はそれを避けるようにビルの裏口へ回った。扉付近で大きな怒鳴り声が聞こえ、その声に聞き覚えがあった真司は溜め息を吐きながらその方向に足を向けた。気付かれないようにそつと行つたというのに、ビルの入り口に立つ青年に見つかって怒鳴られた。

「シンジ！　遅えよ！」

青年の気分も高揚しているのか、いつもより大きな声に、真司は眉をしかめて舌打ちをした。

「モモ、うつせえ」

「なつ、お前が遅いのがいけないんだろ！」

きゃんきゃんと仔犬が相手を威嚇するように真司に噛みつくが、彼は仔犬と称されるほど小さくはない。しっかりと筋肉がつき、立派な体つきをしている所為で、モモというあだ名から受ける印象ともほど遠い容姿をしていた。

「シンジ、お前の所からも出たんだってな」

「……ジュン」

ビルの奥から声と共に現れた人物に、真司は溜め息混じりに声をかけた。すらりとしたモデル体型に、黒のハイネックと黒のスキニージーンズを合わせ、全身を黒でコーディネートした青年。これが黒騎士のリーダーだった。

「そっちの奴は誰だ？ 何故お前と一緒にいる？」

ジュンが斎を目敏く見つけ、真司に尋ねた。その視線には苛立ちと不信感が込められている。彼は自分たちのフィールドに、何も知らない他人が入り込むのが我慢ならないのだ。

「俺がこの町を案内してる斎だ。独自でこの事件追ってた。もちろん、警察とは関係ない。……斎、黒騎士のリーダー、だ」

「はじめまして。ジュンさん、でしたよね？ 唐木田さんに教えてもらいました。俺は斎といいます。中を見せていただいてもいいですか？」

「現場に入る事は構わないが、一つ聞く。お前にとって、この事件はなんだ？」

ジュンは斎の目の前まで距離を詰めて尋ねる。その距離は充分に拳の射程圏内だ。ジュンの機嫌を損ねれば即刻彼の拳の餌食になる。「この事件の解決を、依頼として受けました。俺にとっては、責任を持って終わらせなければならぬ仕事です」

視線は合うことがなかったが、その全身から発せられる気配に本気を感じたのか、ジュンも殺気を消して拳を解いた。

「分かったよ。案内してやる。シンジ、お前も来るか？」

「お前がいいんならな」

「やる気になったって聞いたぜ。お前はさ、抑え過ぎなんだよ。もつと出せよ。こう、高まる気ってヤツをさ」

何重にも意味が含まれている笑みを真司に見せ、ジュンは二人に背を向けた。ついてこいと言っているのだろう。

ビルの一室は真司が遭遇した惨状と変わらず、血と吐瀉物が散乱する酷い空間だった。部屋の壁を中心に血痕が吹き飛んでいるが、肝心の遺体は部屋の何処を見ても存在しなかった。

「ジユン、死体はどうした？」

「そんなもん、運んだに決まってるだろう？　いつまでもこんな所に置いておけないさ」

「警察には……？」

「シンジ、……俺があいつら嫌いな、知ってたよな？」

「ああ、知ってる」

ジユンは真司の目を真っ直ぐ見たまま低く轟く声を響かせた。これが本来の反応なのだと真司は再確認をする。本来チームと警察は相反するものだ。真司のそれは、警察というよりかは凌悟との繋がりが、周りからしてみれば何も変わらない。これは根本の違いなんだ、と真司は言い聞かせてジユンから目を逸らした。

「何か変わった事はあったか？」

「いや、うちと変わらないさ。昨日ここには死んだ奴の他に誰か、いたんだろう？」

「まあな。……それについてはホームで話す。ついてこいよ」

ホーム、と呼ばれた場所がチームの本拠地だと知っている真司は大人しくジユンの後をついていく。途中で斎に声をかける事も忘れずに、斎と二人連れ立った。

彼に連れていかれたのは、町外れの倉庫。彼は大きなシャッターの隣にある通用口を開け、中に入った。倉庫の中にはメンバーが何人かいて、中央には、人型に膨らむブルーシートがある。メンバーはジユンの姿を認めると口々に挨拶と会釈をし、ジユンもそれに応えた。

「まずは死体を見た方がいいか？　シンジ、お前の見解を聞きたい」
そう言うときジユンはブルーシートに手をかけ、勢い良く引き剥がした。

現れたのは無残な死体。真司は“彼”の傍に膝を着き、手を合わせた。

昨日のサトシの様子を全て覚えている訳ではなかったが、それとの共通点を探そうと注意深く観察を行った。

「やっぱり、脇腹、食い千切られてんな。それと太もも、二の腕、頬、……」

食われた部分を辿りながら、真司の頭の中に考え得る中で一番タチの悪い仮定が過った。慌てて頭を振って、考えを遠ざけようとしてみたものの、一回思いついてしまえば簡単に否定する事は難しい。何より、筋が通ってしまふのだ。

「……いや、まさか、それは無いだろう」

「言ってみるよ。シンジ」

彼の後ろで真司の観察を見ていたジユンが言う。その声音に有無を言える隙はなく、いくら真司であつても被害を受けた者同士として避けられない交渉だった。

「憶測だと思つて聞いてくれ。……これ、人体の中で比較的骨の少ない部分を食われている。反対に言えば骨のない食べやすい部分しか食われていない。遺体を食った奴は、狙つてここを食つたんだと考える事が出来る」

「つまり、食う為に殺したつて言いたいのか……っ！」

「それだと意味が通るんだ」

誰がやつたかなんて、分かるはずはなかった。

誰か、否、何かが、人間を食べるためにこの惨劇を起こしたのだ。そう考えれば辻褄があう。

「ジユン、昨日、こいつと一緒にいた奴はここにいるか？」

「それが、何か関係あるのか？ 聞いた所で犯人が出てくるとても言うのかよ！ 人間がこんなの出来るかよ。出来ないつて言うなら、そんなの聞いても意味ねえだろ！」

メンバーの死体を前にしてはジユンも穏やかではいられないのか、声を荒げる姿にその場にいた黒騎士のメンバーは身を竦めた。

「イラつくなよ。昨日一緒にいた人間に犯行は不可能かもしれないでも、そんな時の状況ぐらいは聞けるはずだ！」

ジユンの殺意のこもった視線にも真司は怯むことなく言葉を放つ。こちらだつて一刻も早く解決したいんだ、という気持ちを込めて真

司が言えば、ジュンは我に返ったように息を吐いた。

「すまん、お前んとも出たんだったな。……おい、昨日ナオとつるんでそこにいたのは誰だ？」

気を取り直してメンバーを振り返り尋ねる。先程の激昂が功を奏したのか、集団の中から三人の男が前に出た。

「三人だけか？」

「いえ、もう後二人いたんすけど、今日はまだ来てません」

「なんだ、びびったのか？ 俺の部下だったのに情けねえな。まあ、いいや。お前ら、シンジの質問に正直に答えろよ？ 後で俺が直々に聞く事のないように、な」

直々、の部分を強調してジュンが言うのと、三人は顔を青くして震え上がった。何かトラウマになることがあったのだろう。下手につくとやぶ蛇になりかねないと、真司は敢えて詳しく聞かなかった。

「……じゃあ、何であんな所にいたんだ？」

「それは、……昨日はヤクが売られる日で、みんなで買った後、そこで試しをやったんです。換気が良くないと変な具合に混じるし、ここや、まして自分の部屋でなんか出来ません。だから、人気のない廃屋でやるんすよ」

「D2か？」

唐突に挟まれたジュンの疑問に男たちはびくついて、そうですと答えた。

「最初はみんなでノッテて、D2は両方あるんでアッパー系になった奴はトンでるし、ダウナー系になった奴は寝てたりしてました。でも、急にナオトが飛び起きて、こっちくるな、って叫ぶんすよ。俺たちなんのことか分からなくて、見てたら突然、振り回してたあいつの腕が千切れて、叫び声がすごくて、人間ってこんな声を出せるんだって、変な事まで考えて。近寄れなかったす。あんな状態みたら……」

男はそこで一端話をやめると、口を押さえた。惨状を思い出した所で、吐き気が戻ってきたのだろう。ジュンは冷ややかな目で彼を

見ていたが、彼が話を再開するのを大人しく待っていた。

「……あのビルは電気とか通っていないんで、明かりはもつぱら口ウソクだったんですけど、それも何かに、自分たちの足かもしれないですけど、ともかく何かに倒されて、真っ暗になったら後は音だけでした。骨が砕ける音とか、何かが引きちぎられる音とか、匂いもすごくで、……思わず、何人かは吐いてました。全然動けなくて、動けるようになったのは、音が止んだところだったんです」

「で、動けるようになってから、ナオトの死体を確認したのか？」

「シンジ、奴らにそんな根性ねえよ。確認してたなら俺の所に連絡がきたはずだ。なあ、そうだろ？」

目を細めてうつそりと笑むジユンに、男たちは息を呑む。黒騎士の中ではチームやメンバーに関わる何かが起こった時には必ずジユンに連絡を入れることがルールだと聞いている。しかし、今回はジユンに連絡がいかなかった。完全なルール違反だ。

「ああー、そう。なるほど、ね。で、お前は誰に聞いたの？」

「お前のとこの情報屋だよ。能力低い方な。随分急いでたからな、何かあったんだと思って捕まえさせてもらった」

「モモか……」

捕まって身動きが取れない時の電話だったからこそ、あれだけ苛ついていたのか。八つ当たりのような言動を取った自分をほんの少しだけ反省した。

「さて、お前ら、どうしてもらいたい？」

にこにここと、至極嬉しそうな笑顔の下に酷く残虐な色を覗かせる彼を、シンジは本当に敵に回したくない、と感じた。

「シンジ、すまんがもう今日は帰ってくれるか？」

「言われなくても。とぼっちり食う気にはならんさ」

ずっと会話に参加しなかった斎の手を引いて、真司は倉庫を後にした。この後、彼らがどんな仕置きを受けるのかは想像したくもなかった。

「あいつは鬼畜だからな。気をつけるに越したことはない」

「……よく、知ってるんだね」

「ああ、まあ、な」

「どうしよう。もう、聞いてもいいのかな？」

斎の葛藤を真司は無言で促した。今までのジューンと真司の会話で、彼らの立場が同等であると、どうして疑わないだろうか。隠したいのであれば、徹底的に隠せば良かったのだ。だが、真司はそれをしなかった。斎から他のチームに話を聞きたいと言われたときに、バラす覚悟をした所為だろうか。

「さっき唐木田さんに聞いたんだけどね。赤狼のリーダーの名前で、シンジなんだって。……それは、真司のこと？」

「……そうだ。バレバレ、だったな」

「うん。割とね。ほんとにそんなに隠す気なかったでしょ？ 話しかとか聞いてれば分かったよ。どうして隠したの？」

「最初は何となくだったけど、斎が俺に関する噂を聞いた後だったからな。噂で加工された俺を見て欲しくなかった」

「部外者だから？」

「そう、だな。皆なんやかんやで噂に左右されるからな。チームの利益も不利益も関係ない。まっさらな立場の人間だからこそ、本当の俺を見てもらいたかったのかもしれない」

白状してしまえば随分あっさりと言司の口は動いた。曝け出してしまうのは簡単だ。

「……周りのことに無頓着なんじゃない。興味がある範囲が狭いだけなのかもしれないね。自分と、周りの人、それだけの範囲」

「そうだ。大事なものは少なくていいんだよ。ただ、我が身に降る火の粉は振り払わなきゃな」

至極当たり前の考えだろう。自分たちの生活の場が危うくなれば避けるか、打破しなければならぬ。赤狼は自分の暮らしだけ守ればいいのだ。それ以外のことや、それ以上のことに対しては関わりを持たない。それが信条だった。

「真司は、……赤狼のリーダーとしての君は、今回の件をどう考えているの？」

「加害者とはかく、被害者についてはD2が関係してるとは思っている。俺が知ってる事件は昨日と今日の二件だから、憶測の域は出ないがな」

「他に繋がりがらしきものは見えてこないからね」

「となると、昨日以前の被害者の裏も取りたいな」

D2といえば、真司はチヒロに依頼をしてあった。まだ二日目だから大した情報もないだろうが、そういう路線でこれから調べていく、ということを知らせておかねばならない。真司は携帯でチヒロの電話番号を呼び出し、電話をかける。

長いコールの後、つなげられたチヒロの世界は静寂に満ちていた。
「もしもし？ チヒロ？」

通話は出来る状態なのに、聞こえてくるのは静寂と吐息だけ。間違っているはずはないが、それだけに真司はヘマをしたのではないかと不安になった。もし、どこかに捕まっているようなことがあれば、助けに行かなければならない。

「チヒロ、……」

「なに………っ」

返ってきたチヒロの声は艶に満ち、真司は知らぬ間に息を呑んだ。
「仕事中だ。」

「ああ、お前、頼んでおいた仕事の件なんだが……」

「……、それなら、今部屋にいるよ。……っ、明日、持っていこうか？」

「相変わらず、仕事が速いな。お願いするよ」

「ごめん、もう……、切っていい……？」

「ああ、忙しいとごめん」

そう言つて電話を切つた真司は詰めていた息を吐き出した。言葉と言葉の間に入る、吐息や不意に溢れる声。必死に普通を装う様に、今夜のチヒロの相手は熱を上げるのだらう。酷くされていないといが。情報の為とはいえ、メンバーたちには傷ついて欲しくない真司は眉をしかめたまま、携帯を閉じた。

話の内容が分からずに不思議そうな顔をしている斎の頭を撫でて真司は歩き出し、斎も足音を追うように後に続いた。

「D2の情報は明日聞けると思う」

「なんか、緊張してたね。あれは、なんで……？」

「あれは、……いや。向こうも仕事だったからな」

真司は言葉を濁して、話をやめた。

「斎、昨日以前の被害者つて分かるか？」

「うん、分かるよ」

「交友関係込みか？」

突っ込んだ所まで聞くと、そこまでは網羅していなかったらしく、斎は首を横に振った。真司の頭の中に、モモの顔が浮かぶ。

あいつなら知っているかもしれない。

今度はモモの番号を呼び出し、電話をかける。二コールで出るのは職業柄だろうが、威勢良く出るモモに若干うんざりしながら、シンジは携帯を耳に当てた。

「……何の用だ」

「てめえ、仮にもリーダーに対してそれはねえだろ？」

「昼行灯がよく言う！　そういうことはやることやってから言えよな！」

「てめえこそ『能力低いほう』とか言われてんじゃねえよ。チヒロに取って変わられたら困んのお前だろうが！」

「てめえがオレに仕事回さねえからだ！」

「だから、仕事だつて言つてんだ！」

「……………っ！？」

勢いよく息を吸い込み過ぎたのか、電話口で噎せるモモの咳を聞

きながら、真司は額に手のひらを当てて息を吐いた。

「……これから事務所行けるか？」

『お、おう、行く』

「期待してんぜ」

返事を待たずに切る。口論はいつものことだが、最後のはちよつとキザ過ぎたか、と真司は少し後悔した。

「仲、良いんだね」

上品に笑う斎を前に、真司は気まずそうに頬を掻いた。見えないと分かっているけど、子供っぽい言い争いをした後となつては照れ隠しをしない訳にはいかない。

「写真は持つてるのか？」

「うん、それはさすがに無いと聞き込みも出来ないからね」

バックの中から質素な茶封筒を手探りで取り出して、斎はその中から写真を三枚取り出して見せた。それはどれもスナップ写真で、その中のマジックで顔を囲まれているのが被害者だろう。全部で三人。昨日と今日を合わせれば五人。多い人数では無いが、短時間に同じような事件が立て続けに起こるのはどう考えても異常だ。

「こいつらのためにも、早く事件解決してやらなきゃなあ」

自身でも彼らに見覚えが無いか思い出しながら、真司は事務所へと向かう。ちらりと斎のことが気にかかったが、特に隠しておくようなこともない。寧ろ、それで人払いが出来れば一石二鳥だった。

「斎、着いたぞ」

「あれ？ 早くない？」

「そんなことはない。ここは二階だ」

階段があることを最初に告げ、斎の手を引いて階段を上る。その間にヌイは二人の間を縫って一足早くに二階に着いて踊り場ではしゃいでいた。

「喜んでいるな」

「今日はずっと大人しくしてたからね。自由に動けて嬉しいんだと思う」

「そうか。……モモとはさつき会ったよな？」

「ジユンさんと一緒に会った、あの元気な人だよな」

「……元気、な。うるさ過ぎる気がするけどな」

「そうかな？　すごくいいと思うけど」

幹部にも支給されている合鍵で事務所を開けると真司は斎をソファに座らせ、滅多に使わない客人用のカップを取り出した。

「コーヒー飲めるか？」

「うん、大丈夫」

ブラックを入れて、砂糖とミルクを適当に手に取る。

「俺はブラックにするけど、斎はどうする？」

「砂糖、二つ、で」

「オッケー」

そんな会話で和んでいるとドアが開け放たれ、モモが入ってきた。

「すまん、遅くなった」

「いや、そんなに待ってない」

「……てか、まだいんのかよ。そいつ」

肩を上下させ、精一杯に深呼吸をするモモの文句を真司は聞き流した。聞いたって仕方がないことだ。斎はこの事件を追っているし、真司もそれには協力をするつもりだ。

「協力してんだ。文句言うな。まあ、座れよ」

着席を促すと、存外素直にモモはソファに腰を下ろした。そして大きく深呼吸を一つ。それが終わる頃には、モモは仕事の顔になっていた。

「で、何を調べりゃあいいんだ？」

「お前の交友関係の広さに賭けてるからな」

真司は先程斎から受け取った写真を机の上に置いた。

「サトシの前にもうすでに死んでいた奴らの写真だ。事件当時の状況は似たり寄ったりだと思うが、こいつらの仲間に、こいつらがD2に関わっていたのか聞きたい。……分かるか？」

「調べる必要もねえよ。オレはこれ、知ってたからな。クラブでよ

く見かけた奴らだよ。サトシが行った所とは被らねえから、もしD2と関係してるとしたら、別の流通経路なんだろうな。クラブ、行くか？」

「今良いか？ ていうか、なんで報告しなかった？」

「お前、うちのチームに関係ないことはとことん興味ねえからな。言った所でなんも変わらなかっただろうよ」

「確かに、な」

今だってサトシが巻き込まれてやっと興味を持ったのだ。自分のことながら、つくづくチーム以外には興味がないんだと、呆れるほかなかった。

「よし、じゃ、行くか」

「分かった」

「モモさん。……よろしくおねがいします」

斎が頭を下げるも、なんとも複雑な顔で押し黙るモモに真司は視線をくれてやる。こいつは俺たちを警察に売ったりはしない、という気持ちを込めて。その視線に気付いたのか、モモは顔を盛大にしかめて、頭をがりがり搔いた。

「……オレが協力してやんだからな。早く解決してくれよ」

遠回しな励ましが分かる真司は微笑ましく思いながら、モモの頭を撫でてやった。

「お前の方が下だろ！ 子供扱いすんな、ばか」

「してねえよ。ほら、行くぞ」

コーヒークップをシンクに置いて、三人は事務所をあとにした。

モモに、被害者の仲間だと紹介された奴らも、今はそれぞれ他のチームのメンバーで、真司は話を聞くのに一々苦労した。それと言うのも赤狼のリーダー、という真司の立場と、それに伴うヤク嫌いの噂、事件当時を思い出しているフラッシュバックに、度々話を中断せずにはいられなかったからだ。

「とにかく、あいつらは全員使ったことあんだな？」

声を低くして念を押せば、青年たちは操り人形のように首をかく

かくと上下に動かしだ。

「とにかく、これで被害者の繋がりがD2だったって線が濃厚になったな」

「そうだね」

「あ、あの、今日その人が来るんです。俺たちこれから、行くんですけど、……来ますか」

「人が死んでんのに、まだやめないとか、……いや、今言う事じゃないな」

まさか、声をかけられるとは思っていなかった三人は驚いたが、別行動で情報を集めるよりもついていった方が手取り早く、ある意味で今回の元凶と言える人物に会える。これでもし、彼が怪しければ一気に解決へと持ち込むことが出来るのだ。

「真司、……行きたい」

そう呟く斎の顔は真剣で、真司が思うよりも今回の機会を重く受け止めているのが分かった。その理由がただの責任感から来るのか真司には分からなかったが、それなりの決意があることと推測してそれ以上は深く追求しなかった。

「モモも来るよな？」

「もちろんだ」

念のため確認してみれば、予想通りの答え。赤狼の情報屋として、また、この街に住む情報屋として、この機会をふいにする気などさらさなかった。

受け渡し場所は空きビルの一室。真司とモモ、斎の三人は買いに来た訳じゃないから、と青年たちと一緒にいることは避け、物陰に隠れるように青年たちの様子を観察した。とは言え、斎は元々目が見えないため、そういったことは全て無駄な行為にも思えて真司は不思議でならなかった。

「斎は何で来たんだ？ 目が見えなければ意味が無いだろっ？」

「僕はいいんだよ。ヌイが見ていてくれる」

その言葉と共にヌイが答えるように小さく鳴いた。ちょこんと座ったその犬は大人しく、真司やまして先程会ったばかりのモモが傍にいても警戒するような素振りを見せなかった。

「その人がどんな人か分かるんだ。いくら人の良さそうな顔をしていても、それが悪人ならヌイには分かる」

斎の手のひらに撫でられて目を細めたヌイだが、ぴくりと耳が動いたと思ったら低く唸り声を上げて体勢を低くした。

「来たみたいだよ」

斎の言葉に真司とモモは息を潜めて、青年たちを窺った。

闇の中から姿を現したのは執事のような黒の燕尾服を纏った男。

この男がディーラーなのか。真司は息を詰め、彼らの動向を探った。D2が関係あるのだとして、何か変わったところがあれば、出て行かない訳にはいかない。

あまりにも取引をしている青年たちに気を向けすぎて、真司は少し後ろに座っていた斎の表情をみることが出来なかった。

しばらくした後、交渉は成立したのか、青年とその男は金と錠剤が入っているであろうピルケースを交換した。交渉自体にはなんの不審点も見つけられず、ディーラーの男はこの件に関係ないのかと真司は息を吐いたが、斎はそっと立ち上がるとヌイを伴って男の後ろを追おうとしていた。

「斎？」

「俺はこのままあの男を追う。今日は帰れないかもしれないけど気にしないだね」

「待てよ。怪しいのはD2であってあの男じゃない」

「なんで君がそう言い切れるんだよ。今追わなきゃ見失っちゃうんだよ」

「確かに服装は変だったけど、そこまで気にするようなものか？」

「君には分からない」

真司は斎の前に立ち、行かせないようにしたが、斎は男の後ろを追いたくて仕方がなかった。下手をすればもうすでに見失っている可

能性があるのだ。これ以上はゆっくりしてられない。

「勝手に行かせてもらうからね！」

斎はそう勢いをつけると真司の腕を掴み、一本背負いの要領で真司を投げ飛ばした。真司は受け身を取って体勢を整えたが、投げられたという事実が消えない。真司がどうなったのか確認を取る術は彼にはないはずであったが、斎は呆然としている真司に顔を向け、申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめん、でも、譲れないんだ。泊めてくれてありがとう」

言い残してヌイを伴って走り出す。

その姿を真司はただ見ていることしか出来ず、モモも今まで誰にも引けを取らなかったリーダーの無様な姿にショックを隠せないように突っ立ったまま何も出来なかった。

「くっそ……！！」

力の限り地面を殴りつけると、散らばったガラス片や砂利が皮膚に食い込むのが分かったが、そんなものが気にならないほど、真司は頭に血が上っていた。

「絶対に探しだしてやる」

握りしめた手を更に固く握り、真司は漸く立ち上がった。

「モモ、お前はディーラーの男について探りを入れる。後は他のディーラーについても、だ。斎の意見を肯定するようでしゃくだが、黒幕だった場合は始末しとくに限るからな」

「了解！」

喧嘩の前の、荒削りな殺気がモモや、その場にいた全員に向けられた。理不尽だということは真司も理解していたが、本来その殺気を受けるべき人物がここにいないのだから仕方がなかった。

「お前ら、D2を買うのはあの男からだけか？」

「……どうでしょう。顔なんて、覚えてられないです。この、暗がりですし」

真司の剣幕に震えながらも、青年たちの一人が口を開いた。たしかに、廃ビルには電気が通っている訳でもなく、今でさえ、月明か

りと携帯の光の中での交渉だ。近くに寄らなければ、顔の確認など取れるはずもない。

「そうか。……モモ、後は任せていいか？」

「いいぜ。正直、今のお前を連れて歩くのはちよつと怖い」

苦笑いのままのモモを残して、真司はビルを出た。

苛々した気分のままで夜の街を歩く。物に当たるような真似はしないが、じっとしていたら余計に苛々してしまう。真司は駄目元でもう一度チヒロに電話をかけた。これで無理なら明日に回せばいいのだし、今話が出来れば手間が省ける。少しの諦めと多大な期待を持って、携帯を耳に当てる。今度は二コールと立たないうちに呼び出し音が止まった。

『何？』

「急がせるようで悪いな。今から出て来れないか？」

『何でそんな急いでんの？ 返答によつては考えなくもないけど』

「物事が急変しそうだ。一人勝手に動いた奴がいてなあ。ヘタするともっとややこしいことになりかねない」

『シンジだって知ってるでしょ。さっきまで仕事してたんだからね』
分かつてはいる。チヒロのやり方が本人の体にどれだけの負担を与えるのか。分かつてはいるが、きつと体験している本人でしか、その本当の辛さは分らないのだ。それまで血が上っていた頭が一気に冷えた。

「……すまない」

『マジで謝らないでよ。いいよ。行く。シンジのウチでいい？』

「ああ、待つてる」

分かった、と了承の意を返してチヒロは電話を切り、真司はそれを確認してから携帯を閉じた。

斎はあのディーラーを追って何処まで行ったのか、勝手なことをされたからといって気にならない訳ではなかった。初めて、リーダーとしての肩書きを持たないまま話ようになったのだ。こんなに簡単に離れてしまうには惜しいと真司は思った。

真司が部屋に戻ってしばらくすると、控えめなノックの音が響いた。いつも律儀にノックをするのは一人しかいない。扉を開けると黒いパーカーのフードを被ったチヒロが立っていた。

「急がせてすまない。急に確認が必要になったんだ」

「だから、いいって。それより、なんか暖かいもの淹れて」

小さく震えて部屋の中に入ったチヒロは、慣れたように押し入れから毛布を取り出して体に巻き付けた。その様子を後目に真司はお湯を沸かしにキッチンへ移動した。

「そうだ。ネコも呼んでおいたから」

「あ、……ああ、ありがとな」

「今忘れてたーって思ったでしょう？」

すっかり、忘れていた。ネコに潜入捜査を頼んでいたのだ、とチヒロに言われて初めて思い出した。

「きつと出来るだけ急かされると思ったから、手っ取り早い方法は取ったけどね。こんなに早く聞かれるとは思わなかった。本当にさつきもらったばかりなんだから感謝してよね」

情報を得る為なら、自分の身体さえ犠牲にすることを知っている真司は何とも言えない顔で頷くしかなかった。

「さつきはごめんな。……電話」

「ああ、あれ？ シンジのおかげで向こうも気を良くしたんだし、結果オーライってとこじゃない？」

沸騰し始めた水面を見ながら、真司は先程の電話での会話を思い出した。きつと三十秒にも満たない会話だったがその間に洩らされた吐息は正直下半身にくる。チヒロにはそれで生活しているだけの技量も度胸もあるのだ。それで反応しない方が、男として申し訳な

い。

「……何考えてるの？」

背後から耳元で囁かれて真司は肩を震わせる。そのまま硬直して
いるとチヒロはそつと腰に手を回し、余計に密着してみせた。密着
した場所から熱が広がり、そうでなくてもこの頃は色々なことにこ
無沙汰だというのにここまで煽られれば逆らえるはずも無く、真司
は腰に回されたチヒロの手首を掴んで振り返った。

彼女はその行動でさえ予測していたかのように驚く気配もみせず
に、真司の目をじつと見つめていた。近づく瞳に唇、その他。まき
つけた毛布もそのままに真司は誘われるように顔を近づけてチヒロ
にキスを、しようとした所でまるでタイミングを計ったかのように
玄関が開く音がした。

何となく離れるタイミングを失って密着したままでいれば、キッ
チンの入り口にひよつこりと青年が顔を出した。

派手な蛍光緑のキャップと、ピンク色の薄手のパーカーをはおり、
中には黒のＴシャツを着て、そこにも蛍光色で何やら英文が書かれ
ていた。一見ちぐはぐなように見えて、その実、調和されている。

キャップからはみ出る緩くパーマがかかった髪をいじりながら、ネ
コはのんびりとした口調で口を開いた。

「急に呼びださないでよお。ちーちゃんが呼んだから来たんだから
ねえ。……って、あれれ？　ちーちゃん、浮気？」

「んー。ご褒美、かな」

「そお。で、何を話せばいいのー？」

しっかりと抱き合った二人には然程な反応も見せずに、居間に移
動したネコは置いたままだったクッションを抱いて寝転がった。

沸騰していたお湯で紅茶とコーヒーを入れて、折りたたみ式の口
ーテーブルに三人分のカップと資料を並べ、真司は息を吐いた。

「チヒロ、今までの成果はどんな感じだ？」

「症状の推移でいいんだよね。その前にD2について確認して。D
2は白色の錠剤で経口摂取。効能は痛覚の軽減、気分の高揚・鎮静

と欲望の増加。副作用はほとんどなくて、驚異的な速度でこの街に広がっている。……ここまではいい？」

「ああ、分かった。でも、気分の高揚と鎮静って矛盾してねえか？」
「ものによつては両方味わえるクスリもあるから矛盾はしてないよ。それで、耐性があるらしくって、服用しているうちに効能が始めるのが遅くなる。それが、流行っている要因でもあるんだけどね。だんだん大量に買わないといけなくなる」

「まるで悪徳商法だな」

「この街での商売なんてどれも似たようなもんでしょ。それで、その頃かららしいんだけど、寝覚めが悪くなるんだって」

「それこそよくある事じゃないのか？」

「うつん、ほぼ毎日らしいよ。毎日起きても、すっきりしない。いい夢を見たはずなのに、何故か胃がむかむかする。それが強く顕著になっていく。もう寝るのも勘弁って思う人も一杯いるよ。でも、疲れてるし、寝るとまた気持ちの悪い寝覚めが待っている。寝ても疲れが取れないからだんだん苛々して来るらしいんだ。そうすると起きている間にいざこざが起きる。その気持ち悪さを解消する為にまたD2を服用する。そんな感じで中毒者の出来上がりってね」

「たくさんの症例を聞いたのか、もううつんざり、と小さく零してチヒロは肩をすくめて見せた。

「それで、その内、夢の内容も変化があるみたい。段々と何かに追われる夢を見るんだって、逃げてても逃げてても追いつかれて、終いにはその何かに襲われる。痛覚も何もないんだけど、自分が食べられていくのを夢に見て気分のいい人はいないよね。症状自体はこれだけなんだけど、殺された5人はもっとこれが酷くなっていて、些細なことでもキレてたみたいだよ」

「5人……、お前も今までの被害者が全員D2の常用者だったってことは知っていたのか？」

「まあ、どれも殺された後の情報だけどね。『殺された五人』について調べればすぐに出てくることだよ」

「そうか。……それにしても、聞いてみれば怪しい所だらけなのに、よく手を出すよな」

生活が壊れていくのは目に見えて明らかなのだ。真司であれば、そんなものには絶対に手を出さないし、出させない。

「シンジはそれでいいけど、みんな気持ちいいことは好きだから、ね？」

艶やかに笑うチヒロは娼婦のようで。先程のやり取りを思い出した真司は訳もなく手を握り締めた。

「ネコは？ どうだったんだ？」

話を切り替え、寝転がったネコの足を叩くと嫌々と駄々をこねて、身体を起こさないまま間延びした声で報告を始めた。

「さっちゃんのいたクラブに行ってみただけだね、なんか、執事みたいな人がD2を入荷しに来てー、それをみんなで売ってるんだよ。バイトも人気高いんだってえ、安く手に入るんだってー」

「バイトをしていれば、安く手に入る訳だな。なるほど、そいつらの転売もあり得る訳か。……売りに来たのは一人だけか？」

「どうかなあ。今日は来てなかったし、あ、でも、毎週木曜日には売りに来るってえ」

「顔は？ 覚えているか？」

「ううん、着てる服の方見ちゃうからあ、そんなの覚えてないって」
「そうか」

斎の意見には賛成しなかったが、モモに頼んだ手前自分で調べられる所は調べておかなくてはならない。もしこれで、ディーラーが一人しかいなかった場合、確実にその男が怪しいことになるが、確証が得られるまでは認めたくない。

「ふーん、シンジはやけにその売人につっかかるね」

まあ、いいけど、と呟いたチヒロは素知らぬ顔でカップに口を付けたが、真司の反応は脳裏にしっかり焼き付けていた。真司の反応や、チームにとって有益である情報から集めるのは当然だ。そのためには耳を澄ませ、周りの状況を逐一確認していかなくてはなら

ない。チヒロがこの街に住むにつれて獲得した習慣の一部だと言って過言ではなかった。

「そういえば、シンジ、お客さんはどうしたの？」

「……お客？」

客など迎えた事があつただろうか、と真司が真剣に悩んでいるのを見ながら、チヒロは被せるように真相に踏み込んだ。

「目の見えない綺麗なお客さん、だよ」

チヒロは斎と会っていないはずだ、とか、話した事もないのになんで知っているのか、という疑問は情報屋の彼女にとってはいつもの愚問の類だ。どんな些細なことでも記憶しておくのが常である彼女らに、隠し事など通用しないことを真司は知っていたが、軽く仲違いをしているこの状況であまり彼の話はしなくなかった。

「……ああ。あいつは、出て行つた。今は話したくない」

「ううん？　なんか反応が。僕が予想してたのと違う」

てつきり慌てるか、首を突つ込むなと怒られると思っていたチヒロは余りの普通な反応に若干がっかりしていた。

「でも、『あいつ』だって。随分入れ込んでるんだね。もう食べちゃつた？」

「ああ？　俺がそういうの嫌いだって知ってたんだろ」

「知ってるけど、でも、結構心許してるみたいだから、ちょっと気になつてさ」

「とにかく、あの野郎は必ず捕まえる」

「結局、女房に逃げられた旦那の台詞みたい」

ふん、と嘲笑うチヒロに苦笑いで応戦しながら、真司は重心を後ろに逸らし寝転んだ。そしてそのまま目を閉じる。

「状況を整理する」

わざわざ宣言したのは、間違いがあればチヒロに訂正を入れさせる為だ。

「起きた事件は五回。そのうち、俺が関わったのは後半の二回。ウチのサトシと黒のナオトの件だ。被害者は全員この街の人間で、被

害者同士にはなんの繋がりもない。敢えていうなら、全員がD2を常用していたということ。ここで怪しいのは、D2本体か、それを扱うディーラーだ。……モモにはディーラーの情報を追ってもらってる。さっきネコが言った『執事みたいなディーラー』は俺も見たからな。他にもいないか調べてくれるように頼んである」

「なんだ、モモも動いているんだ」

「ボクは何をすればいいのお？」

「ネコは引き続きクラブに行つて、違うディーラーがいるのかどうか調べてくれ。チヒロは、……元がどこ分かるか？ ディーラーたちが何処で仕入れているのかが知りたいんだ」

「……分かった。調べておく。じゃあ僕は帰るよ。ネコはどうする？」

「ボクも帰るー」

ネコはじゃれつくようにチヒロの腕に自分の腕を絡ませて、まるで仲の良い姉弟のように真司の部屋を出ていった。

元々調査に向いてない真司は、これ以上情報収集には関わらないつもりだ。改めて一人になれば、斎に投げられたことを思い出す。受け身は取ったから身体の傷は無いが、意外と精神の方にダメージが来ていた。

彼がリーダーの赤狼は喧嘩に負けたこともなく、真司自身も負けたことはなかった。しかし、斎には負けた。自分よりも小柄な男に軽々と投げられてしまったのは地味にショックだった。

「もう隙なんか見せねえ」

静かに瞳に闘志を燃やして、真司は拳を握り締めた。

目前にずっと感じていた獺の気配が突然、ふつりと姿を消す。

「見失った？」

ぴたりと足を止めてしまったヌイの頭を、撫でてやりながら斎は溜め息を吐いた。

真司と別れ、獺を追いかけたはいいが、簡単にはその痕跡を掴ませてはくれない。

追いついては交戦を繰り返していたが、もう体力も限界に近い。しかし、それは獺にとっても同じ。いや、獺の方が、消耗が激しいはずだ。

「どうしようか。……一旦、休もうか？」

腰を下ろしてヌイの顎をこしょこしょとくすぐってやれば、ヌイは気持ち良さそうに目を細めて鼻を鳴らした。

「こんな所で何してるんですか？」

尋ねられた声に斎が顔を上げる。彼は実際に見る事は叶わなかったが、そこには斎と背格好が同じくらいの青年が立っていた。

「……ちよつと疲れただけなんです。ありがとうございます」

「この町って結構物騒なので、気をつけてくださいね」

よいしょ、と呟く青年の言葉を聞いて、斎は彼が誰かを背負っているのだろつと感じた。

青年が去る気配を感じながら、斎は集中して周囲を探ってみたが、もう獺の気配を感じる事は出来なかった。

ルイは青年を背負い、自宅への道を歩く。

青年はルイよりも上背があり、意識がない所為で重たくのしかかっていた。

「もう、急に落ちないでくださいよ」

「だって、君、私はさっきの彼に追われていたんだよ？ 隠れなければ見つかってしまうだろう」

「……………急に復活しないでください」

独り言のつもりだった言葉に返答が返り、ルイは一瞬背負った青年を落としてしまいそうになった。

ルイが斎に声をかける数分前。

ルイは予備校からの帰り道を歩いていたのだ。そうしたら、向かいから走って来た青年がルイの肩を掴んでこう言った。

「ちよつとかくまって」

その瞬間、彼の体から力が抜け、ルイはその体を慌てて支える事になった。誰かは分からない状態ではあったが、彼が意識をなくす瞬間に聞いた声だけは聞き覚えがあった。

「バク、さん？」

聞いた言葉に返答は返ってこない。しかし、かくまうと言われた手前、放っておく訳にもいかず、ルイは青年を背負うことにしたのだった。

しばらく行った所で、もう一人、見慣れない格好をした青年が道ばたで犬と戯れていた。

こんな夜遅くに歩くななんて正直関心は出来ないなと思いつつ、

ルイが声をかけたのが斎だ。

「こんな所で何してるんですか？」

尋ねて顔を上げた斎の目をルイは見る事が出来ない。不審に思いながらも、少しだけ会話をして、ルイは再び歩き出したのだった。

「何でこの前と顔が違うんですか？」

燕尾服を着た人間を背負うのはなかなか無い経験だと思ったが、それよりも気になるのはバクの顔だった。明らかに昨日会った時と顔が違うのだ。その所為で、ルイは先程もバクであるという確証がないまま、青年を背負う事になったのだ。

「それは、まあ、……話すと長くなるんだけど。その前に、君の中にお邪魔してもいいかい？」

「……一応、両親は出稼ぎ中だから、部屋は空いてますけど」
生真面目な顔でそう返せば、バクはルイの肩口に顔を埋めて肩を震わせた。

「あはは、そういう意味じゃあないんだけどね。この身体も返さなくちゃいけないから、そこ、右に曲がってもらっていいかな」

「っていうか、起きてるんなら自分で歩いてください。俺はそんなに体力ある方じゃないんです」

地面に降り立ったバクは背筋を伸ばして、腰を回した。

「いやあ、疲れた。やっぱり、物質世界は制約が多いね」

「物質世界……？」

「その話は落ち着いてからにしよう」

「すぐには話してくれないんですね」

「寂しいかい？」

確かにそうなのかもしれない。バクは元々出会い方からして特殊だった。当然、黙っておかなくてはならないことだってあるだろうし、聞いた所でルイが理解できないかもしれない。だからと言って話してもらえないのは、仲間はずれになっているようで、寂しかった。

「でもね、私を君の中にいる人と一緒にしないでもらえるかな」

バクの言葉にルイは背筋がひやりと冷たくなる。いつも何も話そうとはしないシンジの姿にバクを重ねていたのだろう。バクを見れば、彼の瞳は冷めている。何もかもを見通されている気分だった。

「……ごめんなさい」

ルイが頭を下げると、バクは溜め息を吐いた後、ルイの頭に手を

置いた。

「謝んなくていいけどさ。どんな人なの？」

「いい人ですよ。すごく。俺みたいなのをチームの幹部にしちゃうし、喧嘩できない人でも、夜出歩かなきゃいけない人はチームに入れちゃうし。……でも、入れるだけなんです。問題が起きない限りは放置だし。あんまり、みんなに会おうとしません。新しく入った人の面倒を見るのは全部、他の幹部の人がやってます」

「……ルイは、その人にどうして欲しいの？」

改めて問われると返答に困る事に気付く。自分はシンジさんにどうして欲しいのか。

「かまってもらいたいのだったと言わないと。黙ってても分からないよ」

かまって、もらいたかったのだろうか。ルイは自問してみるも、今すぐに回答は出そうになかった。その間にバクは先を行っていて、立ち止まったままだったルイを待っている。

「おいで。話が聞きたいんだろう？」

ルイの前に再び手のひらが差し伸べられる。あの時は、裏切らないから、と言われたんだっけ。と頭の片隅で考えた。この手を取れば、少しでもシンジに近づけるだろうか。

新しい世界に足を踏み入れる。勇気を出さなければ、何も変わらない。ルイはそう決意して、今度は躊躇わずにバクの手を取った。

「教えてください」

「いいよ。まずは身体を返さなきゃね」

バクはそう言って、そこからすぐにあったアパートの一室に入った。“彼”はどうやら一人暮らしらしく、狭苦しい部屋に申し訳程度に家具が置かれているだけだった。バクは手慣れたように洗濯物の中から、スウェットを探し出して着替え始める。ルイは手持ち無沙汰になり、周りを見回してみるも、おもしろそうな物はこれと云ってなかった。

「……ちよつと横たわってもらえるかい？」

スウェットをまとい、完全にくつろぎモードになったバクに言われた通り、ルイは布団も引いていないフローリングの床に横たわった。肩甲骨が床に当たって痛い。

「目を閉じて、ゆっくり息をして。すこし、眠ってもらうから」

バクの声は心地よく、眠気が誘われてきたが、知らない場所で眠るといのはさすがに警戒心が沸き上がる。

「大丈夫。変な事はしないから」

「そう、いうんじゃ……なくて」

眠気で閉じてしまいそうな瞼を必死に持ち上げて、ルイはバクを見上げた。にこにこと人好きのする笑顔を見ても今は胡散臭いだんだ。

「分かっているよ。目が覚めたら港だった、なんてこともないから安心して、お休み」

瞼に手を置かれて囁かれる。もう、我慢も限界だった。やっぱりついていくんじゃないかった、と若干の後悔を胸にルイの意識は眠りへと落ちていった。

『ルイ、起きて』

肩を揺すられ、声をかけられて、ルイはゆっくり目を開けた。

「あれ？ いつの間にウチに？」

一番に目に入ったのが、見慣れた天井。身体を起こせば、どう見ても自分の部屋だった。

いつの間に運ばれたのだろと、ルイが考えていると、軽く肩を叩かれた。振り返ってみれば、そこにいたのは見ず知らずの男だった。

『ここが、君の魂の寄る辺なんだね』

「バク、さん？」

声だけを頼りに、顔の違う男に同じ名前を聞くのはこれで二回目

だ。果たしてどれが本当なのか。ルイは理解に苦しむ。

『この姿も私の本当の姿ではないよ』

心の中をのぞかれたような、そんな気分がしてルイはざわつく胸元を掴んだ。

『私は夢を食らうイキモノだと言っただろう？ 元々私に実体なんて無いんだよ。今の姿はこうやって人の前に姿を現す時に使う擬態だよ。一応、ハンサムに見えるようには設計してあるはずなんだけどね』

「俺、いつの間に運ばれたんですか？」

意識がなくなっている間に場所を移動しているという事は一種の恐怖だ。その間に何が起こったのか検討もつかないのが余計に怖いしかし、バクはそんなルイの恐怖を感じていながらも口元は笑みを作ったままだった。

『いや、君はまだ、あの部屋にいるよ』

「でも、ここは俺の部屋です」

『だから、此处は現実じゃない』

バクは手近にあったノートを丸めて握りつぶした。現実であればぐしゃりと音を立てて、潰れるだけのそれが、なんとも気の抜けた音を立てて、バクの手の中でしぼんだのだ。まるで、ふくらんだ餅がしぼむ時のような音だ。

『何となく分かってもらえたかな』

急には無理だ。まだ、考えや感覚がついていかない。

『すぐには無理だよ。まあ、徐々に慣れればいいよ。所謂ここが、精神世界。反対に私が言った物質世界という世界が、普段君たちが生活している世界だね。君が夢を見ているときにも、時折こちらにアクセスしているんだ。朝起きて、朝食を食べ、外に出た所で目が覚めて、夢だったと気付くなんてこと、経験したことないかい？

それは、気付かないうちに此处にアクセスして、生活を行って、外界的な要因、つまり目覚まし時計だったり、電話だったりで目を覚ます。寝ている最中にここで活動を行う事は結構あるんだ。……普

段は覚えていないだけでね』

そこで一端、バクは言葉を切り、部屋の床から、椅子を作り出した。

「……っ!？」

椅子が出現した途端に、ルイは激しい頭痛に見舞われた。

『ごめん。君の無意識にお邪魔させてもらったよ』

「無意識……?」

『そう。君、この椅子どこで見覚えはないかい?』

まじまじと椅子を見ると、それはいつも座り辛く感じていた予備校の椅子だった。

『あるみたいだね。無意識の中にはこうした情報がまるで広大な海のように漂っているんだ。私は君の無意識の中にある椅子のイメージを掴んで無理矢理ここに具現化した。だから、頭痛がしたんだ。でも、君が自身でイメージを作り出すのは簡単だよ。例えば、そうだな、空を作ってみようか。空をイメージしてみて』

ルイは目を閉じて、空を思い浮かべてみる。目の前にバクがいる所為だろうか。ルイが思い浮かべたのは、バクと初めて会った日の朝焼けだった。

目を開いた其処はもう、自分の部屋ではなかった。朝焼けが輝く、事件現場のビルの前に二人は立っていた。

『どうだい? 頭痛はしないだろう?』

「……はい。でも、ちよつとだるいです」

『ここまで再現するのは少し大変なのかもしれないね。で、ここまで話したのは、君が聞きたいって言ったのもあるけど、実は、お願いがあるんだ』

「なんですか?」

初めて認識した世界の中で突然『お願い』などと言われれば、ルイでなくとも躊躇はしただろう。それに相手はどうも読めない相手だ。警戒しない方がおかしい。

『特に何をやれってことじゃなくてね。ただ、少しかくまって欲し

いだけなんだ』

「さつきも言っていましたね。」

『そう、さつき君に会ったとき、かくまってって言ったでしょう？追われているとも。私のやり方はどうも君たちの考え方とは合致しないみたいだね。よく追われているんだよ』

「でも、バクさんはこの精神世界の人なんですよ。だったら、こちらにいればいいんじゃないんですか？」

『いや、厄介なことに、彼らもこちらに潜れるんだよ。自分の意思でね。私の痕跡があれば、引きづり出されてしまう。今は彼が単独で動いているからそれほどの脅威ではないんだけどね。本格的に動き出されると危ない。だから、君の無意識領域を貸して欲しいんだ』
無意識を貸す、などと考えた事はなかった。無意識という自分では確認する事の出来ない部分を貸したとして、心配なのは自分への影響だ。

『私が暴れ出さない限り、君の意識に問題はない。それに君が望めば、ここで会えるようになるよ。それから、君の夢には一切手を出さないでおこう。夢を食べると言う事は結構な影響を人に与えるからね。君が変わってしまうのは忍びない』

「影響は、無いんですね」

『ああ、約束するよ』

「じゃあ、……使ってください。俺の、無意識を」

自分を助けてくれたバクの為だから、今度は自分がバクの役に立ちたいとそう思ったのだ。

『ありがとう。これからは君の傍にしよう』

その声を最後に、ルイの意識は遠のき、白く、拡散した。

再び目を開けると、そこはまだ、自分の部屋ではなくて、本当の意味で先程体験していた時間が本物であり、夢である事を実感した。

「あんたも、バクに誘われたクチか？」

男の声にびくりと肩を震わせる。そこにいたのは、先程まではバクであったこの部屋の住人。これが本来の彼なのだ。バクとは声の印象も喋り方も違う。もう、バクはここにいないのだ、とルイは実感した。

「俺は、誘われたというか、助けてもらいました」

「ふうん。あれが、人助けねえ」

「えと、……帰ります。お邪魔、しました」

「変なおじさんに声かけられてもついていっちゃダメだよ」

「茶化さないでください！」

男の軽口を一蹴し、ルイは部屋を飛び出した。

もうすぐ成人するというのに、相変わらずチームでも子供扱いだし、今のようにならかわれることもたびたびある。何が足りないのだろうと、唸りながら、ルイは自宅への道をずんずん歩いた。空には雲一つない綺麗な満月がルイの足下を照らしていた。

3、加速 - A few days later -

真司が意気込でいたにも関わらず、それから変死体はぱたりと現れなくなってしまった。すっかり出鼻をくじかれた真司はぴんと張っていた緊張の糸が切れてしまったようで、また元のように緊張感のないだらけた生活を送っていた。報告中もやる気のなさそうな真司にととうもモは怒りを抑えられずに、資料が並べてあったローテールを拳で叩いた。

「聞いてんのか！ お前のために調べてんだぞ！」

「聞いている。そんなにでかい声出すなよ」

「だらけ過ぎだろうがよ。いくら事件が起こらなくなったからって、そんなんじゃ何か起こった時動けねえだろ」

何をしたという訳ではないのに、真司はだらりとソファの背に頭を預けて天井を見上げた。

「最もな意見だ。最も過ぎて苛々する」

「なんでそんなに苛ついてんだよ。お前らしくもない」

「ハッ！ 言い古された言葉だな。俺らしいってなんだよ。何も知らない癖に！」

「お前が何も言わないんだろうが！ 俺たちだってお前が考えてることは分らないんだ」

弾かれたように立ち上がった真司の胸ぐらを掴んでモモは叫んだ。しばらくの間睨み合いが続いたが、先に逸らしたのは真司の方だった。掴まれている手を乱暴に振りほどいて外へ出る。リーダーの自暴自棄な行動に舌打ちをしながらもモモは真司を追った。

「待てよ！ 真司！ 一人で出歩くなって言ったのお前だろ！」

「俺はD2も他のクスリもやってない。襲う側からしたら、論外だろうよ」

「そっじゃねえよ。お前がそうやってふらふらしてつと他のチームが食いに来るんだよ！ チーム潰されてもいいのかよ！？」

「……それでもいいって言ったら？」

「馬鹿野郎！」

モモは思わず真司の肩に手をかけ、振り向かせて拳を突き出した。真司も油断していたのか、その拳は彼の頬にしっかりと食い込み、足がふらつく。呆然と頬に手を当てる真司を見て、モモは首を振った。

「お前、……今すっげえ格好悪いよ」

その言葉に真司はすっと目線を落とした後、だらりと腕を下げ、空を仰ぐ。

暗雲立ちこめるとはこの事か。今にも雨の雫を零しそうな空模様だった。

「こつち来いよ。落ち着かなきゃダメだ」

モモは有無を言わずに真司の腕を掴み、近くにあった喫茶店へ引きずって行った。

入り口に掛けられていたオブジェが、こもった空気を払拭するよ
うに涼しげな音を奏でる。

「マスター、ブレンド二つ」

「おお、いらっしゃい。って、またブレンド一杯で何時間も粘る気
じゃないだろうな？」

「今日はそんなにいねえよ！ あんまり言つとおっさんって呼ぶぞ
！」

「マスターって呼べ！ 急かすな、待つとれ」

慣れたようなモモの対応に、真司は少し驚いた。元々沸点が低く、
チーム内でも弄られてばかりだったモモが、こうやって独自のコミ
ュニティを形成し、仕事をしている。当たり前だが、見たことのない
姿へ違和感を抱いた。

モモは店の奥の窓際に腰を下ろして、真司に向かいに座るように
促す。

「それで何苛ついてんだよ。……いや、焦ってるのか？」

普段よりも静かな口調で話すモモのおかげで、真司はやっと深呼吸

吸することが出来た。これがモモの普段の仕事のスタイルだ。誰に話を聞くにせよ。警戒を解かないと話は聞けないし、話してくれない。

「……分かん」

「あいつの所為か？ あの齎って奴」

「そうかもな……。あの男を追うと言ったきり、連絡がないんだ」

「気にすんなよ。もう帰ってるかもしれないぜ？ あいつが本来住んでいたところに」

「それならいいけどな」

会話が一段落したところにちょうど良くマスターがブレンドを運んできた。タイミングを計っていたのか、それとも偶然なのかは分からなかったが、マスターのこだわりが見えたような気がした。

「ほいよ。ブレンド二つ。……そいじゃ、ごゆつくり」

店内には小さな音でレコードがかけられており、ゆったりとした時間を過ごすには最適なのだろう。まだ、昼間な所為か客は少ないが、気兼ね無い雰囲気か漂っていた。

「良い所だろう。ここに連れて来ると、大抵誰でも口を開くんた。

コーヒーも旨いしな、この店にはなんとなく連帯感みたいなもんがあるんだよ。一人じゃないって思える。それが心地いいんだ」

「……ちゃんと、仕事してたんだな」

「当たり前だ。馬鹿」

コーヒーに口を付け、じっくり味わう。普段仕事をしている時はこんな風に味わえることも少ないので、モモは新しい魅力に気付いたような気がして嬉しかった。

そして、モモは目の前でコーヒーに舌鼓を打ち、やっと表情が和らいだ真司を見て、この所ずっと考えていた事を口に出した。

「お前はここにいたべきじゃない、ってふと思うときがあるんだよな」

「……どういう意味だ」

「いや、お前が力不足だとかいうつもりは全くねえんだけど。……」

なんというか。あいつと一緒にいた時の方が楽しそうに見えるんだよ。俺の独断だから、他から見ればどうかは分からないけどな」

「斎か？」

「そう。活き活きしてたっていうか。……やっぱり楽しそうだったよ」

「俺はこの町を出るつもりはないぞ」

「俺も構わねえよ。ずっとここにいろよ」

「昼行灯でもか？」

真司が先日言い合いになった際の悪口を引用してみせ、モモは思わず吹き出した。

「そうだ！ ははっ、自分で言ったのにな、それ。あーあ、いいよ。もう、ずっといればいいさ。仕事なんかいくらでもやってやる」

「それは頼もしいこつて」

真司も笑い、二人してしばらくぶりの雑談に笑いが止まらなかった。

それからまた、取り留めのない会話をしながら、店の雰囲気身を任せた。やがてコーヒーも飲み終わり、一息吐いた頃、モモがカップを置いて立ち上がった。

「聞き込みにも行くか」

「ああ、……行つてらっしゃい」

「馬鹿、お前も行くんだよ」

「俺も？　つか、馬鹿って言つな」

二の腕を捕まれて無理矢理立たされて引きずられる。真司が情報収集に向かない質だ、と知っているはずのモモがこういった行動に出るのは珍しく、真司は困惑しっぱなしだった。

「モモ？」

「なんかしてた方が氣い紛れるだろ」

相変わらず分かりづらいが、それがモモの優しさだと分かって、真司は表情を緩めた。

「じゃあ、ごちそうさんっ！」

「おお、気をつけてな！」

マスターの激励を背中を受け、二人は街へ繰り出した。

「聞いてないだろうから、もういつかい言っけどな。ディーラーは執事みたいな奴の他にはいない。D2を取り扱ってるクラブは全部そいつから買い取ってるそうだ。……といつても、それぞれ服装に気取られて顔は録に覚えていないみたいだな」

「じゃあ、結局、一人かどうかは分からないんだな？」

「まあ、そうだ。奴らもそれが目的だろうな。ディーラーの顔を覚えさせない為に」

「そいつらは何処からモノを調達してんだか」

「さあな、案外、自家栽培かもしれないぜ？」

嫌な世の中だ、と呟いた真司の腕を引いてモモは歩き出したが、その動きに逆らうように真司は足を止めた。

「なんだよ。また、嫌だっていうんじゃないだろうな！？」

「違う。……なんか、違和感が。こっちか？」

真司は掴まれていた腕を振り払うと、別方向へ走り出した。どうやら、本気で走っているように見る見るうちに姿が小さくなっていく。

「なんだってんだよ！！勝手に行くな！」

モモは止まるはずもない真司に向けて叫んで後を追った。

中途半端な開発の所為で入り組んだ道を真司は躊躇い無く進む。土地勘のあるモモはどうにかついて行けるが、彼が何処に向かっているのかは皆目見当がつかなかった。

右に左に、真司は迷うことなく街の奥へ奥へと進んでいく。

うつすらと浮かんだ汗を拭ってモモは立ち止まった。ずっと真司を追っていた所為で周りを見ていなかったが、いつの間にか街灯がないと地面が見えないくらいに暗い。

（……まだ、そんな時間じゃないだろ。でも、空だって、やけに暗い）

喫茶店を出たのが午後の二時。今の季節、陽が沈むのが午後六時。

時間の経過を考えてもこの暗さは異常だった。

（何が起こつてんだ！）

立ち止まった所為で、真司を見失ってしまったが、それどころではない。

「齋っ！」

モモがいる場所から比較的近い所で真司の声が上がった。声音はぴんと張りつめていて何かが起こつた事だけは確実だ。

叫んだ内容がかの部外者の名前だったのは氣に入らなかったが、リーダーの近くで異変が起こっているのでは、行かないという選択肢は無いに等しく、モモは声のした方に足を向けた。

そして、しばらく行つた先の角を曲がると地面に膝をつけた真司が見え、モモは名前を呼ぼうと口を開く。

「シン、ジ……っ！？」

『そこ』に一歩足を踏み入れた瞬間、モモの肩や頭に感じたことのない重みがかかった。思わず膝をつき、両手を地面について体重を支えたが、それでも苦しいことには変わりはない。

「モモ……？ 来たのか？」

「お前、が、急に、走り出した、んだろうがっ！ てか、お前、平気、つなのかよ？」

『そつだよ、そこの彼が正常なんだよ。君、本当にただの人間かい？』

声は不思議な響きを持ち、微妙に周波数の違う二人分の声が合わさっているように聞こえた。

モモは重力に耐えながら声のした方向に目を向ける。そこは所謂上空で、何も無いはずのそこに燕尾服を纏った男が優雅に腰掛けていた。遠くて顔はよく見えないが、ディーラーの男で間違い無さそうだ。やはり、黒幕はディーラーだったのだ。

「人間に決まつてる。お前こそ人間じゃないだろう！ サトシを殺したのもお前の仕業か！」

『サトシ？ …… ああ、四人目か。殺したのが私かといわれると微

妙かな？』

「はつきりしろよ。全ての黒幕はお前なんだろ！？」

上を向いていた首が限界を迎え、視線を真司に戻せば彼の足元には力なく横たわる斎の姿があった。口内を切ったのか、口端からは血が伝っている。彼の飼い犬も満身創痍の出で立ちではあったが、主人だけでも守ろうと言うのか。震える四肢で男と斎の間に立ち、唸り声を上げて今にも飛びかからんばかりに身体を低く構えていた。『君たちは部外者だろう。ここまで深く首を突っ込んだらいけないよ』

「部外者じゃねえ！」

あくまで優雅な態度を崩そうとはしない男にしびれを切らしたのか、真司はそう叫ぶと遙か上空に浮かぶ男に向かって地を蹴った。普段であれば到底届かない距離だが、真司の跳躍は男の頭上を越える。そして中空で足場を捉え、体重を乗せた拳を放った。

拳が男に当たる寸前に彼の身体は蜃気楼のように揺らめき、真司の拳は水に触れたかのように男の身体を通り抜けた。驚いたように拳を引く真司の反応を満足そうに見て男は笑った。

『どうもそちら側には勿体無い人材みたいだね。どうだい？ 私と一緒に来ないかい？』

「誰が行くか！ 俺の街にちよっかい出しやがって！」

『……ふふ、『俺の街』ねえ。火種を作ったのは私だけど、それを炎に変えたのはこの町の住人たちだよ』

その通りだった。D2を売ったのはこの男かもしれないが、それを使ったのも、広めたのもこの町の人間たちだ。住人たちが彼と彼の持つクスリを求め、町は荒れていったのだ。

「そんなの関係ねえよ。全ての元凶はお前なんだろ！」

言うやいなや真司は間髪を入れずに、その場で男に向けて蹴りを放った。今度も男に当たることはなかったが、真司の適応力に驚いたのか、遠目から見ても分かるほどに目を見開いた。

『本当に君は……。ますます君が欲しくなったよ。でも、今はその

時じゃない』

蹴りの衝撃で揺らめいた男の影が揺らぎをやめ、男が両手を広げたのに合わせて、男の背から黒いもやが吹き出して辺りを包み込んだ。

「うわっ！」

焦ったような真司の声も聞こえたが、モモにはその姿を視認する事は出来ず、ただ目を閉じてじっとしていることしか出来なかった。『きつとすぐにまた会える。その時まで死なないでくれよ』

男のそんな言葉が、小さく遠くなるにつれて、モモが感じていた圧力も小さくなった。

やっと一息吐いて身体を起こせば、空は未だ夕日が地を照らしている最中だ。空中に腰掛けている男もいなければ、体が急に重くなったりもしない。夢を見ていたんだと言い切るには肩にかかった重さも、支えた腕の痛さもしつかりと残っていて、現実であつたと認めざるを得なかった。

「……なんだつたんだ」

呆然と呟くモモに返る言葉はなく、斎を抱き起こした真司が必死に、彼に声を掛けていた。

「……真、司？」

声だけを頼りに斎は手探りで真司の服を掴んだ。

「斎っ！ 大丈夫か！？ 気が付いて良かった……！」

心の底から安堵した、という声を出す真司を後目に、溜め息を吐きながらモモは膝に手をついて立ち上がった。押さえつけられていた所為で縮こまった関節を伸ばしながら、真司の傍に歩み寄る。

斎の顔からは血の気が引き、元々白かった顔色からより一層線の細さを強調していた。

「……とりあえず、斎はうちに運ぶ。モモ、お前は聞き込みを頼む」再びぐったりと頭を下ろした斎を背負って、真司は歩き出す。斎の飼い犬もまたよろよろと真司の後をついていった。

モモは返事をしながらも、今まで何か違った空間であつた路地を

調べるのに熱心だった。

3、加速 - A few days later - (後書き)

真司の呼び方標記について。漢字とカタカナを併用してしまい、少々読みにくいかもしれませんが、仕様です。チームメンバーが真司を呼ぶ場合、「シンジ」は通り名であるため、本名である漢字では呼ばれない、と解釈をお願いします。

バクは今までにない高揚感を感じながら、路地裏に足を踏み入れた。その目線の先には呆然としたルイがいる。バクはにやにやとしたまま、ルイを見つめていた。

「あなたが、サトシ、を？」

「あれ、聞いてたの」

恐る恐る口を開くルイに、バクはおどけてみせた。こうやって純粹な子供をからかうのは夢を食べる事の次に楽しい事だ。

「あなたがここに、俺を連れてきたんじゃないですか！」

ルイがバクに詰め寄れば、彼は仕方ないなあ、と肩をすくめてみせる。

「私が夢を食べることは話したよね。人の夢というものは無限じゃない。普通に生活してる分にはその限りじゃないけどね。ドラッグによるフラッシュバックに幻覚。人の精神はそのうちに崩壊を迎える。そうなれば、もう夢を見る事はない。私にとってそれはもう食べ渾に過ぎないし、そのままにしておけば、そのうちに発狂して死ぬだろうよ。その前に私は私の使い魔たちに、それを与えてやる事にしてるんだ」

「それじゃあ、サトシはあんたのために死んだって言うのかー！」

胸ぐらを掴み、ルイが怒りをあらわにしても、バクにはなんの効果もない。

飄々とした表情でただルイを見つめるだけだ。

「だから言っただろう？ 君たちのやり方に合わないから追われていると。それに、ドラッグに手を出すやつにマトモな奴などいるのかい？」

「サトシは、あいつは良い奴だった」

「それでも、自分の体を壊す行為だと分かっている手を出すのは、愚かな行為じゃないかな？」

どんな表情が暗く陰つていくルイを見るのは本当に面白かった。バクはこうしてトラウマを植え付ける。人の心に傷をつけて、それが夢に作用するように傷を何度も深くえぐった。

「でも、殺す事はないだろう……」

ほとんど喘ぐような声で、ルイはサトシの事を悲しんでいるようだった。

そんな悲しそうな顔をして、やめてあげないよ？

「君だって傍観していたじゃないか。あそこにいた人たちがD2をやっていたのは知っていただろう？ 何故、止めなかったんだい？

結局君はサトシを見殺しにしたようなもんだよね？」

「やめろ！」

「仲間思いのルイ君は、本当は周りのことなんて考えていないんだよ。自分に被害が来なければいいんじゃない？」

「違う！ 俺が言った所で誰もやめようとしなかった！」

「言ったの？」

「……言つて、ない」

「ほら。君はやっぱり、あの子たちを見殺しにしたんだね。私と変わらないじゃないか」

「俺は、あれが、あんな事になるなんて思ってたんだ」

声が震えている。もうすぐ、この子の涙腺は崩壊するのだろうか？ バクは興味津々にルイの顔を覗き込んだ。

「……君の弱さがとても愛おしい。やはり、人間はこうでなくては嫌いだ。あんたなんか……」

とうとう、ルイの頬に涙が一筋流れた。その澄んだ水に魅せられて、バクは息を飲んだ。

「君の夢を食いたい。さぞかし、美味なんだろうね。でも、君に変わって欲しくない。自分本位で、口ばかり達者で、弱くて。そんな君が好きだ。……俗っぽい言い方をすれば、『食べちゃいたい」

らい好き』だよ」

「俺は嫌いだ」

「さっきそこにいた彼が、君のいうリーダーだったよね？」

ルイは黙ったままであったが、その沈黙はすなわち肯定であろう。

「私は彼が気になってるよ。すぐに戦力になりそうだしね。こちらに引き込めれば、随分楽になる。……君と違って」

「……………っ！」

ルイは慌てて顔を上げる。バクはそれを狙っていたのか、にこにこ笑みを深くするばかりだ。

「彼は仕事をしないんだろう？　なら、いなくてもいいよね？　私がもらっていても問題はないね」

「いや、だ！　やめてください！　取らないで！」

「それが、君の本音かな？」

「あ…………」

「彼、名前はなんて言うの？」

「…………シンジ、さん」

「そう。シンジと一緒にいた、彼。この間会ったよね？　あの子もこの事件を追ってる。でも、負傷したね。シンジが大事そうにつれていった。今、君はどんな気分なのかな？」

ルイは唇を噛み締める。あまり強く噛むと血が出るな、とバクは考えていたが、それをあえてルイに言おうとはしない。居場所が赤狼にしかないと言った子だ。今回のシンジの行為は彼にとって裏切りの行為そのものだろう。

「悔しいですよ。赤狼よりも、そいつの方が大切みたいだ」

「下手をすると、彼がシンジのことを連れて行ってしまつかもしれないよ？」

一つの仮定だ。だが、それを口にした瞬間、ルイの瞳が濁った色身を増した。その目を見た瞬間、バクは背筋を震わせた。人が闇に落ちる瞬間というものは、どうして、こんなに綺麗なのか。

「…………それは、許さない」

「それじゃあ、一緒にあの子をやっつけてしまおうか」

「あの人がいなくなれば、……シンジさんはここに残る？」

言葉にするまでの確証は得られない。そんなものはシンジの考え次第だ。でも、今は目の前にいる子供に夢を与えるため、バクは首を縦に振る。

「俺は何をしたらいいですか？」

「おいで。作戦をたてよう」

にこりと、綺麗に笑みを作って、バクはルイの手を引いた。思い詰めたルイの表情がとても愛おしい。人間の負の感情は、それはそれで、とても美味なのだ。

空はすでに夜色をまとい、路地裏の所為か、月も街灯もルイを照らす事はない。バクの瞳だけがただじっと、ルイの表情が変わる様を見ていた。

自室に帰り、布団に斎を寝かせて服を脱がせると、身体のうちこちに切傷や、腫れ、何かで締め付けられた鬱血痕が残っていた。切傷には化膿止めを、腫れには冷湿布を処方し、安静にさせる。寝息は穏やかで、うなされている様子はなかったが、これだけの傷を負った身体は休息を必要としているようだった。

「とにかく、あいつは何なんだ」

僅かな邂逅ではあったが、真司が危機感と違和感を覚えるには充分な時間だった。

自分自身のあり得ない跳躍と、人間らしからぬ男の体質。男は斎を『こちら側の人間だ』とのたまった。彼にそう言わせる事情が二人の間にあるのだ。

早く、目覚めないだろうか、真司はそんな事を考えながら、瞼を覆い隠す斎の前髪をそつとどかした。

結局、斎が目覚めたのは至極簡単で、部屋に響いた携帯の着信音を聞くなり彼は緩慢に身体を起こした。主人に呼応するようにヌイも身体を起こし、斎の方へ身体を寄せる。それを拒否せずに彼はヌイの頭を撫でながら、手探りで携帯を探した。

携帯は彼が常備しているデイバッグの中から聞こえており、真司は斎の手元へそれを引っ張ってやった。

「ありがとう、真司」

さらりと自分に言われたお礼にも、真司はもう驚かない。言い方を変えれば、開き直ってきたというか。少しくらい不思議なことが起きて驚かなくなっていたのだ。

斎も目を覚ましたのだし、何か飲み物でも用意するか、と真司は

腰を上げる。

台所でコップや何やらを準備していれば、そういえば数日前にも同じような事をしたなと真司は懐かしかった。思えばあの時から全てが動き出したのだ。

「真司」

「のわぁっ！」

これも彼の日の繰り返しだったが、異なるのは斎が真司に向かつて携帯を差し出していたことだ。

「所長が真司に話があるんだって」

「所長って……」

「この仕事を受けた、僕が所属する事務所の所長だよ」

そんな人が見ず知らずの自分に何の用だと不審に思いながらも、真司は携帯を耳に当てた。

「もしもし？」

『お、やっと出てくれた。シンジくん、だっけ？ 私は賀茂井相談事務所、所長の賀茂井清人です。以後お見知りおきを』

勢いに圧倒されながらも真司が返事をしたが、電話の向こうの男は果たして聞いていたかどうか。

『それで早速んだけど、斎くんをもうしばらくそちらにいさせてもらってもいいかな？ 後で斎くんから話してくれると思うけど、猥を追うには今回そちらにいた方がやり易いらしいんだ』

「ばく……？」

『ということですよしくね』

聞き慣れないフレーズに真司は思わず聞き返したが、電話の相手――清人からの回答はない。斎に聞け、とそういうことだろうか。

向こうからは情報の一切を発信しようとはしていないのが分かって、真司は若干苛ついた。お前は何も知らなくていい、と言外に言われているようなものだ。

「ちっ、……とりあえず、その猥って奴を捕まえりゃあいんですね」

相手の声の感じからして、年上であろうと予測した真司は丁寧語を用いたが、それも形だけの役割しか持っていない。

『舌打ち、聞こえたけど、……まあ、いいや。協力はしてくれるんだね?』

「さつきからそう言ってんすけど」

持つて回った言い回しに苛々しながらぶつきらばうに吐き捨てれば、受話器の向こうからは抑えた笑い声が聞こえた。

『うん、若いつていいね。その調子で頑張つてね。じゃあ、斎くんに代わってもらつていい?』

話は終わつたとも言つような台詞。実際にそうなのだが、真司は自分自身を軽く見られたような気がして不機嫌なまま、斎に携帯を押し付けた。

「清人さん、いちいちかわないでください」

『いやあ、久しぶりに面白そうな子だからさ。……危なくなつたら必ず、連絡するんだよ』

「はい」

一息吐いて真剣な声を出す清人に斎も気を引き締めて返事をした。それほどに危険を伴うのだ。

電話を切つて携帯を閉じれば、又伊が待つていたように斎にじゃれついた。

「さつきはお疲れさま。ありがとう。又伊」

腰を屈めて又伊の背を撫でる斎の声は安堵に満ちていた。そんな姿を後目に真司は紅茶を入れ、斎を居間に促す。

ローテーブルの回りに腰を落着け、真司はやつと息を吐いた。

「身体は大丈夫か? 一応、怪我の手当はしておいたが」

「そこら中痛いけど、なんとか大丈夫みたい。……真司はどうしてあそこにいたの?」

「ああ、そうか。あの時は気絶してたんだっけな」

斎は真司の戦いを見てはいないのだ。話すべきかどうか悩んでいると、斎の膝に頭を乗つけていた又伊が小さく鳴いて己の存在を主

張した。

「そっか、ヌイに聞けば良かったんだ。真司、ちょっと待ってて」
斎はヌイの頭を数回撫で、手はそのままに息を整える。ヌイはゆつくりと目を閉じ、斎はゆつくりと『目を開いた』。

瞼は傷で開かないはずなのに、どうしてそんな風に思ったのかは分からなかった。何分かした所でヌイが身体を動かし、斎も手を離れた。

「ヌイが嘘を記憶してるなんて、考えられない。でも、……そんなことって」

斎の顔はすっかり青ざめてしまった。痛みがぶり返してきたのだろうか。

「斎、まだ病み上がりなんだ。休め。急がば回れっていうだろ。今は身体を治すのが先決だ」

「うっん、そうじゃない。真司、君、一体何したの？」

「何って、……」

何を聞かれたのか分からない真司は聞き返すことしか出来ない。

「なんで猯と闘えるの？」

「猯って、あの執事みたいな奴か？」

「そう。あいつは夢を食うんだ。だから、猯って呼ばれる。あの時、あの空間は猯に支配されていたって言うのに、なんで君はあんなことが出来たの？」

「知らねえよ。あんなときは頭に血が上ってて、あいつだけはぶっ飛ばす、って思ってた飛んだら、あり得んくらい飛んで。でも、闘い方には迷わなかった。……何でだろうな」

「知らないよ。それは俺が聞きたい」

斎がカップに口をつけると二人の間に沈黙が流れた。

「とにかく、今は猯を追うよ。協力してもらえる？」

「ああ、何にせよ、解決しなきゃ意味がないからな」

「ありがとう」

そっと微笑んだ斎の笑顔は顔の傷など気にさせないほどに柔らか

く、真司はティーカップに添えた手の力を強めた。

「よろしくな。斎」

「うん、こちらこそ、よろしく」

「そう言えば、お前に投げられたの、地味にシヨックだったんだけど。どっという訓練してんだよ」

数日前の事を引つ張り出して問えば、斎は困ったように笑った。その笑い方は何となくムカついたが、この際、真司はそれをスルーした。

「誤摩化すなよ」

「いや、言っても分かってもらえるか。どうか」

「聞いてみなきゃ分かんないだろ？」

あぐらをかいてにやりと笑ってみせれば、斎は諦めたように口元を緩める。こういう時は本当に目が見えていないのか、分からなくなる。

「ご覧の通り、俺は目が開かないようになってる。その所為か、普通の目には見えないものが見えるようになってるんだよ。俺の場合は人体を生成する精神体が見えているみたいでさ。ほら、よく才一ラを感じるとか言うよね。一般的に使われる例としてはきつと気配とか気迫とかなんだろうけど、俺にははつきり見える。だから、生きているものには大体ぶつからずに歩く事ができる。襲ってくる奴らは特徴的な色で見えるから、分かりやすいんだ」

「じゃあ、又イ必要ないんじゃないのか？」

「まあ、歩くだけなら不便はないけど、映像が一つもないのも考えもので、又イには俺の目の代わりをしてもらっているんだよ」

斎の膝に顎を乗せて完全にくつろぎモードの又イの頭を撫でてやりながら、彼は話を続ける。

「さつきは君と獏との闘いを見せてもらっただけけど、又伊と記憶を共有する事によって、この子が見た事を、又伊の視界を通してだけど認識する事が出来るんだ」

「記憶の、共有、ねえ」

「ヌイはずつと俺と一緒にいて、それなりの特訓をしてきたから出来ることでもあるんだけどね」

ほわほわと笑う斎はそれなりに整った顔をしていて、顔の傷がなければさぞかしモテるんだろうな、と思うと、なんとなく腹が立つて、真司は乱雑にローテールを斎の前からどかした。

「とりあえずお前は寝ろ。少しでも体力付けといたほうがいいだろう？ 作戦会議は明日するぞ」

真司は斎の手からカップを取り上げ、そして広くなった居間兼寝室に斎を寝かせた。

真司は斎が寝たのを確認すると、携帯を持って部屋を出た。幹部たちに連絡を取るのだ。

先ずはネコに。長く呼び出し音を響かすが、気付かないのか、出る気配がない。元々ネコの生活は不規則で、もしかしたらただ出られないだけかもしれないのだ。留守番電話サービスに切り替わった所で真司は諦めて電話を切った。

対してチヒロには直ぐに連絡がつき、事情を話すと呆れたような溜め息が返ってきた。

『やつといつもの調子に戻ったっていうか。やつぱり……』

「ん？ どうした？」

何か考えているような間に真司は尋ねたが、チヒロからの返事はなかった。

『何でもないよ。報告はまだいる？』

「ああ、明日事務所で聞く」

よろしく、と結び、真司は電話を切った。もう一度ネコに電話をかけた。これで出なければ、明日に回そうという算段だった。

所が意外にも早い段階で回線は繋がった。

『もしもし……？』

出た声は低く、いつものようなテンションの高いネコは何処にも

いなかった。

「……ネコの携帯、で間違いない、よな？」

『え、あつ！ シ、……っ！』

ガタゴトと物音。ガヤガヤと後ろで聞こえるのはクラブの喧騒か。沈黙のまま、声は聞こえず、しかし、繋がっている為に回線は切れずに、真司は携帯を耳に当てたまま黙って待った。

『シンちゃん！ 急に掛けてこないでよ。メツキ、剥がれちゃうんだから』

静かになったそこで聞いた声はいつの間にか、いつものネコに戻っていた。

「メツキ、なのか？」

『ああもあ、何でもいいよ。で、何さ？』

「お前が見た執事みたいな売人を捕まえることになった。明日事務所で作戦立てるから、って連絡だ」

『ああ、そおいうことね。りょーかい。分かったあ。明日、事務所行くね』

「ちよつと待て。……お前さ、どっちが本当なんだ？」

テンションの高い普段と、先程の不意打ちのような声。どちらが作られた存在なのか。果たしてチームにすることで彼に無理をさせているのではないか。モモに続き、普段見せない部分を垣間見せたネコに真司は尋ねざるを得なかった。

『さあ、どっちでしょ？ 無理はしてないから、大丈夫だよー』

「本当に大丈夫か？」

『ボクが大丈夫って言ってるの……。信じてよ』

「そう、だな。分かった。忙しいとこ電話してすまんかったな。じやあ、また、明日」

『うん、じゃあねえ』

回線が途切れ、静寂が場を支配する。改めて感じた。モモもネコも自分のテリトリーを広げ、その中で自己を確立している。動いていないのは、立ち止まっているのは、自分だけだ。

不意に吐き気に襲われた。込み上げる胃液を呑み込めば喉が焼かれた。

俺はここにいていいのだろうか。ほろりと口から溢れたのは真司の心の奥底に巢食う恐怖だった。

ルイの夢の中はすでに元の姿では無くなっていた。

薄暗い部屋の中。壁には斬りつけた痕と穴があり、ベッドのマットレスは中身をぶちまけている。

『随分、荒れているね』

「ん、……」

カッターを大事そうに持って、ルイは虚ろな目をバクに向けた。

「あんたが、あんな事言うから」

『あんなこと？』

「シンジさんが、いなくなるって」

『それは、君次第だと思っただけだね？』

くすくすと笑う。ルイは壊れたままだ。

『でも、本当に、シンジが自分で出て行きたいと言った時はどうするの？』

「……それならいいけど、でも、一応、あの人は殺しておきたいなあ」

『あの人が……って一緒にいた彼のことだね』

「そうです。あの人に連れて行かれるのだけは、嫌だ」

ゆらりと立ち上がるルイは、バクを見つめ、彼の方に足を動かした。なんとなくおぼつかない足取りでバクに近づき、彼の服の袖を掴む。

「俺は何をしたらいいんですか？」

『彼を少し妨害してくれればいいよ。後、君の夢を貸して欲しい。』

私の本来の力を発揮出来るのは夢の中だからね。彼を君の夢に誘導させればいい。その為には君の意識を無理矢理夢に引きづりこまなくちゃならない。いいかい？」

「何でもいいです」

従順に頷く彼に、バクはひっそりと溜め息を吐いた。ここまで、壊す気はなかったのに。

「みんなが事件の為に動いています。俺が関わっていることも分かっているはず。今更元になんか戻れないから」

「何でそう思うの？」

「アキタさんに会いました。それで、あなたのことを聞かれたんです。いつ見てたのかは知らないけど、あんまり関わらない方がいいって」

「それで君はなんて答えたの？」

「俺の事を分かってくれる人です、って言うておきました」

「それは、……お褒めに預かり光栄だね」

少しだけ、部屋の空気が変わった。精神が回復の兆しを迎えているという事だろう。

「アキタさんまで、動いているなんて。あなたのことをどの程度知っているかは分かりませんが、怪しいと思われるはずですよ」

「なるほど、この恰好だし、怪しいのは仕方ないだろうね」

燕尾服の裾を持ち上げて、笑う。確かに、青竜胆町では異色を放つ衣装だ。

「彼らはきっと、クラブで私を捕まえようとするだろうね。その方が確実だ。それに君がいる。君たちのチームの縄張りはおアシスが近かったね。……あそこは木曜日に行っていたな。今日は火曜日。決行は早くて明後日だね」

「明後日に、俺はおアシスに行けばいいんですね」

「きっと、中で私を見つかるだろうから、私を追う人を捕まえて欲しいんだ。きっと向こうは彼を持ってくるだろうね。外から来た、彼を」

「あいつが、来る」

暗く澀んだ瞳が、バクを見上げた。これが、ルイの原動力となる。彼はこれから、自分の為に他人を犠牲にする。今の状態ではその後のことなど考えてもいないだろうが、本当に目的を果たした後、彼は壊れてしまわないだろうか。壊れてしまうのなら、その前に夢を味わっておきたい。しかし、それは契約違反だ。

「なに考えているんですか？」

『……君の夢が食べたいなあと思って』

「食べたらいいいじゃないですか。俺はクスリやってる訳じゃないし、普通に過ごしている分には人の夢は無限、なんでしょう？」

『覚えていたかい。やっぱり君は頭がいい』

思わず、バクはルイの頭を撫でた。小動物に対する愛情のようなものだが、もう成年に近い彼のことだ。恥ずかしがったりするだろうかと思いきや、存外大人しく、頭を撫でられている。

『こうされるの、好きなのかい？』

「普段は、嫌い。でも、バクさんののは、好きです」

ふわり、と空気が軽くなり、夢の部屋が修復されていく。落ち着いてきたようだ。普段の彼に戻っていくのだろう。

『今日はこのまま寝てしまいなさい』

「夢は……？」

『君が起きる前に食べてしまうよ』

「そう……、良かった」

ルイの瞼がだんだんと下ろされていき、やがて完全に意識を失った彼は、バクに寄りかかるように眠ってしまった。それと同時に部屋の輪郭がぼやけていく。次はもっと意識の深い所に新たな夢のフィールドが作られるのだ。

『ゆっくりお休み、ルイ。明後日は君を酷使する事になるから』

ベッドにルイを横たわらせて、バクは彼の髪を梳く。輪郭がぼやけて消えてしまうまで、バクは飽きずにルイの傍にいた。

翌日の朝、真司は事務所に向かう前に、斎に集めた情報を聞かせた。

「D2は夢に作用するドラッグらしい。それを扱うディーラーはみんな執事のような燕尾服を着ている。みんなつつても服装に気を取られて誰も売人の顔なんか見ちゃいない。結局、何人いるかは分からない状態だ」

「やつぱり、ね。猥らしいと言えば猥らしい」

奴のやり口をよく知っているらしいその口ぶりが真司は気に食わなかった。

「そいつとはどんな関係なんだよ」

口に出してから、改めて聞くような事でもないような気がして、真司は気まずそうに辺りを見回した。

「永遠の敵だよ。倒さなければいけないのに、倒せない。永遠の敵」

「永遠の、敵？」

「猥は夢を食べるって言ったよね。元々、猥には実体がない。どんなにギリギリまで傷つけても、寸での所で逃げられる。……それよりも、実体のない存在に死はあるの？」

声音は至って一人言に近く、真司に答えを要求している訳ではなかった。

「それでも、猥のやりかたは俺たち人間にとっては、受け入れられない。クスリの中毒者にして、強制的に夢を見させるなんて、苦痛でしかないよ」

「……斎、お前はなんで猥を捕まえたいんだ？ 皆の為、依頼だから、っていうのも分かるけど。本当は、何か別の理由があるんじゃないのか？」

斎の、猥に対する考えは、ただの依頼、だけじゃない。それだけでは理由が薄いように感じたのだ。斎は黙ったままだ。瞳が見えな

自分、表情が動かなければ斎の考えを読む事は不可能に近い。

「何か、言えよ」

「ム力つくからだよ」

「は？」

「人の弱い所につけ込んで、いい夢を見させて！ 楽しそうに、人をどん底に突き落とす！ それを見て笑っているんだ。あの男は！」

「……………」

斎がこんなに感情を露にするのは、真司の前では初めてで、真司はなんて声をかけていいか分からなかった。きつと、詳しい事があるのだろうが、今はそれを聞くべきではない。

「ごめんな。……嫌なこと、言わせた」

「……………いい。もう、ずっと前のことだし」

ゆるゆると首を振る斎に、真司はもう突っ込むのはやめようと決心した。

「殺された五人は、死ぬ間際には相当キレやすくなってたみたいだ。きつと他にもそんな奴らがいると思うんだが、獏を捕まえたとして、そいつらは助かるのか？」

「……獏を捕まえれば、D2の流通は減るよね。そうしたら、その人たちも、もう悪い夢は見なくなる。でも、ドラッグを併用していれば、それは分からないよ。別のドラッグの効果で悪夢は見るかもしれないし、幻覚によって自殺してしまうかもしれない」

「そうか。じゃあ、理論上、D2だけを使用していた奴は助かるってことか」

「中毒性が無ければの話だけだね」

それは難しい話だろう。成分はチヒロに調べさせなかったが、ドラッグというものは大抵、中毒性がある。だからこそ、やめるのも大変なのだ。

「手を出した方が悪いんだよ」

仕方がない、と言うように首を振る斎はどこか哀愁を漂わせていた。暗い雰囲気を払拭させるように、真司は明るい声で斎を促した。

「……さて、そろそろ、事務所に行くか。本格的な作戦は向こうで立てよう」

事務所にルイを除く幹部全員と斎が改めて集まった。

斎と面識があるのはモモのみ、しかし、チヒロにとっては顔を見ていなかったただで、モモを除いたここにいる誰よりも斎のことを知っていた。

「初めまして。安部斎さん。僕はチヒロと言います」

「あれ、俺会ったことありましたっけ？」

「いいえ、言った通り『初めまして』です。……ただ、あなたは目立つんですよ。僕はシンジとチームを守るために力を尽くした。それだけです」

言葉の中に色々と思惑はあろうが、チヒロは斎にそれ以上を踏み込ませなかった。

「ネコとアキタは初対面だよな。この事件を追ってる斎だ」

真司の言葉に斎は我に返り、頭を下げた。

「斎です。ご協力よろしくお願いします」

礼儀正しく挨拶をした斎にアキタはおろおろと辺りを見回した。普段粗野な奴らを相手にしている彼にしては、斎は見たことのない種類の人間だったのだ。

「アキタ、狼狽え過ぎだよ。しゃんとして」

チヒロに背中を叩かれながら、アキタは会釈を返した。

「いっちゃん、よろしくねえ」

急にネコに抱きつかれて斎はびっくりと身体を震わせたが、それ以上は動かないし、動けなかった。

「斎は目が見えないんだ。あんまり不用意に触るなよ」

やんわりとネコを斎から引き離して、真司は言った。

「じゃあ、そろそろ本題に移ってもいいかな」

声を発したのはチヒロで、それでみんなは各々に席についた。まずは情報を整理しなければならない。

「斎、今回の目標は売人の確保。これでいいんだな？」

「うん、根本の問題はD2だし、ば……い人を捕まえれば、D2は流通しなくなるしね。それに、きっとディーラーは彼一人だと思う」「ネコ、奴は先週の木曜日もおアシスに来たか？」

「さっちゃんクラブ？ 来てたよお。それだけは毎週欠かさないって言ってた」

「モモ、他の所での売人の目撃情報はるか？」

「色んな所であるぞ。クラブやバーにはネコが言った通り、定期的に顔を出してるみたいだけだな。売人から直で買ってる奴らに聞けば、日付も曜日もばらばらだ」

「アキタ、……ルイは？」

「クラブにはよく行ってる。あいつは大検あるし、今のところはD2を使った気配はないが、どうも、その売人っぽい奴と一緒にいたのは見たな」

「……そうか。それは厄介だな」

全員に一通り話を聞いた所で真司は言葉を切った。それを一段落とみて、チヒロは声を繋いだ。

「その売人を捕まえるには、出現する曜日が分かってるクラブの方が、都合がいいってことだね？」

「ああ、そうだ。表と裏口、両方抑える。それから中、か」

「じゃあ、アキタとネコが裏、モモと僕が表、シンジは中、だね。斎さんはどうする？」

「俺は獏を追いたい、です」

「じゃあ、中で」

てきぱきと指示を出すチヒロに真司は何も言わない。それはそれだけ彼のことを信頼しているからか。チヒロの後を引き継いで真司は口を開いた。

「斎は奴を見つけ次第、あいつの後を追え。四人は万が一俺たちが

見逃した時の為に、燕尾服を着た野郎がいたら俺に連絡してくれ。そうそういないから、見かけたら目標だと思っていい」

「でも、大人数で追いかけるのはマズインじゃねえのか？」

モモの当然の問いに真司は平然と答える。

「売人の追っ手は斎と、表か裏どちらかの見張りの三人だ。残った三人はルイを張る」

「ルイを疑ってるの？」

誰もが思っていたであろうチヒロの問いに、真司はしばらく黙っていたが、彼自身の明確な答えは返さなかった。

「……オアシスに売人が来るのは木曜日だったな？」

「そおだけど……」

「じゃあ、作戦の決行は明日の夜。6時にもう一度ここに集合だ」
そう言い残して真司はソファを立つ。至極普通に事務所を出る足音が階段を降りる音に変わるのを聞いて、モモはようやく一息吐いた。

「何考えてんだ？ あいつ」

「……分かんねえよ。いつだってシンジが考えてることは」

アキタがぼつりと溢した言葉はこの場にいる幹部全員の心情を語った。

「あの、俺、真司を追ってきます」

そろそろ手を上げて斎がそう言つと、一斉に彼に視線が集まった。斎はそれを視覚で感じることは出来ないが、いたたまれない気配だけは多いに感じていた。

「まだいたのか」

「モモ、そういう事言わない。斎さん、シンジの事、よろしく願います」

チヒロが45度上半身を傾け、手本通りに頭を下げる。それも見えないはずだが、斎はチヒロに向かって頭を下げるとヌイを伴って事務所を出た。

やはり、シンジはどこかへ行ってしまうのだろう。

いつも通り事務所に来れば、どうやら、中から人が出てくるようだ。なんとなく、開いたドアの影になるように立っていれば、出て来たのはシンジで、久しぶりに見たような気がして話しかけようかと思ったが、向けられた背は声をかける事を良しとしない、拒絶が漂っている。

今回の事件のことで何かあったのだろうかと感じたが、自分は何も言えない。バクとの作戦もある。安易に口を開かない方がいい。

「斎さん、シンジの事、よろしく願います」

ふと聞こえたのは、チーム幹部紅一点のチヒロの声だ。しかし、その内容は、なんだ。

誰かに、シンジの事を頼む、と。

後を追うのだろう。また、人の気配がする。ルイは完全に入る機会を失って、ドアの前で呆然と立ち尽くしていた。

「あっ」

出て来たのは、先日夜に会った青年。シンジが大事そうに連れていったあの青年だ。

「ごめんね」

自分がドアを開けた所為で入れなかったと思ったのだろうか。彼はルイに頭を下げて、シンジの後を追っていった。

「……あんたが、シンジさんを連れていくんだな」

やはり、彼を標的にしたことは間違っていない、とルイは拳を握った。彼がいなくなれば、シンジはこの町に残るという、バクの言葉信じて。

ぼんやりとした頭を振りながら、今度こそ、事務所のドアを開ける。

そこで見たのは、脱力した様子の幹部たちの姿だった。

「どうしたんですか？ 今すごい勢いで誰か、出て行きましたけど。」

あれ、誰ですか？」

「安倍斎。……ルイ、サトシが死んだ事件知ってるよね。その事件を解決しに来た人。警察とは無関係だけど……」

チヒロの声も後半は聞き流してしまった。

「シンジさんはこの町を出て行っちゃうんですか？」

「どうして？」

「だって、さつき、チヒロさんはあいつに頼んでました。シンジさんのことを頼むって」

「聞いてたの？ ……出て行く訳じゃないけど、でも、今はきつと僕たちでは、シンジは何も喋らないんじゃないかって思ってたね」

そう言って眉間にしわを寄せても、チヒロは相変わらず綺麗だ。

疲労感の漂う室内で、ルイは机の上に散らばった書類の束を手にとった。

「ああ、それは今回の事件の資料だよ。見てもいいよ」

「ありがとうございます」

そこにはD2の症状を書いたページや、事件現場について書かれたページ。成分や、ディーラーの目撃情報のまとめもあった。バクが言った通り、ルイが仲間とよく行っているクラブ、オアシスには毎週木曜日に出現するとある。

「俺にも、出来る事はありませんか？」

「……そうだな。明日は、オアシスに行ける？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあ、明日六時に、オアシスに行ってもらえる？ それで、執事みたいな燕尾服の男を見たら、誰かに連絡をくれないかな」

燕尾服の男、すなわちバクの事だろう。やはり、早いうちに決着をつけにきた。

少しだけ、他の幹部に引け目をもったが、ルイはこれを利用させてもらう事にした。作戦に乗ったことにしておけば、オアシスにいる事を疑われなくて済む。堂々と斎の邪魔を出来ると思ったのだ。

「分かりました。気をつけて見ておきます」

「よろしく頼むね」

にこりと笑ったチヒロに罪悪感を抱きながら、謝罪の意味も込めてルイは頭を下げた。

「真司！ 待つて！」

又いに先行させて斎は走る。真司はだらだらと歩いていた所為で距離は余り開いていなかったが、それでも斎は走った。足音に気付いたのか彼は振り返って斎が到着するのを待つていた。

「斎、そんなに急いで来なくても大丈夫だ」

「黙っていても分かってくれるなんて、そんな風に思わない方がいいよ」

「……利いた風な事を」

斎が放った言葉で、両者の間に緊張が走る。斎は全身に神経を行き渡らせ、真司がどんな行動をとったとしても対応出来るように呼吸を整えた。しかし、返ってきたのは、苦しそうな真司の声だけだった。

「……いや、分かってる。でも、なあ」

溜め息と共に吐き出された言葉に、普段の強さは見られない。そういった気配に敏感な斎は何も言わずに、先を促した。

「うまく説明できる自信がないんだ」

「下手でもいいじゃない。何も言われないより、周りは安心できる」

「そついうもんなのか？」

「そつだよ。それで、本当の所はどうなの？」

ルイに関する事だ。先程の会話で、ルイという人物が真司の仲間である事は斎も分かっていた。その上で、仲間をどうするつもりなのかを斎は聞いているのだ。

「疑っているさ。そりゃあな。売人って獏だろう？ そいつと一緒に

にいたって言うアキタの言葉を信じれば、ルイはこの事件に關与している事になる。でも、實際、どうかは分からない。もしかしたら、脅されているだけかもしれないしな。チヒロたちには、先入観をもつて欲しくないんだよ。全員で疑ってかかったら、ルイが変な方向に暴走するかもしれない。暴走して、それこそ、本当に事件に關与したら、フオーしようがない。下手な言い方、ルイに油断させておけば、周りに余計な心配をかけなくてすむんだ」

「だからって、君一人が悪者になる必要はないと思うけど」

黙っているから、味方まで敵に回す事になるんだ、と言外に責めれば、真司は分かっている、と小さな声で呟いた。

「俺は誰一人だって失いたくはないんだ」

「うん」

「サトシもだ。厄介なもん到手さえ出さなきゃ、死ぬこともなかったかもしれないに」

「それでも、手を出したのは彼らの意思だよ。君が氣に病むことじゃない」

「そうは言っても俺がリーダーだからな」

「ごめんね」

素直な齋に何も言えなくて真司は首を振った。もちろん齋からは見えないのは承知の上だ。

「とりあえずはうちに戻る。齋はどうする？」

「また、しばらくお世話になります。よろしく」

「ああ、こちらこそ」

頷いて背を向けると齋とヌイも彼を追って隣に並ぶ。

無言でも居心地が悪くない不思議な感覚に、真司はくすぐったく思いながらも、ぬるま湯のような暖かい雰囲気身に委ねた。

4、終宴 - The Last Day -

そして木曜日、午後六時半。

もう一度事務所に集まった面々はバーへと向かった。チヒロとモモは入り口の目立たない所にそのまま留まり、ネコとアキタはホールを突っ切って、裏口へ回った。真司はまだまだ盛り上がりには欠けるホールの壁に寄りかかり、周りを見回す。

「久しぶりに来たな」

「そうなの？」

「ああ、俺はバイトの方が忙しくてあんまり遊びに出てないんだ」
斎もまた、真司に習うように壁に寄りかかっていた。又伊は彼らの間に行儀良く『おすわり』の姿勢を取っている。

人はだんだんと人数を増やし、爆音で流れ始めるクラブミュージックに沸き立ち、好きなように踊り始めた。そこに年齢は関係なく人生経験の少ないカモを狙って汚い大人たちが少年たちを食い物にしていた。自分が被害に遭わないようにするには、自衛しか手段が無いのが現状であり、それが出来ていない彼らが今回の被害者になつていたのだ。

「シンジさん！」

爆音の中から辛うじて聞こえた声に真司が顔を向けると、ルイが手を振って真司に向かって来ていた。

「お前も来たのか？」

ルイの作戦の参加を聞いていなかった真司にとっては寝耳に水の出来事だ。

「昨日、チヒロさんに頼んで、俺も協力することになりました」

「チヒロめ、こういう時に限って何も言わねえんだからな」

「シンジさんがいつも何も言わないからでしょう？」

真司に対してであつてもこうやって冗談を言える所を買われて幹

部になっているルイではあったが、未成年ということもあり、喧嘩などの際は極力前線には出ていなかった。しかし、今回チヒロが許したとなれば、真司が強く言えるはずもなく、こちらが心配しているのにいい気なもんだ、と愚痴りたくもなったが、そこは詳しく説明しなかった自分が悪いと、真司は自分を納得させた。

「危ないと思ったら、すぐに逃げろよ」

「分かってます。喧嘩は得意じゃないですからね。巻込まれないように気をつけます。そういえば、俺は、はじめましてでしたっけ？

斎さん？」

「え？……俺？」

「チヒロさんに聞きました。俺はルイって言います。今日はよろしくお願いしますね」

にこりと笑って、じゃあ、また。と手を振り、人混みに紛れていくルイの後ろ姿を見送りながら、真司は溜め息を吐いた。

「本当に、巻込まれてなきやいいんだが」

「獏と会ってたって言うのが気になるね……」

二人の杞憂を他所にホールは増々熱を上げ、DJは次々とノリのいいミュージックを流す。人の熱気は最高潮に達し、誰も周りなど見ていない。人は簡単に人の中に隠られる。

そんな中、ヌイが何かを感じ取ったのかひくりとその鼻を蠢かせ、異変を斎に知らせた。

「真司、来たみたいだ。俺はこのまま獏を追うからよろしくね」

「分かってる。お前も、気をつけろよ」

「じゃあ、行つてきます」

「ああ、行つてらっしゃい」

斎が動き始めた事を入り口と裏口にいる幹部たちに伝えた後、真司は人混みをかき分けてルイを探した。普段目立つような格好をしない彼はこの人混みの中では探しにくく、躍り狂う人々の間を縫うのも根気が必要だった。

「ルイ、……何処にいる！」

獏も斎も動き始めた今、早急にルイを見つけ出さないといけない。獏と会っていたルイが何かを企んでいないとも限らないからだ。

人混みをかき分けていくと、ふと、視線の先のルイと目が合ったような気がした。彼は大人びた笑みを浮かべると、人の波を抜け、どこかへ行ってしまった。真司は慌てて後を追おうとしたが、焦れば焦るほど周りの人は真司を排除しようとし、中々前に進めない。（なんだ、あれ）

あなどどこか達観したような笑顔は見たことない。いつもとは違うルイの様子に真司は戸惑っていた。先程会ったときは普通だったのに。それとも、あのときも自分を偽っていたのか。何の為か。理由があるとすれば真司を惑わせる為だ。

「ルイ……………っ！」

叫んだ声でさえ爆音の中では掠れ、彼に届くことはなかった。ようやく人混みを抜け出た時にはルイは既に意識を失い、どうしてだか斎に支えられていた。

「斎！ お前、獏は！？」

「今、又伊に追わせてる」

「端に寄せよう。抱えられるか？」

「うん、大丈夫」

人混みの真ん中で倒れるままには出来なくて、ルイと斎をカウンターの傍に運んだ。

真司は素早く電話をかけて失敗した旨を伝え、獏を探すように指示をした。又伊が追いかけているから大丈夫だとは思うが、安心出来たものではない。捕まえて、実物を見るまでは予断を許せない状態だ。

「邪魔された！」

「ルイに、か？」

「そう。…………でも、獏に何かされたんだ。間違いないよ」

斎はルイの手首や首筋、額に手を当てながら、診察を繰り返す。その顔は焦燥が滲み出ており、油断が出来ないことを語っていた。

「これは、……ヤバいかもしれない」

齋がそう呟いた途端、元々薄暗かったクラブ内の照明の明かりが突然落ちた。

「何が起きた!？」

「分からない。けど、この状態でこの状況はマズイね」

突然暗くなつた室内ですし詰め状態だった人々は逃げ惑い、其処此処で衝突を繰り返していた。その中には異常なまでの怒りを示す者もいて、ホール内は正に乱闘状態に近い。

真司が尻ポケットに入れていた携帯が振動を始める。ディスプレイにはアキタの名前が上がっていた。

「何があつた!」

「こつちが聞きたい! 中では何が起こつてる! あいつの犬が飛び出してきて、で、吹き飛ばされたんだ!」

「データーはいたのか?」

「分からん。目立つた奴はいなかったからな」

「じゃあ、ヌイは何に吹き飛ばされたんだよ」

「さあ、知るかよ。一瞬の出来事だったんだ」

アキタの説明は全く要領を得なかったが、とにかく何かが起こつていることだけは確かだ。

「……分かつた。お前は中に来い。暴動が起きているんだ。俺はルイを運び出さないといけない」

「負傷したのか!？」

「いや、負傷はしていない。だけど、意識がないんだ。何が起こつたのかは分からないが、ここじゃ落ち着いて診察が出来ない。これから先はお前に決定権をゆだねる。この場を収める!」

「分かつた。……絶対に助けるよ!」

そんな声が聞こえる頃には、真司は電話を切り、齋の代わりにルイを背負つた。

「ヌイも失敗したみたいだ。まず裏口に回ろう。ルイは家に運んだらいいのか?」

「うん。お願い」

目が見えない斎の手首を掴んで、真司は裏口から外に出た。途中でアキタたちとすれ違ったが言葉はなく、目配せだけで互いの無事を祈り、各々の戦場へと足を向けた。

裏口には又伊がぐったりと地面に伏している。所々に電飾の破片が付いているのを見ると、又伊が激突した所為で、電気がショートしたのではないかと考えられる。

「又伊！」

さすがに主人の声は聞こえるのか、又伊は緩慢に頭を上げたが、反応は鈍い。よろよろと立ち上がり、斎の頬に鼻先を寄せる様は忠実な騎士のようだ。

「もう少しだけ、頑張つて」

斎はそつと又伊の首筋を撫で、立ち上がった。

今は何よりも先にルイの安全確保。

「そして、獏の捕獲」

「あ？」

「ううん、今はルイ君が危ないって話」

斎は真司の腕を叩き、先を促した。

真司の部屋にルイを運ぶと、斎は彼を寝かせるように真司に言い、自分はその傍へ腰を下ろした。

「真司、ちよつと良い？」

「なんだ」

斎は真司を呼ぶと、彼の目の前に携帯電話を差し出した。

「今から、信じられない話をするけど、本当だから、お願い、信じてね」

「信じるもなにも、話してくれなきゃ分かんねえよ」

真剣な顔をして言えば、声にも滲み出ていたのか、斎は顔を綻ば

せた。

「今ルイ君は夢の中に捕らわれているんだ。だから、俺はこれからルイ君の夢に潜って彼を助けなくちゃならない」

「夢に、潜る？」

「イメージとしては水に潜るのと一緒にだよ。本来ならこれは必ず二人一組でやらなきゃならないんだけど、今は俺一人でやる。だから、君には見張りをして欲しいんだ」

斎は手探りで真司の手を掴み、掌に携帯を乗せた。

「一時間たって俺が目覚まさなかったら、メモリの1番に入っている番号に電話をして助けを呼んで欲しい」

「俺は黙ってみてろってか！」

思わず握り締めた掌の中で携帯がみしりと悲鳴を上げた。アキタに啖呵を切った手前、何もしないなど考えられない。

「そう。……でも、君が見ていてくれないければ、俺も帰ってこれない。……手、握ってて。そうしたら、帰ってこれるから」

掌を真司に向けて、斎はそう言った。真司が舌打ちを一つ。苛々は充分承知の上だった。

「俺がいなかったら、ルイは助からないんだな」

「うん、そういうことだね」

「……分かった！ 早く帰ってこい！」

そう言い捨てると真司は斎の手を掴んだ。

斎はそれに頷くと、横たわるルイの手を取った。指を絡めて、祈るようにルイと手を組む。

「じゃあ、お願い」

目を閉じ、息を整えて。深く深く、ルイの夢の中へ寄り添うように斎は墜ちていった。

夢の中に潜ったという斎の身体に変化はなく、寢息のようなひそ

やかな吐息が漏れるのみだ。

渡されたアドレス帳メモリの1番。11桁の番号は相手がどんな人間なのかを語ろうとはしなかった。

手持ち無沙汰のまま刻一刻と過ぎる時間の中、真司に時を教えるのはふとした瞬間に震える斎の指と、辺りに広がる砂埃の匂いだけだ。

「何が起こってるんだ……？　なあ」

勿論、返ってくる返事はなく、真司の声は広くもない部屋に霧散して消えた。

こんなのは、自分が役立たずだと思ってしまう。

本当は違うんだ。

そんなことが漠然と頭に浮かぶ。

こんなことじゃ、駄目なんだ。

宛もなく、そんなことを呟く。

やつと……………。

一時間前にセットしたタイマーが真司の思考を遮った。

斎は未だ目覚める気配も見せず、ルイも起きようとしなかった。

自分には何もしようがないのを認めるのは恐怖さえ伴ったが、頼みの綱は渡された携帯しかない。

メモリを呼び出し、通話ボタンを押すとワンコール鳴りきらない内に回線が繋がった。

『ようやく電話をする決心ができたのかい？　佐賀真司くん』

「誰だ」

『先日電話で話しただろう？　所長の賀茂井清人、だよ』

「斎が、……起きないんだ」

『だろっね。部屋のドア、開けてくれないかな』

その言葉に弾かれたように玄関を開け放つと、開かれたドアには当たらない所に着流しを着た男が立っていた。

「生身では初めまして。斎くんに会わせてもらえるかな」

にこにこと笑顔を崩さない清人に真司が睨みを効かせても、清人の表情は変わらない。なんでここにいるのかとか、何でこの場所が分かったのかとか、言いたい事はたくさんあったが、清人の雰囲気、真司が真司に許してはいなかった。

「ぐずぐずしてる暇はないんだ。斎くんが死ねば、君の大事な人だつて死ぬことになるよ」

「死ぬ、って夢の中の話、だろ」

夢の中からルイを助けるのにどうして生き死にの話になるのか、真司には理解できなかった。その顔を見て清人も理解をしたのか、溜め息を一つして口を開いた。

「君は普段、自分がどうやって想い、考え、生きているのか、分かっているのかい？ 精神の死は即ち、人間らしさを殺す事になる」
「そういう、ことか……」

事態の深刻さに、真司は息を呑んだ。そんな真司を見ていた清人だったが、ふと思い立ったかのように真司の額に手を置いた。抵抗をしなかった訳ではないが、真司は清人の強引さには勝てない。真司はじつと身動きも出来ずに清人の顔を見ていたが、清人は、今度は感嘆のため息を一つ洩らし、彼の額から手を離れた。

「君は変な子だねえ」

「なんだと」

「君、本当に普通の子だよね？」

念を押すような言葉に真司は眉間に力を入れるが、清人は怯まな
い。

「不思議な子。君なら斎くんを助けに行けるかもしれないよ」

「本当か！」

これで役に立てるかもしれないと、斎の心は浮き足立った。汚名返上につながる大事な一番だ。ここは大事に行きたい。

「どうすればいいんだ？」

「おや、すっかり態度が変わったね」

「役に、立てるんだろう！？ 俺は何をすればいい？」

「そんな必死になって……、いや、今言うことじゃないね。じゃあ、そこに座って斎くんの手を握ってくれるかな？」

真司は言い付け通りに斎の傍に膝を付き、彼の手を握った。

「ええと、全部きちんと閉まってるよね。……オッケイ。息、吐いて。リラックスしててね」

清人は真司の背中に手を当て、息を整えた。数回の深呼吸の内、最後の一回は大きく息を吸う。

「我が言霊は世界の核である。

閉鎖空間確保。規定空間座標確認。

物理原理の指揮は仲介の下にあり、万物の構成は召喚に依存する。召喚の宣言が無い限り、空間はその有様を保持し、変化をしてはならない。

呼応の見る精神世界を仲介の無意識域に再構築、完了し次第規定空間上にこれを実装する。

空間反転法執行！」

一瞬、何が起きたのか真司には理解できなかった。ただ身体の内側からひっくり返されるような感覚だけが抜けずに思いきり叫んだ。

どれくらいの時間が経ったのか分からなかったが、耳鳴りが遠退いた頃、背後から頭を叩かれ真司は我に返った。

「うるさいよ」

その声に回りを見回すと、地面はいつの間にか砂地に変わり、真司の手には何も握られていなかった。

「ここは……？」

「君が来たがった夢の世界だよ。ほら、あそこに二人ともいるだろう？」

清人が指差した方を見ると、ルイと斎が対峙するように立っている。

「斎！」

所々に傷は負っているものの、それ以外は健全だ。真司が安堵の溜め息を吐くと、斎は彼を見つめて疑わし気に出した。

「真司、だよ……？　そっか。そんな顔してたんだね」

「あ？　……ああ、そうか、目。」

斎の瞼を覆っていた傷跡は綺麗さっぱり消え失せ、薄く茶色に光る瞳が真司を見ていた。

「シンジさんはやっぱり、そいつの方が大事なんですか？」

「お前、何を言ってるんだ」

ルイの表情は冴えない。斎はルイを助けに来たというのに、何故、対峙をするように向かい合っているのか。

『それは、斎がルイの敵だからだ』

声と共に姿を現した獏はルイの傍に立つ。獏の顔を見て、ほつとしたように肩の力を抜くルイを、真司は信じられないものを見るかのように顔を歪ませた。

「ルイ！ そいつが俺たちの敵だ。サトシを殺したのもそいつなんだぞ！？」

「……知ってます」

「なん、だと？」

「でも、俺はバクさんより、斎さんの方が憎いんです。……シンジさんを連れていってしまっから」

「何を言っている？」

『シンジがチームのみんなより、斎を大事にしたのが悪いんだよ』
にやにやと笑う獺からは悪意しか感じられず、真司は思わず本気で獺を睨みつけた。

「獺、いい加減にしてくれないか？ さっさとその子を離すんだ」

『来たね。……清人。でも、それは聞けないお願いだ。君たちがこの事件から手を引くっていうなら考えてもいいけど』

「ごちゃごちゃ言ってるじゃねえ！ 俺はお前を倒して、ルイを取り返す！」

宣言し、跳躍をした真司は一気に獺へと距離を詰め、彼の顔面に向かって、拳を突き出した。避けきれなかった衝撃が獺の前髪を散らす。思わず獺が一步、下がった所を真司は見逃さずに、彼は攻撃を再開する。蹴り出した足をそのまま踏み足に右手で正拳突き、それに加えて左足での回し蹴り。反動を殺さずに右足で再び回し蹴りを放った。

「……ちっ」

一連の動作で獺に攻撃は当てられなかったものの、その存在感はありありと示していた。

『喧嘩にも慣れてるし、君は本当に磨けば強くなれるのにな』

「あんたに教えてもらわなくてもいい」

『残念。じゃあ、ここで死んでもらおうかな』

獺はそう言つと、ゆっくり右手を空に向けた。出現するのは無数のナイフ。

『避けられるかな？』

手を一振り。たったそれだけの動作で空中に存在したナイフは真司目掛けて一斉に飛び出した。

現実世界を完全に無視している世界で真司と獺の経験の差など歴然。そのはずだったが、真司の目の前には風が吹き、ナイフは一つ残らず絡め取られ、消え去った。突然の出来事に真司の顔には驚きがありありと浮かんでいた。

「……本当に吹いた」

初めて経験しているはずの世界の理を理解しているとでも言うのか。思わず口を開け、驚きを隠せない様子の獺だったが、落ち着いた頃には肩を震わせ、我慢出来ないというように額に手を当て、笑いだした。

『ははっ！ やっぱり、君って子は！ 最高だね！ ……ぜひとも戦力に加えたい所だ』

「バクさん！」

『分かってる。君からは取ったりしないから』

「……獺、お前、その子に何をした」

自然な会話を重ねる二人に違和感を抱いたのか、清人が厳しい口調で獺に問いかけた。

『別に、何もしていないよ。ただ、この子が可哀想だったから、こうして一緒にいてあげているだけだ』

「弱みにつけ込んで騙したのか！」

『騙したなんて、人聞きの悪い。この子は自分で、シンジの為に齋を殺そうとしている』

その言葉に呼応するように、ルイは抜き身のナイフを手に齋に向き直った。

「あんたがいなくなれば、きっとシンジさんはどこにも行かないから」

ルイもまた、真司と同じように疾走し、齋に向かってナイフを突き出す。けれど齋も、何もせずに切りつけられるはずは無く、ナイフの軌道を読んでかわした。

「獾を撃退しないと、もつとたくさんの方が死ぬんだよ?」

「俺の夢を食べればいい。そうしたら、被害は大きくなるらない」

「獾はそれでは満足しない!」

斎の言葉にぴたりと動きを止め、獾を見遣る。

「本当?」

『さあ、それは君次第だよ』

「だって。……問題は無いですよ? あなたはここで殺します」

「やめろ、ルイ!」

真司は叫んで飛び出すが、獾がそれを良しとしない。

『行かせないよ。君の相手は私だ』

突き出された拳を受け止めて、真司は踏ん張る。どうにかしてルイを止めないと、本当に、斎を殺してしまうかもしれない。

『私は本当に壊れてしまった後の、ルイの夢も食してみたいと思っているんだよ。ここで、君に邪魔されるのは気分のいい事じゃないね』

ここにかわすのは、容易ではないと、真司が迷っていると、後ろから拍手が聞こえ、一気に場の空気が清められた気がした。

「縛の法、第二種、雁字!」

清人の真言と共に、獾の身体が後ろに吹っ飛ぶ。

「行け!」

鋭い言葉に、真司は弾かれたように身を翻し、斎の元へ走った。

ルイと斎の間に入り、振り下ろされたナイフを躊躇い無く腕で受け止める。骨で刃は止まったものの、じくじくと鈍い痛みが腕全体を覆った。

「シンジさん!」

「馬鹿野郎! ここで死んだら、現実で死んだも同じなんだ!」

「……………っ?」

無事な方の腕でルイの腕を掴み、ナイフを離させる。砂地に刺さったナイフはルイの創作だった所為か、風にさらわれるように砂となり、どこかへ吹き飛ばされていた。

「精神の死は即ち、肉体の死。……受け売りだが、精神が死ねば現実では何も感じる事が出来ない、ただ生きてるだけの人になっちゃう。お前にそれを背負う覚悟はあるのか？」

「それでも俺は、……あなたにここにいて欲しかった。俺を、置いてかないでください」

『ルイはずっと不安だったんだよ。君が周りに興味が無さ過ぎてね』
獏の声に振り向けば、清人が獏を引きずって歩いてくる。身動きが取れないような状態なのか、獏は抵抗する気配も見せずに、清人に付き添っていた。

『不安で不安で仕方がなかった。その時にこんな事件が起こる。そして、シンジの前に斎が現れて、リーダーは斎にご執心だ。シンジは元々チームのことに関心がない。だとしたら？ 斎と一緒にこの町から出て行ってしまうかもしれない。チームを捨てて、ってね？』

「怖かったんです。もう、ずっと前から。元々シンジさんはアキタさんたちとは仲が良かったけど、他のメンバーとは全然で、いつかいつか俺もそうなるんじゃないかって、不安だった」

ルイが俯き、真実を口にする様は見えていて息苦しかった。そして痛感するのだ。こうして辛い思いをさせている原因が自分だという事を。

「……違うよ。いつも、置いてかれるんじゃないかって不安になってたのは俺の方だ」

置いていくつもりなんてない。寧ろ置いていかれるかもしれないと思っていたのは真司の方だった。ルイは信じられない、というように目を大きく見開いて、呆然と口を開いた。

「うそ、だ」

「お前も、ネコやモモ、チヒロは幹部たちだけが繋がりにじゃない、もつと別な所で様々な繋がりをもっているだろう。……でも、俺はそれが無い。ここしかなかったんだ。俺こそ、お前に見限られたらっと思うと怖かったよ」

いつもの真司ならばこんな事は絶対に言わなかった。これは幹部

の誰にも言っていなかった真司の弱い部分だ。

「みんながそうやって新しい道を歩いていくのであれば、俺はそれの手助けをしたいし、俺も新しい道を歩んでみたいと思う」

「やっぱり、出て行くんですか？」

「チームにいても、新しい事は出来るだろう」

「じゃあ、シンジさんは出て行かないんですね？ この町にいますね？」

「そうだ」

「……良かったあ」

心の底から安堵したように息を吐き出すルイを見て、真司もまた、安堵の溜め息を吐く。上手くいけば、このままルイを連れて現実の世界に戻るのだ。

『さて、大団円もいいんだけどね？ 私はここで捕まる訳にはいかないんだよ』

パチンと、指を弾く音がしてその刹那、猿の周りに黒い影が三つ飛び出した。三つの影は地面に降り立つと四つ足の獣の姿に形を変え、清人に襲いかかった。清人は寸での所で獣の突進を避けたが、その隙に猿は真司たちから、遠く離れた所まで後退した。

「簡単に返すと思っているのか？」

『思っていないよ。思っていないとも。だから、この子たちを呼んだんじゃないか。……それにしても、清人。精神にまで食い込む縛法だなんて。随分凝った事をしてくれるね』

「いつまでも、昔のままで、あんたをどうこう出来るとは思っていないからね」

印を結び、戒めをきつくする清人に対して、猿は黒い獣をけしかける事によって、それを妨害した。

『フェンリル、スコール、ハティ！ 時間を稼げ』

「縫くヌイ>！」

叫んだ斎の前に一匹の見慣れた犬が出現する。それは、現実で、斎と共にいるヌイと酷似していた。三匹の獣が出現した時から、真

司は強い頭痛に苛まれていたが、どうもそれは彼だけではなく、ルイもまた、辛そうに眉間に皺を寄せていた。

「ルイ、大丈夫か？」

「大丈夫では無いです。恐らく、自分がイメージした物じゃないから、拒否反応が起こっているんですよ」

「色々知っているんだな」

「……バクさんの受け売りです」

斎が呼び寄せた犬と、獺が召喚した三匹の獣が激しい闘いを繰り返す。縫も黒い獣たちに引けは取っていなかったが、如何せん数に違いがある。消耗は激しいはずだ。

「真司、物理原理の指揮は君にある！ 意識を黒い獣に集中させて！ 彼らの身体だけ重くなるようにこの世界を作り替えるんだ！」

「初めての仲介人に私が引けを取ると思ったかい？ ……ルイ。妨害はしないでいい。出来るはずもないからね。ただ、私が死なないように、祈ってて」

身体はまだ辛いはずなのに、そういつて獺はルイに向かって微笑んでみせた。それは、自分を励まして、助けてくれた獺のままで、ルイは思わず、彼が死なないように祈っていた。

意識を黒い獣たちに集中させた真司はそのまま、その肢体が地面に叩き付けられる様を想像した。そして、願う。斎に怪我がないように、ルイが無事に戻って来れるように、獺を撃退できるように！ かつと目を見開いた瞬間、獣たちは地面に叩き付けられ、悲鳴を上げた。それと同時に、獺はその戒めを解き、獣たちを霧散させた。『飲み込んでしまえば捕縛も意味は無いよ。……残念だったね？ 清人』

「強がりと言った所で、碌な力も残ってないだろう」

確かに、肩で息をする獺は随分と苦しそうだ。一つ、二つ、深呼吸をして、獺は呼吸を整える。

『そう、確かに、力は残ってないけどね。……もう一回ぐらいはなんとかなる』

しかし、獏がそういった途端、彼の立っている地面がざらざらと崩れ出した。崩壊はそこだけではなく、くすんだ空も黒く塗りつぶされていく。

『何……っ!!』

「縫!」

獏が上空に逃げた瞬間を見逃さずに齋が放った縫は、獏の喉元に食らいつくとそのまま体重を掛け、落下速度を上げた。地面に叩き付けられた衝撃で縫は消滅してしまったが、獏はしぶとくもその形状を保ったままだ。

しかし、世界の仲介を行った真司の額には大粒の汗が浮き、眉間に皺を寄せ、頭痛に顔をしかめている。初めての仲介で、長く保てるはずもないのだ。すでに彼の精神は限界まで酷使されている。

「持たなかったか」

舌打ち混じりの清人ではあったが、このまま世界が崩壊すれば、獏だけではなく清人たちも現実世界に戻る事が出来なくなってしまう。

『やってくれたね。でも、シンジももう持たないだろう! 決着は次回に持ち越しだ!』

喉を切り裂かれ、濁った声を響かせながら、文字通り血を吐くようにして獏は呪詛めいた言葉を吐き出す。吹き上がった血は顔面も染め、目はぎらぎらと底光りしていた。人間ではない彼に死という概念は存在しないが、肉体らしきものがある以上それを極限まで破壊すれば、獏は存在する事が出来ない。実体が保てなくなっただのか、獏は身体をもやに変え、そこにいた全員の視界を奪った。

『やはり君の存在は捨てがたい、シンジ。君の大事なものを奪ってあげるから、こちらにおいて』

耳元でそう言われ、真司が咄嗟に守ったのは傍にいたルイだった。頭を守るように抱き寄せて、覆い被さる。しかし、獏の狙いはルイではなかった。真司の肩から首筋にかけての部分がまるで火傷を負ったかのようにじくじくと痛み出したのだ。

「……あつ！」

『いつかまた会おうじゃないか。その時まで死んでしまわないようにね』

その言葉を最後に霧は一斉に霧散し、視界が開けた。真司は首筋の痛みに耐えられず、首を押さえて蹲った。

「シンジさん！」

ルイが真司の首筋を看ても特に変化は無く、ルイは首を傾げた。

「とりあえず、獏も退散したようだし、世界が崩壊する前に一度戻るよ」

清人はそういつと柏手を一つ打ち、真司の背中を両手で叩いた。

途端に來た時と同じように体の内側からひっくり返されるような感覚が真司を襲い、真司は奥歯に力を入れて悲鳴を噛み殺した。

5、終わりの時、始まりの時 - Step by Step -

早鐘の勢いで動いていた心臓がようやく弱まった頃、真司はゆっくり目を開けた。眼前にはすっかり目を覚ましたルイがいて、真司の手には斎の手がしっかりと握られている。二人が無事だったことに安堵して真司は息を吐き出した。

「お疲れさま。切られた左腕は大丈夫かい？」

「あ、そういえば」

ルイが振り下ろしたナイフを受け止めた左腕を動かしてみる。動作に違和感はないものの、痛みは少しだけ残っていた。

「違和感はないから大丈夫だと思う。……それよりも首が痛い」「そうだ。ちよつと見せて」

清人は座ったままの真司の首筋を診る。見た目にはなにも変わりはなかったが、真司は火傷のようなじくじくした痛みを感じていた。「ああ、これは厄介なものを付けられたね」

清人の目には何が映っているのか、真司が痛みを感じるピンポイントを彼はしっかりと触れる事はせずに指の腹でそつと触れた。

「すごい、痛い」

「しばらくは痛むよ。異物が入ったのと同じだから、拒否反応が起こつてるんだ」

清人は持参したバッグを探って札を何枚か取り出し、真司の首筋に貼り付ける。完全に痛みが無くなった訳ではないが、随分と引いたような感覚だった。

「結局、これは何なんだ？」

「印、だよ。これがある限り獏は君を見失うことはない。一種の道標だ」

「これがあるとどうなる」

「日々の生活には支障はないだろうけどね。獏が復活したら君をど

うにかあちら側に引き込もうとするだろうね」

「復活、するのか？ あの状態で？」

「獏は実体を持っている訳ではないけど、今回は実体を保てなくなったから退散しただけであって、力が溜まればまたこちらにも出て来る」

完全にいたちごっこだよ、と清人が溜め息を吐けば、斎も何ともいえない顔をして頷いた。

「君一人じゃ今回のように他人の夢に攻撃を仕掛けられた場合、助けにいけない。今回は大丈夫だったけど、君はもう少し自分を守る術というものを身につけた方がいい。荒削りの戦法は危険だよ。…それで、提案んだけどね」

少し言いづらそうに清人が言葉を切った。真司の中でも清人の提案が何なのかは薄々感づいてはいた。

「うちに来ないかい？ 斎くんもいるし、僕も君を全力でサポートしてあげられる。向こうのことや仕組みも教えてあげられるし、君の能力を伸ばす事も出来る。悪い話ではないと思うけれど、君がここを出る覚悟があるかどうかが問題だね。ルイくんたちと離れる事は出来る？」

ああ、獏が言った『大事なもの』とは、ルイや真司単体を指したものでなかった。真司に印を付ける事によって彼自身にチームを捨てさせようというのだ。

「悪趣味だ」

「獏は本来悪夢を食すのを生業としているからね。気に入った人間を気分悪くさせる為には何でもするような男だよ」

誰とも無く息を吐き出した。

真司の脳裏に浮かぶのは、ここにはいない幹部たちの顔。けじめを着けなくてはなるまい。

「……少し時間をくれないか」

「そうだね。じゃあ、三日。しっかり悩んでくれていいよ。君の一生を左右する問題だから」

清人は連絡先を書いた紙を真司に渡すと、三日後に、と言って齋を連れ、真司の部屋を出て行った。

部屋に残されたのはルイと真司。お互いに何を言うでも無く、ただ、沈黙の中に身を埋めた。

「シンジさん。電話、鳴ってます」

ルイに言われて床に置きっぱなしだった携帯を持ち上げると、電話は切れてしまったが、ディスプレイには大量の着信履歴が残っており相手は全てチームの幹部たちだった。

真司が折り返しアキタに電話をかけると、彼にしては珍しくニコールも立たないうちに通話状態になった。

「シンジ！ ルイは大丈夫か！？」

「元気でいるよ。代わるか？」

「ああ、……それより、急に騒動が治まっちゃったんだが、これはどういうことだ？」

「詳しく話せるか？」

「チヒロに代わる」

ざわざわと喧噪がバツクに聞こえる中、随分久しぶりのような気がするチヒロの声が聞こえた。

「暴れてた人たちが急に大人しくなっちゃったんだよね。気持ち悪いくらいにぴたって止まって、それからはどうも呆然としてる感じ」

夢の中の時間が現実世界と同じとは限らないが、それは獺が黒い霧になったことが原因だろうか。兎に角、D2の売人がいなくなったのだ。危機は去ったか。

「暴れてた奴ら、全員D2の常用户かもしれない。聞いてみる。それと、現在出回ってる以上のD2はしばらく出回らない」

「それは、どういうこと？」

「大元が崩れたんだ。復活するのはずっと先だろうよ」

どれくらいの早さで獺が回復するかは分からないが、しばらくは無事だろう。

「分かった。……ルイに代わって」

携帯をルイに手渡しして、真司は台所に引っ込んだ。とりあえず、飲み物が欲しい。今だってまだ、頭の中が上手く整理出来ていないんだ。

今のままでは獺に対抗していくのも難しいだろう。

それはあまりにも明確で真司は反論をする気にもならない。闘うには夢の世界のことも、自分が扱える力についても知らないことが多すぎた。対抗手段を探るためにも、清人と行くのが妥当なのだろう。しかし、だけど……。

「俺は、チームを出なければならぬな」

ここにいるままでは集中することも出来まい。

変わるきっかけでもあるが、あまりにも急だ。

シンクの淵に手を付き、溜め息を吐く。決心することは容易ではない。

「シンジさん。アキタさんが代わって欲しいそうです」

台所に顔を出したルイから携帯を受け取り、耳に当てる。

「もしもし……」

「何かあったのか？」

心配そうな声に、真司は苦笑した。きつと情けない顔をしているのだろう。

「まあな」

「今から出れるか？ 今回の事、ちゃんと聞いておきたいんだよ」

「お前に話しても分かるかどうか」

「チヒロもモモもいる。どうにかなるだろう。今回ののはいつもと違う、そうだろう？ お前は自分の内に籠りすぎなんだよ。もっと、俺たちを頼れ」

そつと、目を閉じた。今日の事、これからの事。色々と話しておかないとな。

真司は深呼吸を一つして目を開いた。

「分かった。事務所に今から集合しよう」

『夜に事務所に集まるなんて、初めてじゃないのか？』

「ああ、チーム初だ。ちょうどいいだろ」

じゃあまた後で、と電話を切り、ルイを呼んだ。

「今から事務所で会議だ。今回の事、全部話す」

「……分かりました」

俯いたルイの表情は読めないが、複雑な心境にいるのだろう。

「結局、出てかなきゃいけないのかもな。……約束、守れそうにない」

「………仕方ないです」

折角、チームにいて、新しい事をしていくと言っていたのにこの仕打ちだ。真司はルイにどんな言葉をかけてやればいいのか、分からなかった。

事務所で真司は今回の事が人外が存在が起こした事件であること。その大元は撃退したものの、いつかは戻ってくるかもしれないということ。自分が負傷し、チームを離れなくてはならないことを話した。

「僕は齋さんが来てからずっと、こうなるんじゃないかって思ってたよ」

ぼつりこぼしたのはチヒロ。アキタに寄り添うように、真司とは目を合わせずに言った。

「きつと、齋さんがシンジを連れて行くんだと思った」

「行くか行かないかは自分で決める」

「うん、それは分かっているけど、シンジを変えたのは彼でしょう？」

否定は出来なかった。真司の生活に食い込んでかき乱していったのは齋だ。今までの生活を違ったように見れたのは齋のおかげだった。

「僕はいい機会だと思うよ。シンジにとっても、僕らにとってもね。」

アキタは？」

「俺か？ 俺は別にシンジが決めたんならそれでいいだろ」

「うん、模範解答。モモは？」

「俺は誰が上になるうが、やることは変わらねえよ」

「そうだね。ネコは？」

「ボクはシンちゃんがいなくなったらさみしいよ。シンちゃんがいーダーじゃない赤狼なんてヤダ」

「分かってる。……ルイは？」

幹部一人一人の言い分の最後がルイなのはチヒロも考えてのことなのだろう。四対の目がルイを見据える。

「本当は、本当はシンジさんにここにいて欲しいです。でも、シンジさんは俺の所為で怪我をしたんです。俺にシンジさんを引き止めることなんて出来ません」

気丈な言い方はしているが、目を見れば縋り付くように真司を見ているのは分かった。これを振り払えという、諸悪の根源である獏の顔を思い浮かべて、腹の底に何かどろどろとした怒りが込み上げてくるのを真司は感じていた。

「すまない。俺はやっぱり行くよ。いたちごっこだろうが、獏は俺が何回でも倒してやる」

「チームはどうするの？」

「……チームはどうかこのまま続けていってもらえないか？ 信念さえ守って貰えれば名前を変えることだって構わない。ここはこの街の住人の唯一の逃げ場になってやれるんだ。頼むっ！」

座ったままではあったが、真司は深々と頭を下げた。それを見て慌てたのがルイとネコだったが、チヒロは落ちついた様子でアキタを見た。

「どうするの？ 副リーダー？」

「続けることに異議なんかある訳ないだろう。俺たちにとってもここは居場所だ。でも、お前がやってきた中で俺たちが不満に思っていた所は直させてもらう。……ワンマン運転過ぎたんだよ、お前は

もつと頼ってくれても良かったんだ」

下を向いたまま、真司は何とも言えない表情で唇を噛んだ。視界が狭くなっていたんだろう。周りなど何も見えていなかった。

「とりあえず、クスリに手を出さない、入りたいと言ってきた奴は誰でも受け入れる、パクられるようなことはしない、で良かったか？」

一つずつ指を立ててカウントするアキタがおかしくて真司は思わず声を上げて笑った。

「ああ、それで上出来だ」

「次のリーダーはアキタでいいの？」

「他にやりたい奴はいるか？」

真司が改めて聞けば、反対意見は無し。元々、副リーダーになっているのも適任なのがアキタだったからであって、繰り上げになるのは至極普通の事だ。

「じゃあ、副リーダーはルイ、お前がやれ」

「俺ですか!？」

「ああ。でも、お前はまだまだ経験も少ないし、慣れてもないだろうからまずはアキタに引付けいて色んなことを見ることが大事だ。それから、夜遊びもいいけど、大検があるんだからほどほどにしろよ」

ルイの頭を撫でて真司は告げた。

「お前のことはみんなが見ていてくれるから、ちゃんと頼るんだぞ。俺みたいにならないようにな」

苦笑いを浮かべて真司は立ち上がる。これで、ここともお別れだ。

「今まで本当にありがとう。楽しかった」

「もう来ないみたいない方だな! 全く」

「たまには帰ってきてよ? 待つてるから」

「坊主の事は任しておけ。きっちり教育しておいてやる」

「シンちゃん、寂しいよお。本当に遊びにきてね。メールもするかねえ」

「シンジさん、無理しないでくださいね」

「ははっ、それはお前だよ。変に気負わないで、自分のペースを守るんだぞ」

それぞれの別れを背に真司は事務所を出る。他のメンバーへの連絡は残った四人がやってくれるだろう。これ以上自身が関わる必要はない。事務所へ続く階段を下り、入り口を出るとそこは全くの無音の世界で。歩き出して初めて、自分には仲間と呼べる存在がいなくなった事を知った。それはもちろん真司の錯覚であり、チームを抜けたからといってルイたちが全くの他人になる訳ではない。それでも、今までのような関係とは違ってしまった。それはもう仕方のない事なのだ。

やるべきことはもう決まっている。後は歩き出すだけなのだ。

真司はビルの全貌が目に入る位置まで後退し、世話になったビルに向かって静かに一礼をした。

次の日にはバイトをやめさせてもらい、家具を売り払った。部屋も明日付けで出て行く事を話し、退去の相談を行った。

清人に連絡を取ると、迎えに行く、と返答があり、とうとうこの町を出て行くのだと実感が湧いてきた。がらんとした部屋に寝転がると、思い出すのはチームで過ごした日々で、意外とチームのことが好きだったんだな、と真司は呟いた。

当日、真司の荷物は段ボール一つとボストンバックだけだ。大家の立ち会いで退去手続きを行って、迎えに来た清人の運転する軽トラックの荷台に乗り込む。助手席には斎が座り、窓を開けて気持ち良さそうに風に吹かれていた。

次第に遠くなる町並みを真司は心に刻み付けるように、精一杯目を見開いていつまでも、いつまでも町を見続けていた。

やがて、見知らぬ風景が広がり始めると、真司は新しい生活に胸

を躍らせた。現金なもので故郷を去る事は難しくとも、やはり新しい生活と言うものはなんでも心躍るものだ。無機質なビルの多い青竜胆町とは打って変わった住宅街の雰囲気は、穏やか過ぎて真司は少しくすぐったさを感じた。

「ここはなんて町なんだ？」

「橙壇原町。今日は車で来たけど、青竜胆町までは電車で二十分って感じかな」

電車で二十分。どうも中途半端な近さだ。いつでも帰れる代わりになかなか決心がつかないそうだ。

「もうすぐ着くよ」

そう言われて真司は荷台の上で立ち上がった。一般的な家々の中に一つだけ異様な雰囲気を放つ門が見える。本能というか、真司の中の何かが警告を発した。

門が近付く。どうか通り過ぎてくれ、と念じた真司の思いも虚しく、トラックは門の中へ入った。

「……………これは？」

どう見ても人が住んでいるようには見えない荒廃振りに真司は言葉が出なかった。

「賀茂井相談事務所。……通称、幽霊屋敷」

立派な日本家屋と広大な日本庭園があつたのであろう場所は草木が生え放題で、家にも蔭が這っている。外からは明かりも見えずに人の住んでいる気配は見えない。……なんの冗談だろうと思ってしまう。

「斎くんは目が見えないし、僕はめんどくさがりでね。妹は家を空けがちだから、どうしてもこうなっちゃうんだよね」

ははは、と陽気に笑う清人の後ろ姿を信じられないものを見るような目で見つめるが、状況が良くなる訳ではない。

「ほら、早く荷物持ってきて来て、迷うよ？」

家の中でどうやって迷うというのか、真司はすでに清人について来た事を後悔し始めていた。

「まずは、……掃除か」

「やった。……そういつてくれると思ったよ。そうだ。修行の始めに忍耐力をつけようか」

「取って付けたように言いやがって……」

飄々と言つてのける清人に溜め息をついて、真司は青竜胆町にいる仲間たちへと思いを馳せた。

6、次の宴へ - Next Game - (前書き)

後日談の蛇足部分なので、さらっと流してください。

6、次の宴へ - Next Game -

それから真司は半年をかけて屋敷の中を掃除し、草を刈り、ゴミを出して漸く本来の屋敷の綺麗さを取り戻した。

大変ずばらな家人の為に家事全般は真司がこなし、気分はすっかり専業主夫だ。

「斎、洗濯出しとして。清人さん、あんたもです！　そうやって溜めるから半年前みたいになるんでしょう」

何をしていると言う訳でもない。ただ、日々を過ごしているだけにも関わらず、真司は充足感を味わっていた。洗濯機に服を詰め込んでいると、ふと玄関に置いてある年期の入った黒電話が唸りを上げる。

電話番号は下っ端の仕事、と押し付けられて実に初めての電話である。

「はい、賀茂井相談事務所」

勢いよく出たのがいけなかったのか、受話器の向こうで短く息を吸い込む音が聞こえた。

「……、相談ですか？」

先程よりは幾分か語気を押さえた声でゆっくり話すと、雑音の中から女のか細い声がする。

『主人が、目を覚まさなくなったんです』

依頼だ。それと共に獏が関与している可能性がある。不謹慎にもにやける顔を押しさえられずに真司は肩を押さえた。半年前、獏に付けられた印がじくりと痛んだ気がした。

「依頼ですね？　今所長を呼んで参ります。少々お待ちください」
夢と無意識を渡る真司の戦争が今静かに始まりを告げた。

6、次の宴へ - Next Game - (後書き)

ここまで読んでくださった方に最大の感謝を！
本当にありがとうございます。

もしよろしければ、意見、感想をよろしくお願いします。

登場人物一覧（一応ネタバレはないかと・・・）（前書き）

健忘録用に。

登場人物一覧（一応ネタバレはないかと・・・）

佐賀真司＞サガ シンジ＜……主人公。赤狼のチームリーダー。赤毛で、ツナギを愛用している。

安倍斎＞アベ イツキ＜……町の外から事件を調べにきた青年。瞼を横断する傷跡があり、盲導犬のヌイを連れている。

・赤狼幹部

ルイ……最年少幹部。特に特徴のない外見。どこにでもいるような青年。

チヒロ……情報屋。整った美貌で情報を集める。評判も高く、赤狼に入る前は荒稼ぎをしていたらしい。

アキタ……副リーダー。頼れる兄貴分。熊のようにガタイがいい。モモ……情報屋。だが、肉弾戦も得意。下っ端に慕われる。幹部内ではいじられ役。

ネコ……奇抜なデザインの服を好み、語尾を伸ばす特徴的な話し方をする。

・青竜胆町外

久波凌悟＞クナミ リョウゴ＜……刑事。本庁勤務。昔は青竜胆町でチームのリーダーをしていた。

賀茂井清人＞カモイ キョヒト＜……賀茂井相談事務所の所長。くえない男。着流しを愛用。

獏……夢を食べるイキモノ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8704j/>

D2-Dream Devil-

2010年10月8日15時24分発行